

「マタイ1章 メシアの誕生」

イントロ:

1. 今という時代はどういう時代なのか。
 - (1) 安倍晋三首相の退陣
 - (2) 明治維新以来初めて、方向性の見えない時代が到来した。
 - (3) IT 時代は情報の洪水の時代。しかし、必要な情報は手に入らない。
2. マタイがこの福音書を書いた時代は、どういう時代なのか。
 - (1) 過去の栄光が消えた時代。
 - (2) ローマの圧制に苦しめられていた時代。
 - (3) イエスとの出会いによって、人生観、歴史観、世界観が一変した。
 - (4) 歴史はメシアが地上生涯を歩んだ 30 数年の期間に収れんし、そこから拡散してきたという認識。
 - (5) 原点である「30 数年」に立ち返り、その延長線上に今を見る。
3. マタイの福音書を毎回1章ずつ取り上げ、時代性を考慮しながら解説する。
 - (1) 単なる解説ではない。不動の確信を得るためのメッセージ。
 - (2) その確信とは、「神は我らとともにおられる」というものである。

マタイ1章は、「神は我らとともにおられる」という真理を理解する助けとなる。

I. ユダヤ人のためのメシア

1. マタイはユダヤ人に対してこの福音書を書いた。
2. 「アブラハムの子孫」とは、メシア称号。メシアはユダヤ人である。
3. 「ダビデの子孫」もまた、メシア称号。メシアは王である。
4. 旧約聖書と新約聖書との連続性の認識が重要である。
(例話) 旧約聖書と新約聖書の間の紙を破る教授。

II. 異邦人のためのメシア

1. ユダヤ人の系図としては異常な要素が含まれている。
2. 名前がところどころ省略されている。

3. 4人の女性の名前が出ている。
 - (1) 全員異邦人。
 - (2) 3人は性的な罪を犯した女性。
 - ①タマルは舅ユダによって子をもうけた女性
 - ②ラハブはエリコの町の遊女
 - ③バテ・シェバ(ウリヤの妻)はダビデ王と姦淫の罪を犯した人妻
 - (3) ルツはモアブの女。先祖はロトとその娘の近親相姦により誕生(創 19:30 以降)
4. マタイは、ユダヤ人のために書きつつ、異邦人の救いも視野に入れている。
5. いかなる人でも、招かれている。

III. 処女降誕の必然性

1. 「ソロモン」(7節)と「エコニヤ」(11 節、12 節)という名前
2. ソロモン-エコニヤを先祖に持つ人物はメシアの資格がない(エレミヤ 22:30 参照)。
3. ヨセフの息子のイエスがメシアであるはずがない。
4. この矛盾を解決する方法は、処女降誕しかない。
5. イエスは父親のヨセフとは血のつながりはない。
6. イエスは母親のマリヤとのみ血がつながっている。これがルカ3章の系図の意味。
(例話)クリスチャンの中にも、処女降誕が信じられない人がいる。
マタイは、エコニヤ問題を解決するために処女降誕という信じがたいものを提示。

IV. 処女降誕の実際

1. マタイはヨセフの物語として書いている。
2. 処女降誕の強調
 - (1) 18 節 「ふたりがまだいっしょにならないうちに」
 - (2) 23 節 「見よ、乙女(処女)がみごもっている…」(イザヤ 7:14)。
当時のユダヤ人は、この預言の「乙女」とは「処女」とであると認識
 - (3) 25 節 「子どもが生まれるまで彼女を知ることがなく」
3. その後、ヨセフとマリヤは少なくとも6人の子を得た(息子4人、娘2人、マルコ 6:3)。

結論

1. クリスチャンの確信とは、「神がともにおられる」ということ。
2. ヨセフは信じ、結婚の約束を全うした。
3. そして、それはすべて神の計画通りであった。

「マタイ2章 メシア預言の成就」

イントロ:

1. マタイの福音書を毎回1章ずつ取り上げ、時代性を考慮しながら解説する。
2. 聖書の世界観
 - (1) 世界はサタンの支配下にある(海外から日本に帰国した時の印象)。
 - (2) そこに「神の国」が侵入してきた。
 - (3) 個々の戦闘では負けることもあるが、最終的な勝利は決まっている。
 - (4) この図式が、インターネット空間にも広がっている。
3. マタイはそういう世界観を前提に2章を書いている。
 - (1) ヘロデ大王の背後に働くサタンの力。
 - (2) 東方の博士たち、またヨセフの一家の背後に働く神の導きと守り。
 - (3) 創世記3:15に預言された戦いが、最終的な局面を迎えている。
4. マタイは4回メシア預言を引用している。
 - (1) ユダヤ人のための福音書。
 - (2) 異邦人の私たちには難解な箇所。
 - (3) 「メシア預言」をキーワードに、神の国の勝利について語ってみたい。
 - (4) 希望と力を受けるために、苦難の中にいる人に忍耐が与えられるために。

マタイ2章は、「メシア預言」というキーワードで読み解くことができる。

I. マタイ2:6 → ミカ5:2

1. ラビたちが用いた4種類の引用法。第一番目は「預言が文字通り成就した」というもの。
2. 東方の博士たち
 - (1) バビロンの占星術師たち。科学者たちのこと。
 - (2) 3人ではなく多数。
 - (3) ダニエル9:24~37 メシアの来臨の時期を預言している。
 - (4) ダニエルはバビロンの占星術師の長であった。アラム語で書かれている。
 - (5) 民 24:17 バラム(バビロンの占星術師)。「ヤコブからひとつの星が上り」
3. 彼らを導いた星
 - (1) その方の星。
 - (2) 東から西に、北から南に、最後は一軒の家の上にとどまる星。
 - (3) シャカイナグローリー。(羊飼いたちもシャカイナグローリーに導かれた)。

4. ヘロデの反応

- (1) 偏執狂であるヘロデは、恐れ惑った。エルサレム中の人と同じ。
- (2) 専門家を集めて、メシア(キリスト)誕生の地を調査させる。
- (3) ユダヤのベツレヘム。ミカ5:2。ラビたちの常識。
- (4) ヘロデは博士たちを呼んで星の出現の時間を突き止め、嘘とともに送り出す。

5. 博士たちの礼拝

- (1) 星が再び現れる。
- (2) 家に入って、幼子を礼拝する。最初の異邦人によるメシア礼拝。
- (3) 贈り物。
 - ①黄金(王)
 - ②乳香(神性)
 - ③没薬(死)

6. 私たちへの教訓

- (1) 近い人と、遠い人との対比。
- (2) メシア礼拝は、犠牲を払うに値するもの。

II. マタイ2:15 → ホセア 11:1

1. 第二の引用法。実際の歴史的事件を取り上げ、それを「型(タイプ)」として説明する。
2. 「型(タイプ)」があるなら、「本体(オリジナル)」がある。
3. 出エジプトとは、神の子である「イスラエルの民」がエジプトから救出された事件。
4. 「本体(オリジナル)」は、御子イエスの救出。
5. 「エジプト」とは「ヘロデの脅威」のこと。
6. 実際に起こった内容
 - (1) 主の使いが夢に現れる(ヨセフ中心の記述)。
 - (2) 「幼子とその母」。イエス中心。
 - (3) 資金は、すでに用意されていた。
7. 私たちへの教訓
 - (1) クリスマン生活には、敵からの妨害がある。
 - (2) しかし、神は必ず私たちを「エジプト」から呼び出してください。
 - (3) その確信をもって、この世に出よ。

Ⅲ. マタイ2:18 → エレミヤ 31:15

1. 第三の引用法。実際の歴史的事件を取り上げ、それを適用(相似点が一つあればOK)。
2. ヘロデは残忍な王。
アウグスト:「ヘロデの息子であるよりも、ヘロデの豚である方が幸いだ」
死ぬ前に、妹のサロメに遺言。ユダヤ人の指導者たちを殺せ。
3. ベツレヘムの2歳以下の男の子をひとり残らず殺させた。
4. エレミヤ 31:15 を引用
 - (1) ユダヤ人の息子たちが、バビロンに連行されようとしている。
 - (2) 母親たちがラマ(エルサレムの北にある町)で嘆いている。
 - (3) ラケル
 - ①ヤコブ(イスラエル)の最愛の妻。
 - ②ラケルはイスラエルの母の象徴。
 - ③ラケルはラマの近くに葬られた(現在のラケルの墓は違う)。
 - (4) ベツレヘムの母親たちは、2歳以下の男の子たちを失い、嘆き悲しんでいる。
 - ①相違点は、多い。ラマとベツレヘム、捕囚と殺害。
 - ②二度と会えないという意味では、同じ。
5. 私たちへの教訓
 - (1) 悲惨な出来事の先にある希望の光。
 - (2) エレミヤは、捕囚からの帰還について預言した。
 - (3) 神の計画を長い目で見ると、ラケルの嘆きは捕囚からの帰還という希望への序曲。
 - (4) ベツレヘムで起こった嘆きは、メシアによってもたらされる希望への序曲。
 - (5) 悪の力と神の国とがぶつかり、深い嘆きがもたらされた。
 - (6) しかし、やがて神の国が最終的な勝利を得る。

Ⅳ. マタイ2:23 → 「預言者たち」の預言

1. 第四の引用法。メシア預言を要約した引用法。
2. 「この方はナザレ人と呼ばれる」という預言は旧約聖書にはない。
3. ヘロデの死後
 - (1) ヘロデの王国は3人の息子たちに分割された。
 - (2) ユダヤを継承したのは、アケラオ(3千人を殺した残忍な王)。
 - (3) ガリラヤを継承したのは、ヘロデ・アンティパス。
 - (4) ベツレヘムではなく、ナザレに帰還する一家。

4. ナザレ人の意味

(1) 紀元1世紀のユダヤ人の認識。北は愚か、南は賢い。

「金持ちになりたければガリラヤへ、賢くなりたければエルサレムへ」

(2) エルサレム神殿崩壊(70 年)以降、ユダヤ教の中心はガリラヤに。

(3) イエスは、さげすまれた寒村ナザレで育った。

5. 私たちへの教訓

(1) 徹底的に「仕える者」の姿をお取りになったイエス。

(2) その最後が十字架である。

(3) ここにいる私たちから「仕える者」になろうではないか。

結論

1. メシアは文字通り、ベツレヘムで誕生された。
2. 神の子イエスがエジプトから救出されたように、私たちも救出される。
3. 神にあっては、悲しみは必ず希望につながる。
4. クリスマス生活は、しもべとしてイエスの足跡をたどる生活である。

「マタイ3章 バプテスマのヨハネから学ぶ」

イントロ:

1. マタイの福音書を毎回1章ずつ取り上げ、時代性を考慮しながら解説する。
2. 9月21日のメールマガジンの内容:現代の牧師は何を語るべきか。
 - (1) 裁きか愛か。
 - (2) 講解説教か主題説教か。
 - (3) バプテスマのヨハネという人物から学ぶ。
3. 3つの部分に分けて、先駆者の働きを考える。
 - (1) 人々の心を整える。ホップ。
 - (2) メシアを紹介する。ステップ。
 - (3) 働きの結果を見る。ジャンプ。

バプテスマのヨハネの働きを3つの部分に分解することによって、現代のクリスチャンが何を為すべきかが明らかになる。

I. 人々の心を整える。ホップ。

1. 場所:荒野
2. 人物
 - (1) 服装と食事:らくだの毛の着物、皮の帯、食べ物はいなごと野蜜。
 - (2) 旧約聖書のエリヤの姿を彷彿とさせる。
 - (3) イザヤ 40:3、マラキ3:1の預言の成就(「預言が文字通り成就した」)。
 - (4) 神の準備があるから、人々が動く(恵比寿は荒野である)。
3. メッセージ
 - (1) 「悔い改めなさい」
 - ①当時のユダヤ人の考え方。悔い改めが必要なのは異邦人だけ。
 - ②これは、新鮮なメッセージである。
 - ③裁きのメッセージではなく、愛を前提としたメッセージである。
 - ④ローマ5:8
 - (2) 「天の御国が近づいたから」
 - ①神の国の到来。「神の国の福音」。
 - ②十字架による罪の赦しという福音ではない。
 - ③神の国の王、メシアが来られる。

(3) 「バプテスマを受けよ」

- ①一体化。
- ②ヨハネのメッセージに同意。
- ③ヨハネが示すメシアを受け入れる。

4. 人々の反応

(1) 一般の人々

(2) パリサイ人とサドカイ人

- ①サンヘドリンからの使者
- ②メシア運動の調査の第一段階
- ③洗礼を受けに来たのではない。直訳:「彼(ヨハネ)のバプテストに来た」
- ④「まむしのすえたち」。外側は美しいが、内側には毒がある。
- ⑤「先祖はアブラハムだと思うな」
- ⑥「石」とは異邦人のこと。異邦人の救いの預言。
- ⑦「斧が置かれている」とは、紀元 70 年のエルサレム陥落に近いという意味。

(例話) 語るべきことを語る。イスラエル聖書大学のヨエルさんと奥さんの救い。

「自分で聖書を読んだら」。イザヤ 53 章はイエスの預言。

ヨエルさんが救われた後、奥さんはマタイの福音書を読み、ひと月後に救われた。

「どうして誰もこのことを教えてくれなかったの」

II. メシアを紹介する。ステップ。

1. メシアと自分との比較

- (1) 奴隷として仕える資格さえない。
- (2) あなたがたが神の器だと思っているこの私でもその程度である。

2. バプテスマの比較

- (1) 水のバプテスマ(ユダヤ人の方法は、浸礼のみ)
- (2) 聖霊と火のバプテスマ
 - ①本物と偽物とのより分け。
 - ②麦とはメシアを受け入れる者。倉とは「神の国」。
 - ③殻とは不信仰者。消えない火で焼き尽くすとは「地獄に投げ込む」。
 - ④信じる者は聖霊によるバプテスマを受け、神の国に入る。

I コリント 12:13

- ⑤信じない者は火のバプテスマを受け、地獄に投げ込まれる。

Ⅲ. 働きの結果を見る。ジャンプ。

1. イエスがガリラヤからヨルダンに到着。
 - (1) 収穫の喜び。
 - (2) 日々の体験として、「収穫の喜び」がある。
2. なぜイエスはバプテスマを受ける必要があったのか。
 - (1) 「正しいこと」を実行するため。モーセの律法。
 - (2) ヨハネのメッセージに同意するため。神の国の福音。
 - (3) 罪人と一体化するため。Ⅱコリント5:21.
 - (4) メシアであることを証明し、公生涯を開始するため。
3. 予想しなかった祝福
 - (1) 今回私は、バプテスマのヨハネの目で見ることができた。
 - (2) 三位一体の神の自己啓示。悟りでも、努力でもなく、啓示である。
 - ①子なる神であるイエス
 - ②鳩の姿をとって下った聖霊
創世記1:2
後代のラビ文書はその鳥を鳩とする。
ユダヤ人たちに分かるように。
 - ③父なる神の声
マラキ以来、預言者は絶えた。
福音書に、「バット・コル」は合計3回ある。
マタイ17:5
ヨハネ12:28
 - (3) 破壊された天地を再創造する業は、いよいよ最盛期を迎えた。
 - (4) 私たちはその壮大な事業に召されている。

結論

1. 人々の心を整える。ホップ。
愛の関係を築き、悔い改めの必要性を説く。
2. メシアを紹介する。ステップ。
イエスの栄光と尊厳
イエスの犠牲的な愛
3. そして、働きの結果を見る。ジャンプ。
すべて主の自己啓示と権威による。

「マタイ4章 メシアの戦略」

イントロ:

1. 時代は、「内側に向かう」、つまり、「内面の浄化と可能性」に関心を払う。
 - (1) ニューエイジ運動、スピリチュアルブーム、自己啓発セミナー
 - (2) キリスト教はあくまでもイエス・キリストに目を注ぐ。
2. 『牧師が読みとく般若心経の謎』
 - (1) 仏教は「内側に向かう」。
 - (2) キリスト教は「天の父の心を仰いで生きよう」とする。
3. イエスは信頼に足るメシアなのか。
 - (1) 年金着服9自治体。告発は東京都日野市のみ。
 - (2) 生命保険 38 社で不払いは計 120 万件、910 億円。
日本生命、第一生命保険、住友生命保険、明治安田生命保険の大手4社の不払い件数は72万5650件、596億円に達した。金融庁は報告内容を精査した上で、行政処分の検討に入る。
4. マタイは、海千山千の男。その彼が、イエスについて証言している。
 - (1) 1章 メシアの系図
 - (2) 2章 メシア預言
 - (3) 3章 先駆者バプテスマのヨハネとメシアの登場
 - (4) 4章 メシアのテスト、メシアの戦略

イエスは信頼に足るメシアである。

I. メシアのテスト

はじめに:テストの意味

- (1) 「メシア(神の子)であることを証明せよ」との悪魔からの挑戦
 - ①悪魔の計画は、イエスに罪を犯させること。
 - ②十字架を通してではない人類救済計画を提案すること。
- (2) イエスを荒野に導いたのは神の計画
 - ①悪魔の誘惑にさらすことで、イエスが罪のない神の子であることを証明。
 - ②無罪でなければ、人類の救い主となることができない。
- (3) 荒野は神の声を聞き、神に近づく場所。
 - ①40 日間におよぶ断食祈祷の後、イエスの耳に試みる者の声が聞こえてきた。
 - ②これは、あらゆる信仰者が通過する普遍的な出来事。

1. イスラエルの民の代表として

- (1) とともに「神の子」(出エジプト 4:22～23 参照)。
- (2) とともに荒野で誘惑に会っている(I コリント 10:1～13 参照)。
- (3) イスラエルの民の放浪は 40 年間、イエスの断食は 40 日。
- (4) イエスは、悪魔に対抗するのに、申命記から聖句を引用。
 - ①申命記は、神とイスラエルの民の間に交わされた「契約の書」。
 - ②民は契約に違反したが、イエスはそれを引用することによって勝利した。
- (5) 悪魔に勝つ方法は、状況にふさわしいみことばを引用し、それを適用すること。
- (6) 日々のデボーションを通してみことばを心に蓄える。

2. 人類一般の代表として

- (1) ヘブル 4:15 私たちの大祭司
- (2) I ヨハネ 2:16 にヒントがある。3つの分野における試み。
 - ①肉の欲
 - ②目の欲
 - ③生活のおごり

3. メシア(神の子)として

- (1) この石がパンになるように。申命記 8:3
- (2) 身を投げてみれば。申命記 6:16
- (3) 私を拝むなら。申命記 6:13
- (4) 以上の誘惑は、すべて十字架を避けて安易な道に導く誘惑。
- (5) 悪魔の休戦。イスラム教徒の休戦も、よく似ている。

II. メシアの戦略

1. 場所

- (1) 12 節:先駆者が苦難に会うなら、メシアも苦難に会う。
- (2) 13 節:ナザレを去ってカペナウムへ。
 - ①ナザレの人々の不信仰。
 - ②戦略的に重要な町。
- (3) 14～16 節:イザヤ9:1～2の成就。
 - ①「ヨルダンの向こう岸」、「異邦人のガリラヤ」とは、アッシリヤの視点。
 - ②バプテスマのヨハネの奉仕も届かない所。
 - ③「暗闇の中」、「死の地と死の陰」
 - ④「光が上った」。マタイの体験。

2. 人

- (1) 前提:4人はバプテスマのヨハネの弟子(ヨハネ1～2章)。
- (2) 前提:4人は大漁の奇蹟を経験している(ルカ5:1～11)。
- (3) イエスと自分の差を認識。罪の認識。
- (4) ラビが弟子を召している。
- (5) 4人にとってはパートタイムから、フルタイムへの変換。
- (6) 過去の経験が生かされる。
- (7) 網を捨てた。イエスに対する全面的な信頼。

3. 方法

- (1) ユダヤ人の会堂で教えた。アブラハムの子孫であるユダヤ人たちに対して。
- (2) メッセージの内容:「御国の福音」(神の国の福音)。
 - ①自分はユダヤ人の王として到来したというメッセージ
 - ②自分が全人類の罪を負って十字架に付くというメッセージではない。
- (3) 権威の証明:イエスの権威が「しるし」をもって証明された。
- (4) 魂(教えること)、霊(福音を宣べ伝えること)、肉体(癒すこと)の必要。
- (5) イエスの噂は、ガリラヤ地方だけでなく広範囲に広がった。
 - ①ガリラヤ
 - ②デカポリス(10のギリシア風の都市)
 - ③エルサレム(ラビ的ユダヤ教の中心地)
 - ④ユダヤ(南部の地域)
 - ⑤ヨルダンの向こう岸(ヨルダン川の東側)
- (6) イエスは、もはやガリラヤ出身の無名のラビではない。
- (7) 神の国運動は、短時間のうちに強力な運動へと変貌を遂げた。

結論 メシアは信頼できる。

1. 荒野の誘惑に勝利した主
 - (1) 十字架への道以外には見ていない主。
 - (2) 私たちにとっての最善しか考えていない主。
2. その戦略において知恵と権威を発揮した主
 - (1) 人を用いる。権限委譲。
 - (2) 本質を語るなら、小さな始まりが大きな影響を及ぼす。

「マタイ5章 山上の垂訓(1)」

イントロ:

1. 誤った教えから自分を守る方法
 - (1) 自分で読んで自分なりの解釈ができる。
 - (2) なぜその解釈をしたか説明できる。
2. 解釈学的重要性
 - (1) 文脈
 - ①直前直後の文脈
 - ②聖書全体の文脈
 - (2) 字義通りに解釈する。
 - ①最も自然に、普通に解釈する。
 - ②著者は何を意図し、聞き手はそれをどう理解したか。
3. 山上の垂訓は有名であるが、これほど誤解されている箇所は他にない。
 - (1) その名称はメッセージが語られた場所を指すだけで、内容は分からない。
 - (2) 救いに至る道を教えているのではない。
 - ①天の御国に入るためには 613 の律法を守る必要がある。
 - (3) 山上の垂訓の本質は、「メシアによる律法の義の解釈」である。
 - ①5:20 「パリサイ人の義にまさる義」

マタイ5:20 を分析することによって、山上の垂訓が開かれる。

I. 文脈の確認

1. 時代的背景という文脈
 - (1) 旧約聖書の預言者たちは、神の国とメシア(王)の到来について預言した。
 - (2) 中間時代に台頭したパリサイ派は、神の国に入るために必要な義について論じた。
 - (3) この時代、ユダヤ人たちは「神の国に入るための義とは何か」を追求していた。
 - (4) パリサイ派の神学では、「律法の義」は幅広いものだった。
 - ①「ユダヤ人として生まれた者は、すべて神の国に入れる」
 - ②全イスラエルが一日でも律法を完全を守るなら、メシアは到来する。
 - ③律法に熱心に生きた者は、神の国で高い地位に着くようになる。
 - (5) バプテスマのヨハネやナザレのイエスは、悔い改めの必要性を説いた。
 - (6) どちらの義が神の国に入ることを可能にしてくれるのかという疑問がわいた。
 - (7) イエスの答えは、マタイ 5:20 にある。

(8) これはきわめて現代的なテーマ

- ① 真理を求める姿勢は評価されるが、そこには最終的な回答はない。
- ② パリサイ派をどのように評価しようとも、そこには答えはない。
- ③ イエスの教えは、他のすべての宗教と一線を画する。

2. 啓示の進展という文脈

- (1) 「天の御国(神の国)」とは、メシア的王国(千年王国)のことである。
- (2) 「福音」とは、「十字架の福音」ではなく、「天の御国が近づいた」という福音。
- (3) 「救い」についての理解

- ① 信仰により、恵みによって救われる。
- ② 信仰の対象は、神である。
- ③ 信仰の内容は、時代によって異なる。

＊ ローマ4:1～3 アブラハムの場合

＊ この時代は、イエスをメシアとして信じること。

＊ それが、「パリサイ人の義にまさる義」

3. 前後の文脈

- (1) 3章 先駆者バプテスマのヨハネとメシアの登場
- (2) 4章 メシアのテスト、メシアの戦略
- (3) 5章 メシアによる「律法の義」の解釈

- ① ラビが弟子たちを教える伝統的なスタイル。
- ② 第一義的には、弟子たちに向かって語っている。
- ③ 伝道メッセージ的な要素も兼ね備えている。
- ④ イエスは旧約聖書の権威を認めた(18 節)。

II. 弟子の特徴

イントロ

- (1) イエスをメシアとして信じた人は、「神の義」を手に入れている。
- (2) この世の基準からではなく、神の目から見た「幸い」。
- (3) 「神の義」を手に入れた人の8つの特徴。

1. 前半の4つは、神との関係における弟子の特徴

(1) 「心の貧しい者」

- ① 心が卑しいとか、心が狭いとかいう意味ではない。
- ② 心が貧しいとは、プライドとは対極にある性質である。
- ③ 自分の霊的な貧しさを知り「自分の義」より「神の義」により頼んでいる。
- ④ ルカ 18:9～14 参照
- ⑤ 神の支配と臨在は、そのような人とともにある。

(2) 「悲しむ者」

- ①この文脈では、罪に対して敏感な性質を言う。
- ②自分の罪やこの世の悪を嘆き悲しむ人のこと(詩篇 119:136 参照)。
- ③そういう人は、ただちに罪を告白して赦しを受け取る。
- ④地上で罪の赦しを体験し、将来、神の義の完全な実現を見て慰められる。

(3) 「柔和な者」

- ①弱い人のことではない。
- ②静かな中に神への揺るぎなき信頼を持っている人のこと。
- ③そういう人は、自己弁護から解放されているので人と言い争う必要がない。
- ④最高のお手本は、黙って十字架の死に向かわれた主イエス。
- ⑤そういう人は、神から多くのものを委ねられ、それを生かす人生を歩む。

(4) 「義に飢え渴いている者」

- ①モーセの律法によって示された「神の義」に従うことを求めている人。
- ②つまり、常に神との関係を第一にしているということ。
- ③そういう人は、肉体的な満たしだけでなく精神的、霊的満たしを体験する。

2. 後半の4つは、人との関係における弟子の特徴

(5) 「あわれみ深い者」

- ①回りの人々の痛みや必要を敏感に察知し、それに応えようとする性質。
- ②神があわれみ深いので、私たちもあわれみを示すように期待されている。
- ③隣人にあわれみを示した人は、自ら神のあわれみを受けるようになる。

(6) 「心のきよい者」

- ①行為だけでなく、動機まできよい人のこと。
- ②人は、聖霊によって心が砕かれ、新しく生まれ変わる必要がある。
- ③その時、私たちは、「アバ、父よ」(ローマ 8:15)と祈り始める。

(7) 「平和をつくる者」

- ①何よりもまず、信者同士の間での和解と平和を求める人のこと。
- ②世界に平和をもたらす働きは、先ず信者同士の関係修復から。
- ③ヨハネ 13:35 あなた方の間に愛があるなら…。

(8) 「義のために迫害されている者」

- ①「神の義」を追求しているために、攻撃されている人。
- ②迫害は神に従っていることの証拠だとされている(II テモテ 3:12)。
- ③これは、クリスチャン生活のイメージを大きく変える教えである。

Ⅲ. 弟子の使命

1. 地の塩

(1) 塩は防腐剤。信者はこの世を腐敗から守るという役割を果たす。

①旧約時代に、イスラエルが完全に滅びなかったのは、真の信仰者のゆえである。

②この人々を、「イスラエルの残れる者」と言う。

③今の「イスラエルの残れる者」とは、メシアニック・ジューのこと。

(2) また塩は、調味料としても用いられた。

①この世の生活では失望、信者同士の交わりを通して喜びを味わう。

2. 世の光

(1) 暗い世にあって、信者には神の光を灯す役割が与えられている。

(2) 夕暮れにガリラヤ湖畔に立つと、なるほどと思える景色が目の前に広がる。

(3) 「このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせ…」(16 節)。

(4) パウロの書簡(エペソ 5:8、ピリピ 2:15～16)

(5) 私たち自身が光なのではなく、私たちの内にキリストが生きておられる。

結論

1. 信仰による生まれ変わり。

2. この世の価値観とは一線を画した弟子の特徴。

3. その特徴を生かした生活。

「マタイ6章 山上の垂訓(2)」

イントロ:

1. 文脈で判断することが大切。
2. マタイ 5:20 が、山上の垂訓を解釈する鍵
 - (1) 救いに至る道を教えているのではない。
 - (2) 山上の垂訓の本質は、「メシアによる律法の義の解釈」である。
 - (3) 今回、山上の垂訓は難しくはない、実に分かりやすいと感じた。
 - ①複雑な問題に、単純な回答が用意されている。
 - ②原則が重要。

マタイ5:20 を分析することによって、山上の垂訓が開かれる。

I. 5章の残り(メシアによる律法の義の解釈)

1. 定型句に注目する。
 - (1) 「…と言われたのを、あなたがたは聞いています」
 - ①「口伝律法」、イエスの時代にはまだ「言い伝え」の段階。
 - ②後代に、「ミシュナ」として文書化され、それがタルムードの中心となる。
 - (2) 「しかし、わたしはあなたがたに言います」
 - ①メシアによる律法の解釈、あるいは、義の解釈。
 - ②外側に現れた行為ではなく、人の内面が問題にされている。
(例話) I サムエル 16:6～7 エッサイの8人の息子の中から王が出る。
2. 具体的展開。
 - (1) 殺人
 - ①殺人という行為を問題にする。
 - ②行為の前に、心の中で罪を犯している。
 - (2) 姦淫
 - ①姦淫という行為を問題にする。
 - ②心の中で、姦淫を犯している。
 - ③右の目(罪が入る道)、右の手(罪を犯す道具)を断固取り除く。

(3) 離婚

- ①申命記 24:1 妻の権利を保護するため。
- ②後代になると、離婚状を出せば、合法的に離婚できるとなる。
- ③ヒレル派とシャマイ派
- ④ヒレル派は律法解釈が緩やか。「料理が下手というだけで離婚原因となる」
- ⑤不貞以外の理由は不法。
 - * 離婚されると他の男性に身を寄せるしかない。
 - * それで、「姦淫を犯させる」という表現になっている。

(4) 誓い

- ①レビ記 19:12、申命記 23:21、23 など。
- ②誓うな。誓ったことは実行せよ。
- ③口伝律法では、誓いをさまざまな理由で取り消せるようになっていた。
- ④イエスの教えは、「正直な人になれ」ということ。
- ⑤父なる神の性質。誓いを守る。
 - * アブラハムが義とされた理由は、神を信じたから。
 - * 申命記 4:31

(5) 報復

- ①「目には目で、歯には歯で」。出エジプト 21:24、レビ 24:20。
- ②同害復讐法は、際限のない復讐に歯止めをかけるもの。
- ③それが、私的復讐の根拠として利用される。
- ④イエスの教えは、無抵抗の姿勢。
 - * 悪や不正を容認せよということではない。
 - * 仕返しをしないで、求められた以上のものを出す。

(6) 隣人愛

- ①「隣人」とは、同胞のユダヤ人のこと。
- ②「自分の敵を憎め」とは、パリサイ派ではなく、エッセネ派の教え。
- ③イエスの定義では、「隣人とは助けを必要としている人」
- ④ルカ 10 章、良きサマリヤ人のたとえ

Ⅱ. 6章(律法の義の実践)

1. 原則はマタイ 6:1

- (1) 善行を行う場合の動機が問題。
- (2) 人の歓心を買うためなら、神からの報いは受けられない。

2. 具体的展開

- (1) 施し
- (2) 祈り
- (3) 断食

①以上の3つが、パリサイ人たちが特に好んで善行と考えてきた行為。

②イエスはその3つの行為を再解釈する。

- (4) 富に対する態度

①二人の主人に仕えることはできない。

②自分の宝を天に蓄えよ。天で受け取る冠は、それで作られている。

- (5) 思い煩い

①将来を見ようとするのは罪。

②天の父に信頼していないこと。

3. 祈りについて

- (1) 原則

①パリサイ派的偽善を避ける。

②異邦人の祈り方を避ける。

＊ ことばの繰り返し。

＊ 仏教、イスラム教、ユダヤ教には、自発的祈りはない。

＊ 父なる神は、願う前から私たちの必要を知っておられる。

- (2) 主の祈り

イントロダクション

＊ この通りに祈ってもいいが、モデルとして使用するのがよい。

＊ 前半の3つが、神の御心を求める祈り。

＊ 後半の3つが、自分の必要のための祈り。

＊ 共同体としての祈り。「私たち」

- ①「天にいます私たちの父よ」

＊ 呼びかけ。

＊ 神への完全な信頼から生まれる言葉。

＊ キリストを通して、御霊によって、天の父なる神に祈る。

- ②「御名があがめられますように」

＊ 神の偉大さや、性質を思う。

＊ 過去に受けた祝福を思い出す。

- ③「御国が来ますように。みこころが天で行われるように…」

＊ 神の国の前進を祈る。

＊ 教会、牧師、宣教師、役員、求道者のために祈る。

④「私たちの日ごとの糧をきょうもお与えください」

- * 肉体の必要のための祈り。
- * 経済的試練、人間関係の試練、病との闘い。

⑤「私たちの負い目をお赦してください」

- * 罪の告白が冒頭にきていない。
- * そのままで神の前に出る。
- * 他人の罪を赦すことが、自分の罪が赦される条件ではない。
- * 罪の赦しを体験した人の強みが、ここに表現されている。

⑥「私たちを試みに会わせないで、悪からお救いください」

- * 霊的な戦いの中での守り。
- * ヨハネ 16:33
- * クリスマスが経験する平安とは、患難の中での平安である。

結論

1. 神は、行為ではなく、心をご覧になる。
2. 常に動機が問われる。
3. 祈りは、父なる神への信頼の表明である。

「マタイ7章 山上の垂訓(3)」

イントロ:

1. 文脈で判断することが大切。
2. 山上の垂訓の本質は、「メシアによる律法の義の解釈」である。
口伝律法(先祖たちの言い伝え)を否定し、正しい律法解釈を教えている。
そういう文脈で、山上の垂訓を解釈する必要がある。

マタイ7章を前半と後半にわけて解説する。

I. 前半:7章1節～12節(6章からの続き、律法の義の実践)

1. さばき
 - (1) 批評や判断の否定ではなく、口伝律法による「さばき」の禁止。
 - (2) 人間が作った基準で他人をさばく者は、偽善者である。
 - (3) 正しくさばくことの重要性。
 - ①6節。神に属するもの、神の国の福音を、愚か者に与えるな。
 - ②マタイ18章 教会内での罪の処理
2. 祈り
 - (1) 継続した祈り
 - (2) 天の父に信頼した祈り
 - (3) ラビ的教授法:位の低いもの(価値の低いもの)と、位の高いものの対比。
人間の父親でもこうなのだから、天の父なら言うまでもない。
 - (4) よく似たものの例示
 - ①パンと石
 - ②魚と蛇
 - ③卵とサソリ(ルカ11章)
 - (5) 今の時代(恵みの時代)との相違
 - ①ヨハネ16:24の真理はまだ開かれていない。イエスの御名による祈り。
 - ②現代の私たちには、より大きな責任と特権が与えられている。
3. 黄金律
 - (1) すでに救われている者に与えられた行動規範。
 - (2) 天の父から良いものを受けたように、他の人にも良いものを与えよという命令。
 - (3) この命令こそ、旧約聖書全体(律法と預言者)を要約するもの。

I. 後半:7章 13 節～29 節(4つの対比)

1. 2つの道の対比

(1) 「広い門」、「広い道」とは、口伝律法による救いの方法。

①ユダヤ人は全員、天の御国に入れる。

②それは、滅びに至る門であり、道である。

③ヨハネ3章のニコデモも、驚いている。

(2) 「狭い門」、「狭い道」とは、イエスが教える救いの方法。

①「信仰による義」

②それを見いだす者はまれである。

③多数の意見に流されるな。永遠の運命がかかっている。

2. 2種類の預言者の対比

(1) 偽預言者の存在。

①イスラエルの民は、指導者コンプレックスを持っている。

②モーセによる預言 申命記 13:1～5

③旧約聖書の預言者たちは、偽預言者によって苦しめられた。

④パウロも、使徒 20:29～30 で、エペソの長老たちに警告している。

(2) 偽預言者の見分け方。

①羊の皮をかぶってやってくる。

②新しい教えに、すぐに飛びつく。

③その実によって見分ける。

④主の預言者は、主イエスに接ぎ木され、よい実を結ぶ(ヨハネ 15 章)。

3. 2種類の告白の対比

(1) 自己欺瞞の告白

①「主よ、主よ」と口では告白するが、霊的に新生していない。

②主の御名によって預言する。しかし、それは御名の冒涇である。

③主の御名によって悪霊を追い出すが、これは本物の証明にはならない。

④主の御名によって多くの奇蹟を行うが、これも本物の証明にはならない。

出エジプト記に登場するエジプトの魔術師たちの例。

(2) さばきの日に明らかになる。

①「わたしはあなたがたを全然知らない。

不法をなす者ども。わたしから離れて行け」

②新生の必要性。

4. 2種類の建築家の対比

(1) 賢い人

- ① 岩の上に家を建てた。
- ② 試練(嵐)が襲ってきても、倒れることはない。
- ③ 賢い人とは、イエスのことばを聞いて、それを実行する人。

(2) 愚かな人

- ① 砂の上に家を建てた。
- ② 試練(嵐)が襲ってくると、押し流されてしまう。
- ③ 愚かな人とは、イエスのことばを聞いても、それを実行しない人。

結論

- 1. 人生は、岐路に立たされた時に、その方向性が決まる。
- 2. 容易な道、人気のある道、誰もが選びたいような道ではなく、その逆を行け。
- 3. 私たちは、日々、岐路に立たされている。

(例話)熊本刑務所でのメッセージ

- (1) 自分で選んで、今の人生がある。
- (2) 今、また岐路に立たされている。
- (3) 今行ふ選びが、明日の私の人生を作る。

「マタイ8章」

イントロ:

1. 『牧師が読みとく般若心経の謎』 大きな反響。
 - (1) 仏教の「空」とは、世界に変化しないものはないということ。
 - (2) 「無」の世界の中に、真理を求める哲学的作業。
2. 聖書は、イエス・キリストは変わらないと教えている。ヘブル 13:8
 - (1) 聖書は、変わらないお方を見上げて生きるという方向を指し示す。
 - (2) 聖書が真理であるかどうかは、イエスが信頼に足りるかどうかにかかっている。
3. これまでの文脈
 - (1) メシアの系図
 - (2) メシアの誕生
 - (3) メシアの登場(洗礼)
 - (4) メシアの試験(サタンによる)
 - (5) メシアの教え(山上の垂訓)
 - (6) メシアの業(行為)
4. ここまで来て感じるのは、マタイはイエスの素晴らしさしか書いていないということ。
 - (1) この箇所は、5種類の癒しを通してイエスがメシアであることを証明している。
 - (2) 底流に光を当てて解説を試みる。
5. このメッセージによって、イエスに対する信頼を深めていただきたい。

イエスはメシアである。

マタイ8章の5種類の癒しは、イエスがメシアであることを証明している。

I. レブラ患者の癒し(新改訳聖書ではツァラアトと表記)

1. 当時のレブラ
 - (1) 今のハンセン氏病ではない。重い皮膚病。
 - (2) モーセの律法では、死人や死んだ動物に触れた場合は、儀式的に汚れる。
 - (3) 生きている人間の場合は、レブラ患者だけが、触れると汚れるとされていた。
 - (4) これは「儀式的な汚れ」である。
 - (5) レブラに感染しているかどうかを判定し、宣言するのは、祭司の役割。
 - (6) 宣言を受けた人は隔離され「汚れている。汚れている」と叫びながら歩く。
 - (7) 幕屋(神殿)に入ることが禁止されたので、霊的祝福を受ける機会も奪われた。

2. ひとりのレプラ患者がイエスの足元にひれ伏した。
 - (1) レプラが癒されることは、儀式的汚れがきよめられること。
 - (2) イエスの力を信じたが、憐れみをかけてもらえるかどうか確信がない。
3. イエスの業
 - (1) 手を伸ばし、彼に触っている。
 - (2) この人はレプラに感染して以来、誰からも触られたことがなかった。
 - (3) イエスは、「わたしの心だ。きよくなれ」と言われた。
 - (4) 肉体と魂が同時に癒された。
4. 底流:これは、メシア的奇蹟である。
 - (1) モーセの律法が完成して以降、レプラの癒しはない。
 - (2) ミリアムはモーセの律法が完成する以前の人。
 - (3) ナアマン将軍は異邦人。
 - (4) レビ記 13 章、14 章には、レプラから癒された場合の手続きが記録されている。
 - (5) 律法学者たちは、これはメシアだけが行う奇蹟だとの認識を持つようになった。
 - (6) イエスはモーセの律法に従ったきよめの手順を指示している。

II. 百人隊長のしもべの癒し

1. カペナウムに駐屯する異邦人の軍隊と百人隊長。
 - (1) 百人隊長の懇願。
 - (2) ルカ7:1～10:ユダヤ人の長老たちをイエスのもとに送っている。
 - (3) ユダヤ的な理解では、主人の名によって送られた使者は、主人が来たのと同じ。
 - (4) 異邦人でありながら、イエスはメシアとしての権威を持っていることを信じた。
 - (5) その結果、彼のしもべは癒された。
2. 底流:この癒しは、アブラハム契約の祝福の表れである。
 - (1) イスラエルを祝福する者は、祝福される。彼は神の祝福を受けるに値する人物。
 - (2) ユダヤ人たちがイエスを疑っていた時に、異邦人の彼が信じた。
 - (3) 彼は異邦人の救いの先駆けとなった(使徒 10 章のコルネリオもまた百人隊長)。
 - (4) ユダヤ人伝道の必要性。

Ⅲ. ペテロの姑の癒し

1. 身内の癒しであるだけに、特別な感情がある。
 - (1) 弱き者(女性で病者)に対するイエスの憐れみの心。
 - (2) この癒しは、超自然的なもの。ただちに起きて、イエスをもてなしている。
2. その後の展開
 - (1) 安息日が明けた。
 - (2) イエスは、悪霊を追い出し、病気の人々をみな癒された。
 - (3) イエスの権威と憐れみの心。
3. 底流:一連の癒しは、十字架の恵みの予表である。
 - (1) イザヤ書 53:4 の預言は、イエスにあって成就した。メシアの証明。
 - (2) ここでの病の癒しは、将来の「より素晴らしい癒し」の先駆け。
 - (3) 「より素晴らしい癒し」とは、魂の癒しのことである。
 - (4) I ペテロ 2:24 が語る癒しとは、「罪と死からの解放」のこと。
 - (5) マタイは、イエスの十字架の死を見ていた。

Ⅳ. 自然界の癒し

1. 弟子たちの恐れ
 - (1) ガリラヤ湖は、海拔下約 200 メートルに位置する。
 - (2) これは並の嵐ではない。
 - ① 漁師たちでさえも恐れている。
 - ② イエスに懇願している。
2. イエスの業
 - (1) イエスは寝ておられた。
 - (2) イエスは、風と荒波とをしかりつけられた。
 - ① ただちに大暴風雨が収まった。
 - ② 通常の静けさではなく「大なぎ」になった。
 - ③ ことばで宇宙を創造された方が、ことばで自然界を支配された。
3. より大きな恐れ
 - (1) イエスの実体に触れた恐れ。畏怖の念。
 - (2) 迫害に耐える強靱な信仰を養う。
4. 底流:ここは、字義通りに読むこと。
 - (1) 知るとは、体験すること。
 - (2) ハーベストフォーラム東京が始まって以降、神の導きを体験している。

V. 悪霊につかれた人の癒し

1. ガダラ人の地

- (1) 湖の向こう岸にあるガダラ人の地。
- (2) デカポリス(10の町)と呼ばれるギリシア・ローマ風の町の一つ。
- (3) 異邦人の地なので、豚が飼われていた。

2. 悪霊につかれた2人の人

- (1) 多数の悪霊(レギオンとは約6千人の兵士からなるローマの軍団)を宿していた。
- (2) 人格が破壊され、暴力的、かつ、自虐的。墓場を住みかとするほどに絶望。
- (3) 2人の内側にいた悪霊どもは、イエスが誰であるかをすぐに認識した。
- (4) 悪霊どもは、豚の中に入ることを懇願した。
- (5) イエスはそれを許可したが、これはその地方の人たちへの裁きでもある。

3. 底流:悪霊がイエスを認識しているのに、人間は気がついていない。

- (1) ユダヤ人
- (2) この地方の人たち。イエスを追い出そうとしている。
(例話)最近、米国のホテルではギデオンの聖書を追い出す傾向にある。

結論

1. 5つの癒しを見てきた。

2. イエスはメシアであり、私たちに救うことができる。

3. 弟子の条件

- (1) 最初の弟子志願者は、律法学者。
 - ①彼は、イエスが高名なラビであることを認めている。
 - ②弟子となるための犠牲を理解していない。
 - ③救いは信仰により恵みによるが、弟子となるためには犠牲が要求される。
 - ④「人の子」とは人間を表す場合と、メシアを表す場合がある。
 - ⑤イエスは、100 パーセント人間であり、100 パーセント神である。
 - ⑥これこそ、自己否定の究極的な姿。
 - ⑦イエスは、地上生涯においては、貧困以下の生活をされた。
- (2) 第2の弟子志願者は、優柔不断な人。
 - ①「主よ。まず行って、私の父を葬ることを許してください」
 - ②長男は父を最後まで看取り、1年経ってから、その責務から解放される。
 - ③彼の父はまだ死んでいない。
 - ④彼の問題は、決心したけれども、その実行を引き延ばしている点にある。

「マタイ9章」

イントロ:

1. 第 41 回聖地旅行から2日前に帰国した。
 - (1) 今回は、アナポリスでの中東和平国際会議の最中。二国共存への交渉を開始
 - (2) 「ユダヤ人はイエスの裁判、十字架、復活のことをどう思っているか」との問い。
 - (3) イスラエルが置かれている状況を理解しない旅行者の怒り。
 - (4) 以上のことは、すべて紀元 70 年のエルサレムの滅びと関係がある。
 - (5) さらに遡れば、イエスのメシア性を拒否したことに根本的な原因がある。
2. 8章では5種類の癒しを取り上げて、底流に光を当ててイエスのメシア性を証明した。
3. 9章では5種類のパリサイ人との論争を取り上げ、イエスのメシア性を証明する。
 - (1) 中風の人の癒し
 - (2) マタイの召命
 - (3) 断食論争
 - (4) 会堂管理者の娘の蘇生(長血の女の癒し)
 - (5) ふたりの盲人の癒し
 - (6) 悪霊につかれた口の利けない人の癒し
4. メッセージのゴール
 - (1) イエスを拒否した結果、ユダヤ人は取り返しのつかない悲劇を招いた。
 - (2) 今も、イエスにどのような応答をするかで、人の運命は決まる。
 - (3) このメッセージによって、イエスに対する信頼を深めていただきたい。

マタイ9章に記された5種類の、パリサイ人との論争は、イエスのメシア性を証明している。

I. 中風の人の癒し

1. 場所
 - (1) カペナウム。ガリラヤの中心都市。
 - (2) なぜエルサレムから遠く離れたこの町が注目されるのか。メシア運動の中心地。
2. 人物
 - (1) 律法の専門家たち(ルカ 5:17～26)。
 - (2) 理由は、イエスがメシアであるかどうかを確かめるため。
 - (3) イエスは、メシアにしかできない癒し(レプラ患者の癒し)を行われた。
 - (4) 宗教的な指導者たちは、イエスを観察するためにそこに来ていた。
 - (5) メシア運動評価の第一段階(観察の段階)。
 - (6) バプテスマのヨハネの時よりも、盛大。観察の最終段階。

3. 状況

- (1) 中風の人が運ばれてきたが、戸口には律法の専門家たちがいた。
- (2) そこで4人の友人たちは、屋根をはがして、中風の人をイエスの前に降ろした。
- (3) イエスは「子よ。しっかりしなさい。あなたの罪は赦された」と宣言された。
- (4) 通常は癒しが先行するが、ここでは、罪の赦しの宣言が先。

4. 論争

- (1) 神への冒涇か。ヘブル語では受動態。レビ記4章～6章のみ。メシアの業を指す。
- (2) イエスが単なる人間か、メシアかで結論は異なる。
- (3) 「観察の段階」。彼らは、「心の中で」論じた。
- (4) 彼らの理屈を見抜いたイエスは、質問をした。質問で答えるのはラビ的方法。
- (5) 「『あなたの罪は赦された』と、『起きて歩け』と、どちらがやさしいか」
 - ①結果が要求されること(体の癒し)を宣言するのは難しい。
 - ②イエスは困難な方を行い、より易しいことが有効であることを示した。
 - ③これもまた、ラビ的教授法。
- (6) 中風の方は、ただちに床をたたんで、神をあがめながら家に帰った。
- (7) 「人の子」とは、イエスのメシア宣言。
- (8) メシア運動は「観察の段階」から「審問の段階」に入る。

5. 適用

- (1) 私たちが経験する最も恐ろしいことは、死ではなく、その後に来る。
- (2) 信仰。罪を赦す権威。これがキーワード。

II. マタイの召命(マタイの証し)

1. 取税人

- (1) 当時、取税人は同胞から忌み嫌われていた。
- (2) その職業自体が、ユダヤの律法に反するもの。
- (3) 取税人は、ローマの手先として働く売国奴。同胞を搾取することで裕福に。
- (4) 取税人は、ユダヤの律法によって共同体の交わりから追放された。
- (5) 取税人には、所得税を取り立てる取税人と、通行税を取り立てる取税人があった。
- (6) 前者よりも後者の方が、より嫌われていた。マタイは、後者。

2. 召命

- (1) 「わたしについて来なさい」
- (2) ローマ皇帝よりも権威ある方。すぐに、財産も地位も捨てて従った。
- (3) 漁師から弟子になった者たちよりも、犠牲が大きい。
- (4) イエスの7番目の弟子が誕生。

ペテロとアンデレ、ヤコブとヨハネ、ピリポとナタナエル

3. マタイが催した宴会

- (1) イエスに従った瞬間、マタイは霊的に新生した。彼の誕生パーティー。
- (2) その喜びの結果が、宴会となって表れた。
- (3) 出席者
 - ①律法では、取税人が交際を許されたのは、取税人と罪人(娼婦)だけ。
 - ②マタイがこの宴会に招いたのは、当然、取税人と罪人だけ。
- (4) そこに、イエスとその弟子たち(6人)も出席した。

4. 論争の内容

- (1) パリサイ人たちは、メシアがこのようなことをするはずがないと迫る。
 - ①メシア運動の吟味は、「観察の段階」から「審問の段階」へと移行。
 - ②パリサイ人たちは、言葉に出してイエスを問いだす。
- (2) イエスは3つの面から回答。
 - ①「医者が必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です」
 - ②「わたしはあわれみは好むが、いけにえは好まない」

「いけにえ」とは、外側に出た行為のこと(律法主義的生活)。
「あわれみ」とは、内面的なもの(行為の背後にある動機)
 - ③パリサイ人たちは律法主義的であったが、同情心や愛は持っていなかった。
- (3) 「わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです」
 - ①パリサイ人たちは、自分のことを「正しい人」と考えていた。
 - ②メシアは、自らが罪人であることを認めている人を招くために来た。

Ⅲ. 断食論争

1. 背景

- (1) バビロン捕囚という悲劇は、ユダヤ人たちに大きな反省を迫った。
- (2) 帰還後、エズラは613のモーセの律法を熱心に解説した。
- (3) 次の世代の指導者たちは、その解説にさらに種々の命令を付け加えた(垣根)。
- (4) 4百年の言い伝えが「口伝律法」となり、聖書と同じ権威を持つようになった。
- (5) パリサイ人たちは、口伝律法に基づいて、週に2回(月曜と木曜)断食をした。

2. 論争

- (1) 断食しないで飲み食いしているイエスとその弟子の姿は、実に不愉快。
- (2) 「イエスがメシアであるなら、口伝律法を破るはずがない」
- (3) イエスは、3つの答えを与えている。
 - ①今は、喜びの時だから、断食する必要はない。
 - * 花婿がいるのに、花婿につき添う友に断食させることはできない。
 - * しかし、花婿が殺される時には、断食する。預言的な要素。
 - ②だれも、新しい布切れで古い着物の継ぎをするような愚かなことはしない。
 - * 「新しい着物」とは、神の国の実質である。
 - * 「古い着物」とは、当時のユダヤ教、つまり、パリサイ的ユダヤ教。
 - * 両者は、全く異質のもの。組み合わせることはできない。
 - ③新しいぶどう酒を古い皮袋に入れるようなことはしない。
 - * 当時は、やぎの皮を皮袋として用いていた。
 - * 新しいぶどう酒は、新しい皮袋にというのが、当時の常識。
 - * 醗酵途上の新しいぶどう酒は、古い皮袋を張り裂いてしまう。
 - * 新しいぶどう酒とは、神の国の実質、聖霊が与えるいのち。
 - * 古い皮袋とは、言い伝えや伝統を重視するパリサイ的ユダヤ教。

3. 適用

- (1) イエスは、口伝律法をモーセの律法と同等に扱うパリサイ的ユダヤ教を批判。
- (2) 現代のメシアニック・ジューの葛藤。
 - ①モーセの律法や、ユダヤ教の伝統を自発的に実行するのはよい。
 - ②それが、信者の義務として強制されるなら、それは律法主義。
- (3) 私たちの信仰生活の中に、パリサイ的要素はないか。
 - ①アルコール飲料、趣味、日曜礼拝
 - ②ユダヤ教の場合は律法の内容は同一。
 - ③キリスト教の場合は、教派、教団により異なる。

IV. ふたりの盲人の癒し

1. 「ダビデの子よ。私たちがあわれんでください」
 - (1) メシアへの信仰
 - (2) 個人的必要
2. イエスは、公の場では癒していない。
 - (1) 国の指導者たちが拒否しているから。

3. 私的場では癒しを行う。
 - (1) 信仰を確認。
 - (2) 「あなたがたの信仰のとおりになれ」
 - (3) 沈黙を要求したが、これは聞き入れられなかった。

V. 悪霊につかれた口の利けない人の癒し

1. 当時の悪霊の追い出し
 - (1) 名前を聞き出して、その名を呼んで追い出す。
 - (2) 口の利けない悪霊の場合は、名を聞き出せない。
 - (3) それは、メシアだけが行う奇蹟である。
 - (4) 第一のメシア的奇蹟は、レプラ患者の癒し。
2. イエスはその奇蹟を行った。悪霊につかれた二人の人
 - (1) 口を利けない人がものを言った。
 - (2) 群衆は、驚嘆した。つまり、イエスはメシアであると考えた。
3. パリサイ人たちは、イエスがメシアであることを認めたくなかった。
 - (1) イエスの癒しの力は「悪霊どものかしら」から来していると説明した。
 - (2) もし人が、聖霊の力を悪霊の力だと言い張るなら、それは聖霊への冒瀆。

結論

1. 5種類の論争を見てきた。
2. パリサイ的目を離れてイエスを見るなら、イエスがメシアであることが分かる。
3. 私たちの前には、2つの道がある。
 - (1) イエスを信じるなら、罪の赦しを得る。これを救いという。
 - (2) イエスを拒否するなら、恐ろしい運命が待っている。

「マタイ 10 章 12使徒の派遣」

イントロ:

1. 文脈を確認してみよう。
 - (1) イエスの公生涯が始まっている。
 - (2) イエスに対する3つの態度
 - ①拒否:ユダヤ人の指導者たち
 - ②受け入れた:イスラエルの残れる者(レムナント、真の信仰者)
 - ③迷っている:一般民衆
 - (3) 「羊飼いのいない羊」とは、迷っている人のこと。
 - (4) 「収穫は多い」
 - (5) 働き手の必要性。祈ることは、自らも献身すること。
 - (6) 12使徒の選抜と派遣。
2. これは、現代の日本の霊的状況でもある。
 - (1) 第一のものが第一とされていないキリスト教の状況。
 - (2) 聖書の個人的解釈。
 - (3) 新しい教え、流行。
3. ハーベストフォーラム東京の目的は、迷える羊に方向性を示すこと。
4. 12弟子の選抜
 - (1) 遣わされた者
 - (2) イエスの権威の付与
 - (3) 派遣に際しての指示
5. ここにある緊張感を見逃してはならない(ことの始まり)
6. メッセージのゴールは、「方向性の確認」である。
 - (1) 時限法(3つの理由)
 - (2) 警告(3つ)
 - (3) 弟子道(3つ)
 - (4) 励まし(3つ)

マタイ 10 章は、クリスチャン生活の方向性を示している。

I. 時限法

1. 地理的限定
 - (1) 異邦人の町、サマリア人の町に行くな。
 - (2) イスラエルの家の滅びた羊のところにだけ行け。
 - (3) 十字架と復活以降は、これが拡大する。マタイ 28 章の大宣教命令。

2. メッセージと奇蹟

- (1) 「天の御国が近づいた」
- (2) そのメッセージの正当性は、奇蹟によって証明される。

3. 生活のための必需品

- (1) 時間がない。
- (2) 必要は満たされる。

4. 以上の命令は、時限法である。

- (1) 現代の宣教師は、生活の準備をしている。
(例話)他人の話をそばに立って聞いているようなもの。テレビ業界についての学び。
- (2) 時限法の中から、普遍的な教えをくみ上げることが大切。
- (3) 2人一組で派遣。神が必要を満たしてくださるなど。
- (4) これ以降の内容も、ほとんどが普遍的な真理である。

II. 警告(3つ)

1. 心の持ち方

- (1) 向かう先は、楽園ではなく戦場である。
- (2) 蛇のようにさとく。
- (3) 鳩のように素直。
- (4) これは、普遍的な原則。

2. 迫害への備え

- (1) すべての人が信じるわけではない(期待せよ、そして、期待するな)。
- (2) 議会や会堂で鞭打たれる。
- (3) 総督たち、王たちの前に引き出される。これは、異邦人伝道が始まってから。
- (4) 語る言葉は、その時に与えられる。実践的訓練を受ける。
- (5) これも、普遍的な原則。

3. 神だけを恐れよ

- (1) 人々はイエスを、ベルゼブルと呼ぶ。
- (2) 弟子たちはさらに悪い名で呼ばれる。小から大への論法。
- (3) 人を恐れるな。神だけが、魂も体もゲヘナで滅ぼすことができる。
- (4) 雀でさえも神の守りの中にある。ましてや。ラビ的論法。小から大へ。
 - ①2羽で1アサリオン
 - ②ルカ 12:6 5羽で2アサリオン
- (5) これも、普遍的な原則。試練に会ったなら、どういう教訓があるかを問え。

Ⅲ. 弟子としての道(3つ)

1. 愛する者との敵対

- (1) 剣をもたらすために来た。信じる者と、そうでない者とを二分する。
- (2) イザヤ 8:14 の預言の成就。
- (3) イエスの時代以来、ユダヤ人たちはイエスによって二分されてきた。
- (4) 今も、イエスを信じたユダヤ人は迫害に会う。
(例話)フルクテンバウム師の例。
- (5) これも、普遍的な原則。

2. 十字架の道

- (1) 十字架を負うとは、イエスとともにこの世から拒否されること。
- (2) 「わたしにふさわしい者ではない」とは、弟子となれないということ。
- (3) 救いは、信仰により、恵みによる。弟子となることは、次の段階。
- (4) これも、普遍的な原則。

3. 死ぬことは生きること

- (1) イエスの十字架と一体となると、イエスの復活とも一体となる。
- (2) パウロの体験。ガラテヤ2:20
- (3) メシア的王国での報酬。
- (4) これも、普遍的な原則。

Ⅳ. 励まし

1. 救われる者は多い。

- (1) 神は救われる者を用意しておられる。
- (2) 弟子の使命は、忠実であること。

2. イエスの弟子が伝えるメッセージを信じる者は、イエスを受け入れている。

3. イエスの弟子に対して愛の行為を行った人は、報いを受ける。

- (1) どんな小さな者に対しても。
- (2) 救いのことではなく、メシア的王国での報いのこと。

結論

1. 11:1 指示を与え、伝道を開始している。
2. 時限法と、普遍的な真理との区別。
3. 救われただけの段階にとどまるのではなく、弟子となることを志す。
4. 主からの報いは大きい。

「マタイ 11 章」

イントロ:

1. 文脈を確認してみよう。
 - (1) 前は、12使徒の派遣の記事。
 - (2) イエスの活動が広がっていく時期。
 - (3) バプテスマのヨハネの登場。
 - (4) それを契機に、イエスは2つのテーマについて論じている。
 - ①リーダーはいかにあるべきか。
 - ②どういう人が救われるのか。
2. 以上の2点は、現在の日本が抱える問題でもある。
3. きょうのメッセージのアウトライン
 - (1) バプテスマのヨハネの質問
 - (2) 良いリーダーと、悪いリーダーの違い
 - (3) 救われる人と、救われない人の違い

マタイ 11 章は、2つの問題に答えを与えている。

I. バプテスマのヨハネの質問

1. 長期間獄中にあった。
2. 弟子たちの報告
 - (1) イエスはさほどの成功を収めていない。
 - (2) ユダヤ人の指導者たちは、イエスを拒否している。
3. バプテスマのヨハネの不安
 - (1) 自分が描くメシア像と異なる。
 - (2) メシア的王国は、いまだに成就しない。
 - (3) 自分は獄中にいる。
4. 不安の原因
 - (1) 神の国のプログラムを理解していない。
 - (2) メシアの来臨は、2度ある。
 - (3) 12使徒たちも理解していない。
5. 質問の内容
 - (1) あなたがメシアなのか。
 - (2) あるいは、誰か別の人を待つべきか。

6. イエスの回答

- (1) イエスは人の弱さを知っている。
- (2) 行って、聞いたり見たりしていることを報告せよ。メシア的「しるし」
イザヤ 35:5～6、61:1などを踏まえた回答。
- (3) 「わたしにつまずかない人は幸いです」

II. 良いリーダーと、悪いリーダーの違い

1. 良いリーダー

- (1) 風に揺れる葦
 - ①時代の風潮、人々の意見、権威などによって立場を変える人。
 - ②信念の人。「絶対に譲れないものを持っているか」
- (2) 柔らかい着物を着た人
 - ①裕福な生活に慣れ、ぬくぬくと暮らしている人。
 - ②荒野で叫ぶ声。それゆえ、人々は出て行った。
(例話) 牧師が病気で倒れた教会での奉仕。
エレミヤ 32 章。アナトテにある畑を買い取る。
- (3) 預言者
 - ①旧約聖書の系譜に属する預言者である。
 - ②預言者よりもすぐれた者。メシアの先駆者。
- (4) マラキ 3:1 は、バプテスマのヨハネにおいて成就した。
(例話)『ダメな政治リーダー』の特徴(朝日 2007.11.14)
複数の有名人の意見を集約して書かれたもの。
 - ①言語能力が低く、説明が冗長でアピール力がない。
 - ②自分の利益最大化だけを狙う。
 - ③本当に強い敵の前では自分を出せなくなる。
 - ④意思決定がぶれて、つじつまの合わない発言をする。
 - ⑤どうしても譲れない、大切なものがない。
- (5) 女から生まれた者の中で最高
 - ①旧約聖書の聖徒の中で最高。
 - ②バプテスマのヨハネに関する資料が不足している(使徒 19 章は参考になる)。
 - ③天の御国の一番小さい者でも、彼より偉大。
 - ④新約時代の聖徒のこと。
 - ⑤ヨハネは、十字架と復活を目撃しないで死ぬことが暗示されている。

2. 悪いリーダー

- (1) ヨハネの働きが始まって以降、天の御国の進展を妨害する人々がいる。
- (2) 主役はパリサイ人であり、脇役はサドカイ人。
- (3) 旧約聖書が預言していたメシアと、メシア的王国を拒否した。
- (4) メシア的王国を受け入れていたなら、ヨハネは来るべきエリヤとなっていた。
 - ①マラキ4:5～6
 - ②エリヤ自身が戻ってくることになる。
- (5) 彼らがイエスを拒否した理由。
 - ①表面的理由
 - * ヨハネの断食を批判
 - * イエスの飲み食いを批判
 - ②本当の理由
 - * パリサイ的傲慢
 - * ヨハネとイエスを操ろうとしたが、うまく行かなかった。

III. 救われる人と、救われない人の違い

1. 救われない人

- (1) コラジン、ベツサイダ、カペナウム
 - ①コラジンの記録はない。
 - ②ベツサイダは、ペテロとアンデレ、ピリポの故郷。5000 人の奇蹟。
 - ③カペナウムは、伝道の拠点となった町。
 - ④これらの町々で、イエスはメシアであることを証明する「しるし」を行った。
 - ⑤しかし、彼らは信じなかった。
- (2) ツロとシドン、ソドム
 - ①ツロとシドンは、傲慢のゆえにアッシリヤによって滅ぼされた。
 - ②ソドムは、不道德のゆえに硫黄の火によって滅ぼされた。
- (3) 裁きの日には、ガリラヤの町々の方がより重い罰を受ける。

2. 救われる人

- (1) 単純な真理
- (2) 賢い者や知恵ある者には、光が届かない。
- (3) 幼子には、光が届く。
 - ①見下されている人、貧しい人、謙遜な人
 - ②自分の限界を知っている人は、霊の目が開かれる。
- (4) 霊的真理は、啓示されて初めて分かるものである。

(5) イエスは、再び幼子たちを招く。

①「疲れた人、重荷を負っている人」:ミシュナのユダヤ人の重荷

②イエス自身が休ませてくださる。

③「わたしのくびきを負って」:ラビ的用語。「わたしの学校に入りなさい」

④イエスのくびきは負いやすく、その荷は軽い。

＊ 「キリストの律法」 ガラテヤ6:2

＊ 形式ではなく、実質

＊ 外側からではなく、内側から出るいのち

＊ 人間的な努力でなく、聖霊の働き

結論

1. 神は、私たちが幼子のようになり、救いを受けることを願っている。
2. 神は、信じた者がどのような特権に与っているかを知ることが願っている。
3. 神は、信じた者が良きリーダーとして成長することを願っている。

「マタイ 12 章」

イントロ:

1. 文脈を確認してみよう。
 - (1) イエスの公生涯を富士登山にたとえてみる。
 - ①富士宮口(洗礼)
 - ②御殿場口(十字架)
 - (2) 12使徒の派遣と伝道の広がり 5合目～7合目くらいの感じ。
 - (3) きょうの箇所は、8合目、9合目、頂上、そして、9合目、8合目
2. 頂上の出来事は、分水嶺
 - (1) イエスの公生涯の方針が激変する。
 - (2) イスラエルの運命が激変する。
 - (3) 私たちの人生が激変する。
3. 日本の現状 9合目から頂上に向かっている。
 - (1) 2008 年への期待
 - (2) よき弟子とならせていただこう

マタイ 12 章は、世界の歴史の分水嶺である。

I. 安息日論争(審問の段階) (8合目)

1. 麦の穂を摘む
 - (1) 麦の穂を摘むことは罪ではない。
(例話)ヨッシーさんとオレンジ畑
 - (2) 安息日にそれを行ったことが問題。
 - (3) 安息日に関して約 1,500 の細則。口伝律法(ミシュナ)は、モーセから。
 - (4) 4つの罪(収穫、脱穀、ふるい分け、貯蔵)。
 - (5) イエスの回答
 - ①ダビデの例(I サムエル 21:3～6)
 - ②レビ人が非レビ人にパンを与えるのは違反(口伝律法)
 - ③モーセの律法は、それを禁じていない。
 - ④安息日でも神殿では労働があった。
 - ⑤「宮よりも大きな者」:イエスによるメシア宣言
 - ⑥ホセア6:6の引用。憐れみに富んだ神。
(例話)「紳士たれ」

2. 片手のなえた人

- (1) 安息日に人を癒すことは、律法違反。
- (2) 生死にかかわる場合は、癒してもいいが、この人の場合はそれに該当しない。
- (3) イエスを訴える口実を見つけようとしていた。
- (4) イエスの回答
 - ①小から大への論証:ラビ的教授法
 - ②羊よりも人間の方が大切
 - ③愛の実行
- (5) パリサイ人たちの反応
 - ①怒り
 - ②殺意
 - ③イエスがパリサイ人の権威を否定したため
(例話)いじめに会っている部下は、どのように仕返しをするか。

II. 主のしもべの預言の成就 (9合目)

1. イエスの後を追う人々
 - (1) 彼らをみな癒した。
2. イザヤ 42 章のメシア預言の成就(マタイはユダヤ人のために書いている)。
 - (1) 聖霊に満たされた方
 - (2) 謙遜を身に付けた平和の君
 - (3) 憐れみと忍耐に富んだ方
 - (4) 異邦人の光

III. ベルゼブル論争 (頂上)

1. 口のきけない人から悪霊を追い出した。メシアにしかできない奇蹟。
 2. 群衆の反応:「ダビデの子なのだろうか」=「メシアなのだろうか」
 3. パリサイ人たちの判断
 - (1) イエスをメシアとして認めるか、認めないか。
 - (2) 認めなかった。
 - (3) その理由は、「悪霊どものかしらベルゼブル」につかれている。
 - (4) これが、ユダヤ人たちがイエスを拒否する公式の理由となった。
 - ①タルムードは、イエスは魔術によって人々を惑わせたという。
 - ②イエスが奇蹟を行ったことは否定していない。
- (例話)ユダヤ人のリーダーコンプレックス

4. イエスの答え

- (1) 内部分裂すれば、悪の国も立ち行かなくなる。
- (2) 神学的矛盾: 自分たちは神の力によって悪霊を追い出していると言いながら…。
- (3) 神の国はすでに到来している。メシア宣言。
- (4) メシアはサタンよりも強い。

5. 赦されない罪

- (1) 恐怖を与える聖句である。
- (2) これは、当時のユダヤ人だけが犯すことのできる罪。「今の時代の人々」
- (3) これは、民族的な罪。
- (4) これは、後の時代のユダヤ人に適用すべきではない。
- (5) 個人は、いつの時代でも、十字架の贖いによって赦される。告白と信仰。
- (6) 罪の結果
 - ①ユダヤ人に提供されていた天の御国は取り去られた。
 - ②再度提供されるのは、患難時代のユダヤ人(マタイ 24～25 章)。
 - ③紀元 70 年のエルサレムと神殿の崩壊

IV. ヨナのしるし (9合目)

1. より多くの「しるし」を求めるユダヤ人たち。
2. 彼らに与えられるのは、「預言者ヨナのしるし」
 - (1) ラザロの蘇生
 - (2) イエスの復活
 - (3) 黙示録 11 章の 2 人の証人の復活
3. 異邦人はより少ない光に応答したが、ユダヤ人はそうではなかった。
 - (1) ニネベの人々
 - (2) 南の女王(シェバの女王)
4. 汚れた霊のたとえ
 - (1) 掃除された家とは、ヨハネの働きによってきれいになったユダヤ人。
 - (2) それを空き家にしていた。
 - (3) 最後は、より悪くなる。紀元 70 年から現在に至る離散の状況。

V. イエスの家族 (8合目)

1. 心配する家族
2. イエスの回答
 - (1) パリサイ派の神学の否定。肉体的つながりは、意味を持たない。
 - (2) 霊的新生こそ、神の国の家族となる方法である。

3. ポリシーの変更(神の国のプログラムの変更)

- (1) 民衆から12使徒へ
- (2) 民衆の前での奇蹟(信仰は問われない)から、私的な奇蹟(信仰が問われる)へ。
- (3) メシアであることを言い広めることから、沈黙へ。
- (4) 明瞭な教えから、たとえ話へ。

結論

1. イエスの公生涯の頂上で起こったことが、今も影響を与えている。
2. 私が行った決断が、家族にも影響を与えている(母は天国に行く)。
3. 神からの呼びかけ
「それとも、神の慈愛があなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かな慈愛と忍耐と寛容とを軽んじているのですか」(ローマ2:4)
「神は言われます。『わたしは、恵みの時にあなたに答え、救いの日にあなたを助けた』。確かに、今は恵みの時、今は救いの日です」(Ⅱコリント6:2)

「マタイ 13 章」

イントロ:

1. 2008 年元旦をエルサレムで迎えた。
 - (1) 歴史観と時代感覚の重要性を再認識した。
 - (2) クリスマンにとっては、マタイ 13 章は時代感覚を養う上で重要である。
2. マタイ 13 章は、たとえ話の章である。
 - (1) なぜ、たとえで話すのか(10 節)
 - ①弟子たちには真理を示す。
 - ②群衆からは真理を隠す。
 - ③イザヤ6:9、10 の預言が成就するため。
3. 文脈:ユダヤ人がイエスを拒否して以降「天の御国」の意味が変わった。
 - (1) 普遍的で永遠の王国。被造世界に対する神の支配を表している。
 - (2) 霊的な王国。信者の心の中にある神の支配を表している。

この中には、アダム以来のすべての信者(新生した者)が含まれている。
 - (3) 神政政治の王国。イスラエルに対する神の支配を表している。

モーセからサムエルまでが仲介者を通しての統治。
ダビデからゼデキヤまでが王による直接統治。
 - (4) メシア的王国(千年王国)
 - ①旧約聖書の預言の主要なテーマ
 - ②バプテスマのヨハネとイエスのメッセージ(マタイ 3:2、4:17)
 - ③ユダヤ人たちがイエスをメシアとして受け入れていたなら成就していた。
 - (5) 奥義としての王国(マタイ 13:11)
 - ①神の国のプログラムが変更された結果、挿入句のように出現した。
 - ②ユダヤ人がイエスを拒否した時から、イエスの再臨までの期間。
 - ③教会時代とほぼ同じ期間存続する。
 - ④「キリスト教界」が最も適切な言葉(信者もそうでない者も含まれる)

マタイ 13 章にあるたとえ話は、奥義としての王国の内容を解説している。

I. 「種蒔きのたとえ」

1. 最も基本になるたとえ話
2. この時代に、福音の種は継続して蒔かれる。
3. 福音に敵対する力が働く。この世、サタン、肉。

4. 福音に対するさまざまな反応がある。
 - (1) 不信仰。
 - (2) 信仰が育たない。
 - (3) 学んだ真理を適用できない。
 - (4) 豊かな実をつける。100 倍、60 倍、30 倍。

II. 「種の生長」(マルコ4:26～29)

1. 福音の種には、いのちが内蔵されている。
2. 福音の3つの要素
 - (1) イエスが私たちの罪のために死なれたこと。
 - (2) 墓に葬られたこと。
 - (3) 3日目に甦られたこと。
3. 正しい種を蒔くことが私たちの使命。
(例話) 今回の聖地旅行で、3名が決心した。

III. 「毒麦のたとえ」

1. 神は良い種を蒔かれるが、敵である悪魔はそれに対抗して悪い種を蒔く。
2. 良い麦と毒麦が並行して育ち、見分けがつかない。
3. 終わりには、本物と偽物の区別がなされる。メシア的王国への準備。
4. 悪人が栄えても、うらやましく思うな。

IV. 「からし種のたとえ」

1. 始まりは小さいが、外面的には大いに拡大する(3メートルを超える)。
2. その中にサタンの影響がとどまる。鳥とは、悪魔のこと。
3. キリスト教界は世界的な広がりを見せるが、その中に異端やカルトが存在する。
 - (1) エホバの証人
 - (2) モルモン教
 - (3) 統一協会

V. 「パン種のたとえ」

1. 「女」とは、偽の宗教体系
 - (1) イゼベル(黙示録 2:20)
 - (2) 大淫婦(黙示録 17:1～8)
2. 「パン種」とは、偽りの教理

3. 「3サトン」とは、キリスト教会の3つのグループ
 - (1) カトリック
 - (2) 東方正教会
 - (3) プロテスタント
4. それぞれが偽りの教理を内包する。

VI. 「畑に隠された宝のたとえ」

1. 宝とは、イスラエルのこと(出エジプト 19:5、申命記 14:2、詩篇 135:4)
2. 偽りの教理が入り込むが、それでも、ユダヤ人の中から救われる者が起こされる。
3. イエスを信じるユダヤ人は、隠された宝のよう。イスラエルの残れる者。

VII. 「海の真珠のたとえ」

1. 真珠が何かは、旧約聖書には言及がない。
2. 海は、異邦人の世界を象徴している(ダニエル7:2～3、黙示録 17:1、15)。
3. 異邦人の中からも救われる者が起こされる。
4. 「畑を買う人」、「真珠を買う商人」はともに、すべてを犠牲にしている。主イエスの姿。

VIII. 「地引き網のたとえ」

1. 毒麦のたとえに似ている。神の民と不信者との共存。
2. 終わりの時に、神の民とそうでない者とがより分けられる。
 - (1) メシア的王国の準備となる裁き。
 - (2) 羊と山羊の裁き(マタイ 25:31～46)と同じ。
3. 不信者はメシア的王国から除外され、信者は、メシア的王国に入れられる。

IX. 「天の御国の弟子のたとえ」

1. 奥義としての王国には、新しい要素がある。
 - (1) 今まで啓示されていなかったのもので、奥義と呼ばれる。
 - (2) 教会もまた、奥義である。新約時代になって初めて啓示された。
2. 古い要素もある。
 - (1) 信仰のみによって救われるというのは、普遍的な真理。
3. 天の御国の弟子となった者は、新しい真理と古い真理を、自由に取り出せる。

結論

「マタイ 14 章」

イントロ:

1. マタイ 14 章のテーマは「12弟子の訓練」である。
2. 文脈を確認する。
 - (1) 4:12 バプテスマのヨハネの逮捕
 - (2) 12:24 ユダヤ人指導者たちによるイエスの拒否:赦されない罪
 - (3) 14:12 バプテスマのヨハネの死
3. イエスの「時の認識」は鋭い。
 - (1) マタイ 13 章のたとえ話の多用
 - (2) 関心を群衆から、12弟子に向ける。
 - ①先駆者の死。先駆者に起こったことはメシアにも起こる。十字架への道。
 - ②使徒行伝の時代に備えるための弟子訓練が始まる。
4. イエスを次の段階に押し出した出来事。バプテスマのヨハネの死
 - (1) ヘロデ・アンティパス(ヘロデ大王の息子、国主)
 - (2) ヘロデ・ピリポ(ヘロデ大王の息子)
 - (3) ヘロデヤ(ヘロデ大王の孫娘)。ピリポと結婚。近親相姦の罪。
 - (4) 夫が生きている内に、ヘロデ・アンティパスと結婚。姦淫の罪。近親相姦の罪。
 - (5) その罪をバプテスマのヨハネが糾弾。
 - (6) ヘロデヤはヨハネを殺そうとしたが、ヘロデは牢獄で生かしておいた。
 - (7) ヘロデヤの娘サロメが踊り、その褒美としてバプテスマのヨハネの首を要求。
5. クリスマンそれぞれが「時の認識」を持つ必要がある。
 - (1) 今のあなたは？
 - ①年が改まったこと
 - ②年齢がある段階に達したこと
 - ③家庭に変化が起こったこと
 - ④大きな喪失体験をしたこと、などなど。
 - (2) イエスが12弟子を訓練する方法を、立ち聞きしているようなもの。

イエスは12弟子に4種類の訓練を施した(2つは大きな訓練、2つは小さな訓練)

I. パンと魚の奇蹟による訓練

1. 総論的な情報
 - (1) イエスが行った奇蹟の中で、4福音書すべてに記録されている唯一のもの。
 - (2) ヨハネの福音書では、7つのしるしの第4番目。
 - (3) 時期は、イエスの公生涯が始まってから3度目の過越の祭りの時期。

(4) 2年半が経過している。それから一年後に十字架にかけられて死ぬ。

2. 群衆

(1) 陸伝いにイエスの後を追ってきた。

(2) 指導者はイエスを拒否したが、民衆は依然としてイエスに興味を抱いていた。

(3) しるしを見たから。物質的祝福に興味があった。

(4) それでもイエスは、彼らを祝福した。彼らの空腹まで満たされた。

3. 弟子の訓練(ヨハネ6章が並行記事)

(1) 「あなたがたで、あの人たちに何か食べる物を上げなさい」

(2) ピリポを試す。

(3) アンデレの賜物。人を連れてくる。

(4) その結果、男子だけで 5,000 人が満足。余ったものは 12 のかごに一杯になった。

4. 3つの教訓

(1) イエスの弟子たちには、牧者として人々を養う責任がある(イエスがいなくとも)。

(2) 自分の力だけでこの責任を果たすことは不可能である。

(3) メシアが下さる良きものを人々に配給するのが弟子の使命。

(例話)聖なる手抜き

II. 奇蹟が起こった場所での訓練

1. 群衆の評価(ヨハネ6:14~15)

(1) イエスこそ世に来られるはずの預言者だ。申命記 18:15

(2) イエスをガリラヤの王にしようとする。

(3) 弟子たちにも注目が集まった。

2. イエスの思い

(1) 弟子たちを強いて舟に乗り込ませ、先に向こう岸に行かせる。

(2) イエス自身は、山に登り、父なる神と語り合う。

3. 群衆とイエスの間にあるギャップ

(1) 赦されない罪がすでに犯された。回帰不能。

(2) メシアはガリラヤの王ではなく、エルサレムで王となる(詩篇2篇)。

(3) 群衆の動機が間違っていた。

4. この世の価値観や道徳基準に同化して行く危険性を避ける。

Ⅲ. 嵐の湖での訓練

1. 弟子たちは、およそ9時間格闘していた。たった4～5キロメートルしか進まない。
2. イエスの姿を見て、恐れた。死の天使だと思った。
3. 「しっかりしなさい。わたしだ。恐れることはない」
4. ペテロの願いと主の許可。
 - (1) 歩いてみると、それができた。
 - (2) しかし、イエスから目が離れて風を見た時、こわくなって沈みかけた。
 - (3) ペテロの叫びと、主イエスによる救出。
5. イエスが舟に乗ると、風は止んだ。
 - (1) 舟にいた者たちの信仰告白。「確かにあなたは神の子です」。
 - (2) 彼らの神学は正しかったが、それを生活に適用できていなかった。
6. 3つの教訓
 - (1) 信仰は、第一歩を踏み出すことが大切。
 - (2) 神の御心に従っていても、嵐は来る。
 - (3) 一歩踏み出した後も、イエスを見続ける必要がある。

Ⅳ. ゲネサレの地での訓練

1. ナザレで拒否されたイエスが、ここでは歓迎されている。
2. 動機は、パンを食べて満足したから(ヨハネ6:22～71)。
3. その中には、イエスに信頼を置く者もいた。イエスはその人たちを癒した。
4. 着物のふさ
 - (1) マタイ9:20 長血の女
 - (2) 「ふさ」とはツイツイオットのこと(民数記 15:38～)
 - (3) 神のこばを象徴的に表したもの。
5. 神のこばに対する信頼こそ、力を受ける秘訣である。

結論

1. 主から受け、人々に与えよ。
2. 人の評価を求めな。
3. 一歩踏み出し、イエスの顔を見続けよ。
4. 神のこばに信頼せよ。

「マタイ 15 章」

イントロ:

1. 文脈を確認する。
 - (1) 公生涯の後半に入っている。
 - (2) 12:24 ユダヤ人指導者たちによるイエスの拒否:赦されない罪
 - (3) ユダヤ人の地と異邦人の地での出来事
2. より大きな文脈を確認する。神の人類救済計画の確認。
 - (1) 神はアブラハムを選び、契約を結んだ。
 - (2) アブラハム、イサク、ヤコブ、イスラエルの12部族。
 - (3) 出エジプト体験の後に、モーセの律法が与えられた。
 - (4) イスラエルの民の自己認識と、異邦人への偏見。
3. 現代の国際政治の背後には、ユダヤ教とキリスト教の複雑な関係が横たわっている。
 - (1) ユダヤ教をどう理解するか。
 - (2) キリスト教の正しい位置づけ。
 - (3) ユダヤ教とキリスト教の差異を乗り越えた時点にある信仰の本質。

ユダヤ人の地と、異邦人の地で起こったことから、信仰の本質を学ぶことができる。

I. ユダヤ人の地での出来事

1. 律法論争について
 - (1) すでに断食論争、安息日論争があった。
 - (2) ここでは、「食前の清めの洗い」が論争のテーマとなっている。
 - (3) この論争は、「律法」と「律法主義」の論争である。
 - ①律法とは良いもの、モーセの律法。
 - ②律法主義とは、形式にこだわるあまり、結果的に神の律法に反すること。
 - (4) パリサイ人たちがこだわったのは、「先祖たちの言い伝え」を守ること。
 - ①口伝律法(ミシュナ)のこと。
 - ②モーセの律法(613)に、垣根を施したもの。
 - ③動機は、イスラエルの民を守るため、またメシアの到来を促進するため。
 - ④口伝律法は、モーセの律法と同等かそれ以上の権威があるとされた。
 - ⑤イエスはモーセの律法を破ったことはないが、口伝律法は無視された。

(例話) 現代の口伝律法。部屋に入る前に悪霊を追い出す。

2. 「食前の清めの洗い」

- (1) 衛生上の理由ではなく、儀式的な汚れを取るための口伝律法。
 - ①指先から肘までを洗う。
 - ②市場から帰った場合は、体全部を清めてからでないと食事をしない。
 - ③食器の清めに関しても、さまざまなしきたりがあった。
- (2) パリサイ人たちは、イエスと弟子たちを非難した。
- (3) イエスの回答。「先祖たちの言い伝えを守るために、神の戒めを犯している」
- (4) その一例として、コルバン規定を上げる。
 - ①十戒の第5戒。両親を敬え。
 - ②パリサイ人の中には、非パリサイ人の両親の援助を嫌う傾向があった。
 - ③息子としての義務を回避する手法が、コルバン規定。
 - ④コルバン宣言をすれば、神殿への捧げ物か私用のものとなる。
 - ⑤イザヤ 29:13 の引用。

3. たとえ話とその解説

- (1) 当時のイエスの教授法のパターン
 - ①たとえ話で群衆に教える。
 - ②民衆には理解できない。
 - ③弟子たちも理解できない。
 - ④ペテロが代表して質問をする。
 - ⑤イエスがたとえ話を解き明かす。
- (2) イエスの3つのたとえ話。
 - ①口から入るものではなく、口から出るものが人を汚す。
 - ②父が植えなかった木は、みな根こそぎにされる。
 - ③盲人が盲人の手引きをするなら、ともに滅びる。
- (3) イエスの解き明かし。
 - ①汚れは心から出てくる。イエスをメシアと信じ、聖霊によって清められる。
 - ②パリサイ派の教えは、神が植えた木ではない。

(例話)現代のユダヤ教は、タルムードを基礎としている。
ミシュナ + ゲマラ = タルムード。
啓示された神のことばに照らして、すべて判断することが重要。
 - ③盲人による手引きの結果。紀元 70 年のエルサレム崩壊。

(例話)セカンドチャンス論。
動機は理解できる。しかし、現代の口伝律法になりつつある。
どう判断するかは責任は、各人にある。

Ⅱ. 異邦人の地での出来事(1)

1. 場所

- (1) ツロとシドンの地方(今のレバノン)
- (2) 弟子訓練のため。2回目のリトリート

2. 登場人物

- (1) カナン人の女。総称。
- (2) より具体的には、ギリシア人で、スロ・フェニキヤの生まれ。
- (3) 娘が悪霊につかれていた。

3. イエスとの対話

(1) 女の願い

- ①「ダビデの子」とはメシア的タイトル。
- ②この女は、イエスをメシアと認めて奇蹟を求めている。
- ③異邦人として、立派な信仰。

(2) イエスの対応

- ①沈黙
- ②弟子たちの願い。「あの女を帰してください」
- ③「イスラエルの家の滅びた羊以外のところには遣わされていない」
 - * 一見、冷たい言葉のように感じる。
 - * 問題は、この女が奇蹟を求めた根拠にある。
 - * 彼女は、イスラエルの民のために用意された祝福を願っている。
 - * イエスは、父なる神の計画に忠実。

(3) 再度、女の願い

- ①言葉が変化している。「主よ。私をお助けください」
- ②個人的な苦境に対する憐れみだけを求めている。

(4) イエスのテスト

- ①女の信仰を試した。
- ②「子どものパンを取り上げて、子犬に投げてやるのはよくない」
 - * 子どものパンとは、イスラエルの民が受ける祝福。
 - * 子犬とは、異邦人(言葉のニュアンスは悪いものではない)。
- ③女の回答。「子犬でも、落ちたパン屑は」
 - * イスラエルの民が受ける祝福を奪おうとしているのではない。
 - * 異邦人に用意されている祝福を求めているだけである。

(5) イエスからの祝福

- ①異邦人としての信仰
- ②願い通りになるように。

Ⅲ. 異邦人の地での出来事(2)

1. 場所

- (1) デカポリス。ガリラヤ湖の東岸。
- (2) 第3回目のリトリート。弟子訓練。
- (3) マタイ8章。レギオンにつかれていた2人の男。
 - ①解放された彼らは、イエスの弟子にはなれず家に帰された。
 - ②そこで彼らは、伝道の成果を上げた。

2. 癒しの奇蹟

3. 4千人の給食

- (1) 5千人の奇蹟とは異なる。
 - ①パンと魚の数が違う(7つのパン、少しの魚)。
 - ②人数も違う。
 - ③残ったパン屑も違う(12のかご、7つのかご)
- (2) 主要な目的は、弟子訓練。
 - ①パンをどこから手に入れるか。
 - ②弟子たちの沈黙
 - * 前回の奇蹟から学ばなかったのか。
 - * 異邦人にパンを配ることに抵抗があったのか。
- (3) イエスからパンを受け、それを配ることを学んだ。
- (4) 12はイスラエルの民を、7は異邦人を象徴する数字。
 - ①異邦人が祝福を受ける時が近づいている。
 - ②それは、十字架の時である。

結論

1. ユダヤ人であっても、異邦人であっても、救いの道は同じ。
 - (1) メシアを信じる信仰。
 - (2) 聖霊による心の清め。
 - (3) いかなる教えも、人間の教えであるならそれは滅びる。ユダヤ教も同じ。
2. イエスの十字架によって、異邦人の救いの時が到来した。
 - (1) モーセの律法の要求が満たされた。
 - (2) 異邦人も、アブラハム契約の祝福にあずかるようになった。
3. ユダヤ人の救いの時が近づいている。
 - (1) 異邦人の時が終わりに近づいている。
 - (2) ユダヤ人の救いとメシアの再臨。
 - (3) ユダヤ・キリスト教の価値観に対抗するものとしてのイスラム教の復興。

「マタイ 16 章」

イントロ:

1. 文脈を確認する。
 - (1) イエスの公生涯の最後の年。
 - (2) 弟子訓練に精力を注ぐ。
 - (3) きょうの箇所は、弟子訓練の頂上である。
2. 目には、肉体の目と心の目(霊的な目)とがある。
 - (1) マルコ8:22～26 の盲人の癒し。
 - (2) 段階を追って癒されている。福音書の奇蹟では、これが唯一のもの。
 - (3) イエスの弟子たちも、段階を追って目が開かれている。
 - ①盲目の段階
 - ②半分見えた段階
 - ③すべて見えた段階(ペンテコステ以降)
 - (4) 私たちも、立ち聞きをしながら、よりよい弟子とならせていただく。

目が開かれていく段階を確認することによって、より良きイエスの弟子となることができる。

I. 霊的な目が閉ざされている段階

1. パリサイ人やサドカイ人
 - (1) 「天からのしるし」を求める。
 - (2) これまでイエスが行ったしるしは、「地獄(サタン)からのしるし」である。
 - (3) イエスの回答。
 - ①空模様の見分け方は知っている。
 - ②「時のしるし」は見分けられない。「今がどういう時かを示すしるし」。
 - ③私たちは、今がどういう時かを見分けているか。
 - (4) 「ヨナのしるし」しか、与えられない(マタイ 12:39 の繰り返し)
 - ①ラザロの蘇生。
 - ②イエスの復活。
 - ③黙示録 11 章の2人の証人の復活。
 - (5) マタイ 12 章以降の奇蹟は、イスラエル全体のためではなく、弟子訓練のため。
2. 弟子たち
 - (1) パリサイ人やサドカイ人たちのパン種に注意せよ。
 - (2) 弟子たちの誤解

(3) イエスの解説

- ①パン種とは、「罪」、「偽りの教え」のこと。
- ②パリサイ人のパン種とは、イエスが悪霊につかれているという教え。
- ③サドカイ人のパン種とは、イエスが神殿礼拝を否定しているという教え。

(4) 弟子たちは、ようやく「悟った」。

- ①その悟りがどの程度であるかを試すテストがやって来る。
- ②パン種は、イエスのメシア性を否定する教え。
- ③弟子たちは、イエスがメシアであることを認められるか。

II. 霊的な目が開かれる段階

1. 場所

- (1) ピリポ・カイザリヤは、ヘルモン山の麓の町。
- (2) 元の名は「パニアス」。偶像神「パン」の宮があった。
- (3) アウグストからその町を与えられたヘロデ大王は、皇帝崇拝の神殿を建てた。
- (4) その子ヘロデ・ピリポは、テベリオに敬意を表してピリポ・カイザリヤとした。
- (5) 切り立った崖と洞窟。当時は、そこから水が溢れ、パニヤス川となっていた。
- (6) 川底には、大小さまざまな石が散らばっていた。

2. イエスの質問(1)

- (1) 「人々は人の子をだれだと言っていますか」
- (2) 弟子たちの答え
 - ①バプテスマのヨハネ。復活したヨハネ。
 - ②エリヤ。マラキ書4章の成就。
 - ③エレミヤ。涙の預言者。
 - ④預言者のひとり。それ以外の預言者。
- (3) イエスの超自然的な権威は認めているが、メシア性は認めていない。

3. イエスの質問(2)

- (1) 「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか」
- (2) 「あなたがた」に強調点がある。
- (3) ペテロの答え。
 - ①メシアです。
 - ②神の御子です。
 - ③生ける神の。
- (4) イエスの応答。祝福のことば。
 - ①幸いです。
 - ②天の父が示された。
 - ③イエスがメシアであるとの信仰を与えられている私たちは、幸いである。

4. 教会設立の約束

- (1) 「わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます」
- (2) カトリック教会は、「この岩」をペテロと取る。しかし、釈義上の無理がある。
- (3) 「ペテロ(ペテロス)」(男性名詞)とは小石のこと。
- (4) 「岩(ペトラ)」(女性名詞)とは岩山のこと。
 - ①旧約聖書では、「岩」が象徴的に用いられた場合は、メシアを指す。
 - ②ここでの「岩」は、イエスをメシアとして信じる信仰。
- (5) 「教会」という言葉が初めて出てくる。
 - ①未来形。教会が建てられるのは将来のこと。
 - ②「教会」という概念は、マタイ 16 章で初めて出てくる概念。
 - ③ペンテコステの日に教会が誕生した(使徒2章)。
 - ④教会は、奥義である(エペソ3:6)。
 - ⑤「ハデスの門もそれに打ち勝てない」。教会の永続性のこと。

5. ペテロに権威を与える約束

- (1) 「天の御国のかぎ」
 - ①この文脈では、「天の御国」とは霊的な王国(教会)のこと。
 - ②ペテロは、閉ざされた扉を開いて、人々を教会に入れる役目を果たす。
 - * 使徒2章。ユダヤ人。
 - * 使徒8章。サマリヤ人。
 - * 使徒9章。異邦人(コルネリオ)。
 - ③一度開いた扉は、開かれたままである。
- (2) 使徒的権威。
 - ①「つなぐ(縛る)」、「解く」の意味。
 - * 紀元1世紀のラビ用語。
 - * 禁止と許可。有罪と無罪。
 - ②新約聖書の書簡の中にある教え。
 - ③アナニヤとサツピラに下った神の裁き(使徒5章)。
 - ④悪霊の縛りとは無関係。
 - ⑤「悪魔に立ち向かいなさい」(Ⅰペテロ5:9)とあるだけ。

Ⅲ. 霊的な目が未だにぼやけていることが明らかになる段階

1. 初めてのメシア受難の予告

- (1) 神の国のプログラム。
- (2) これ以降、繰り返される(17:9、12、22～23、20:18～19)。
- (3) 先に行くほど詳細になるが、弟子たちは理解しなかった。
- (4) イエスが十字架にかかった時、仰天した。

2. 受難の4つの側面

- (1) エルサレムに上る。
- (2) 長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受ける。
- (3) 殺される。
- (4) 3日目に復活する。

3. ペテロの反応

- (1) イエスを引き寄せて、いさめる。
- (2) イエスは、「下がれ。サタン」と言われた。
 - ①ペテロの行動が、サタンの立場に立っている。
 - ②十字架から遠ざける。
 - ③荒野の誘惑の本質も、それと同じものであった。
- (3) 神学(理解)が伴わない「熱心な信仰」は、危険である。

4. 弟子としての道

- (1) 日本流に言うところ「弟子道」である。
- (2) 救いは、信仰により、恵みによって与えられる。これが基本の真理。
- (3) イエスの弟子になるためには犠牲が伴う。
 - ①自分を捨てる。自己中心的な生活をやめる。
 - ②十字架を負う。イエスの死と一体化する。
 - * この文脈では、ユダヤ人の指導者たちから拒否されること。
 - * 私たちも、この世から拒否されてもそれを甘受する。
- (4) いのちを救おうとする者はそれを失う。
- (5) イエスのためにいのちを失う者は、それを見いだす。
 - ①霊的な守り、安全が保証される。
 - ②霊的な豊かさが保証される。

(例話) 毎月贈呈している 140 冊の「クレイ」の中の 35 冊が K 刑務所用。

- * 現在 35 名が、「クレイ」を使ってデボーションをしている。
- * その内、5～6名が洗礼の学びをしている。
- * 昨年3名が洗礼を受け、合計6名がクリスチャン生活を送っている。
- * 昨年は6回のグループ教誨があったが、驚くような聖霊の祝福があった。
- * 書籍係りが、毎月の「クレイ」の差し入れを見て、自分もと申し出た。
- * 2月6日には、3名の洗礼式がある。
- * 来月号から5冊増やして 40 冊にして欲しい。

5. 将来の報酬

- (1) 受難のしもべは、栄光の王、審判者として再臨される。
- (2) その時、それぞれに報いが与えられる。それは、千年王国での地位に関係する。
- (3) 弟子たちの中には、その生存中に、神の国の栄光を見る人がいる(マタイ 17 章)。

結論

1. イエスはメシアである。これで、50 点。
2. イエスは受難のしもべである。これで、75 点。
3. イエスの弟子となる道は、私たちに2つのことを約束している。これで、100 点。
 - (1) 弟子たちには、地上生涯での霊的安全と豊かさが保証されている。
 - (2) やがて来るべき千年王国においては、重要な使命と地位とが用意されている。

「マタイ 16 章」

イントロ:

1. 文脈を確認する。
 - (1) イエスの公生涯の最後の年。
 - (2) 弟子訓練に精力を注ぐ。
 - (3) きょうの箇所は、弟子訓練の頂上である。
2. 目には、肉体の目と心の目(霊的な目)とがある。
 - (1) マルコ8:22～26 の盲人の癒し。
 - (2) 段階を追って癒されている。福音書の奇蹟では、これが唯一のもの。
 - (3) イエスの弟子たちも、段階を追って目が開かれている。
 - ①盲目の段階
 - ②半分見えた段階
 - ③すべて見えた段階(ペンテコステ以降)
 - (4) 私たちも、立ち聞きをしながら、よりよい弟子とならせていただく。

目が開かれていく段階を確認することによって、より良きイエスの弟子となることができる。

I. 霊的な目が閉ざされている段階

1. パリサイ人やサドカイ人
 - (1) 「天からのしるし」を求める。
 - (2) これまでイエスが行ったしるしは、「地獄(サタン)からのしるし」である。
 - (3) イエスの回答。
 - ①空模様の見分け方は知っている。
 - ②「時のしるし」は見分けられない。「今がどういう時かを示すしるし」。
 - ③私たちは、今がどういう時かを見分けているか。
 - (4) 「ヨナのしるし」しか、与えられない(マタイ 12:39 の繰り返し)
 - ①ラザロの蘇生。
 - ②イエスの復活。
 - ③黙示録 11 章の2人の証人の復活。
 - (5) マタイ 12 章以降の奇蹟は、イスラエル全体のためではなく、弟子訓練のため。
2. 弟子たち
 - (1) パリサイ人やサドカイ人たちのパン種に注意せよ。
 - (2) 弟子たちの誤解

(3) イエスの解説

- ①パン種とは、「罪」、「偽りの教え」のこと。
- ②パリサイ人のパン種とは、イエスが悪霊につかれているという教え。
- ③サドカイ人のパン種とは、イエスが神殿礼拝を否定しているという教え。

(4) 弟子たちは、ようやく「悟った」。

- ①その悟りがどの程度であるかを試すテストがやって来る。
- ②パン種は、イエスのメシア性を否定する教え。
- ③弟子たちは、イエスがメシアであることを認められるか。

II. 霊的な目が開かれる段階

1. 場所

- (1) ピリポ・カイザリヤは、ヘルモン山の麓の町。
- (2) 元の名は「パニアス」。偶像神「パン」の宮があった。
- (3) アウグストからその町を与えられたヘロデ大王は、皇帝崇拝の神殿を建てた。
- (4) その子ヘロデ・ピリポは、テベリオに敬意を表してピリポ・カイザリヤとした。
- (5) 切り立った崖と洞窟。当時は、そこから水が溢れ、パニヤス川となっていた。
- (6) 川底には、大小さまざまな石が散らばっていた。

2. イエスの質問(1)

- (1) 「人々は人の子をだれだと言っていますか」
- (2) 弟子たちの答え
 - ①バプテスマのヨハネ。復活したヨハネ。
 - ②エリヤ。マラキ書4章の成就。
 - ③エレミヤ。涙の預言者。
 - ④預言者のひとり。それ以外の預言者。
- (3) イエスの超自然的な権威は認めているが、メシア性は認めていない。

3. イエスの質問(2)

- (1) 「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか」
- (2) 「あなたがた」に強調点がある。
- (3) ペテロの答え。
 - ①メシアです。
 - ②神の御子です。
 - ③生ける神の。
- (4) イエスの応答。祝福のことば。
 - ①幸いです。
 - ②天の父が示された。
 - ③イエスがメシアであるとの信仰を与えられている私たちは、幸いである。

4. 教会設立の約束

- (1) 「わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます」
- (2) カトリック教会は、「この岩」をペテロと取る。しかし、釈義上の無理がある。
- (3) 「ペテロ(ペテロス)」(男性名詞)とは小石のこと。
- (4) 「岩(ペトラ)」(女性名詞)とは岩山のこと。
 - ①旧約聖書では、「岩」が象徴的に用いられた場合は、メシアを指す。
 - ②ここでの「岩」は、イエスをメシアとして信じる信仰。
- (5) 「教会」という言葉が初めて出てくる。
 - ①未来形。教会が建てられるのは将来のこと。
 - ②「教会」という概念は、マタイ 16 章で初めて出てくる概念。
 - ③ペンテコステの日に教会が誕生した(使徒2章)。
 - ④教会は、奥義である(エペソ3:6)。
 - ⑤「ハデスの門もそれに打ち勝てない」。教会の永続性のこと。

5. ペテロに権威を与える約束

- (1) 「天の御国のかぎ」
 - ①この文脈では、「天の御国」とは霊的な王国(教会)のこと。
 - ②ペテロは、閉ざされた扉を開いて、人々を教会に入れる役目を果たす。
 - * 使徒2章。ユダヤ人。
 - * 使徒8章。サマリヤ人。
 - * 使徒9章。異邦人(コルネリオ)。
 - ③一度開いた扉は、開かれたままである。
- (2) 使徒的権威。
 - ①「つなぐ(縛る)」、「解く」の意味。
 - * 紀元1世紀のラビ用語。
 - * 禁止と許可。有罪と無罪。
 - ②新約聖書の書簡の中にある教え。
 - ③アナニヤとサツピラに下った神の裁き(使徒5章)。
 - ④悪霊の縛りとは無関係。
 - ⑤「悪魔に立ち向かいなさい」(Ⅰペテロ5:9)とあるだけ。

Ⅲ. 霊的な目が未だにぼやけていることが明らかになる段階

1. 初めてのメシア受難の予告

- (1) 神の国のプログラム。
- (2) これ以降、繰り返される(17:9、12、22～23、20:18～19)。
- (3) 先に行くほど詳細になるが、弟子たちは理解しなかった。
- (4) イエスが十字架にかかった時、仰天した。

2. 受難の4つの側面

- (1) エルサレムに上る。
- (2) 長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受ける。
- (3) 殺される。
- (4) 3日目に復活する。

3. ペテロの反応

- (1) イエスを引き寄せて、いさめる。
- (2) イエスは、「下がれ。サタン」と言われた。
 - ①ペテロの行動が、サタンの立場に立っている。
 - ②十字架から遠ざける。
 - ③荒野の誘惑の本質も、それと同じものであった。
- (3) 神学(理解)が伴わない「熱心な信仰」は、危険である。

4. 弟子としての道

- (1) 日本流に言うところ「弟子道」である。
- (2) 救いは、信仰により、恵みによって与えられる。これが基本の真理。
- (3) イエスの弟子になるためには犠牲が伴う。
 - ①自分を捨てる。自己中心的な生活をやめる。
 - ②十字架を負う。イエスの死と一体化する。
 - * この文脈では、ユダヤ人の指導者たちから拒否されること。
 - * 私たちも、この世から拒否されてもそれを甘受する。
- (4) いのちを救おうとする者はそれを失う。
- (5) イエスのためにいのちを失う者は、それを見いだす。
 - ①霊的な守り、安全が保証される。
 - ②霊的な豊かさが保証される。

(例話) 毎月贈呈している 140 冊の「クレイ」の中の 35 冊が K 刑務所用。

- * 現在 35 名が、「クレイ」を使ってデボーションをしている。
- * その内、5～6名が洗礼の学びをしている。
- * 昨年3名が洗礼を受け、合計6名がクリスチャン生活を送っている。
- * 昨年は6回のグループ教誨があったが、驚くような聖霊の祝福があった。
- * 書籍係りが、毎月の「クレイ」の差し入れを見て、自分もと申し出た。
- * 2月6日には、3名の洗礼式がある。
- * 来月号から5冊増やして 40 冊にして欲しい。

5. 将来の報酬

- (1) 受難のしもべは、栄光の王、審判者として再臨される。
- (2) その時、それぞれに報いが与えられる。それは、千年王国での地位に関係する。
- (3) 弟子たちの中には、その生存中に、神の国の栄光を見る人がいる(マタイ 17 章)。

結論

1. イエスはメシアである。これで、50 点。
2. イエスは受難のしもべである。これで、75 点。
3. イエスの弟子となる道は、私たちに2つのことを約束している。これで、100 点。
 - (1) 弟子たちには、地上生涯での霊的安全と豊かさが保証されている。
 - (2) やがて来るべき千年王国においては、重要な使命と地位とが用意されている。

「マタイ 17 章」

イントロ:

1. 文脈を確認する。
 - (1) イエスの公生涯の最後の年。
 - (2) きょうの箇所もまた、弟子訓練の頂上である。
 - (3) イエスは、使徒行伝の時代に備えて弟子たちを訓練している。
2. 「対比」がキーワード
 - (1) 地理的な対比
 - * 山頂での祝福(3人)
 - * 山麓での戦い(9人)
 - (2) 初臨と再臨の対比(旧約聖書のメシア預言の2つの流れ)
 - * 初臨の預言では、メシアの受難が語られる。
 - * 再臨の預言では、メシアの栄光とメシア的王国の確立が語られる。
3. 私たちへの訓練
 - (1) 現代の課題
 - * 地球温暖化の問題
 - * イスラム教の復興とテロリズム
 - * 核戦争の危機
 - * 経済格差の問題
 - * 老後の問題
 - * 食の安全の問題
 - (2) それぞれの問題解決のために、努力する必要がある。
 - (3) しかし、究極的解決法を知っておく必要がある。
 - (4) きょうも、立ち聞きをしながら、よりよい弟子とならせていただこう。

地理的な対比をすることによって、今を生きる力を受けることができる。

I. 山頂での祝福

イントロダクション

- (1) マタイ 16:28 の成就。
- (2) この山は、タボル山ではなく、ヘルモン山。
- (3) 山頂に登ったのは、ペテロとヤコブとヨハネ。

1. イエスの変貌

- (1) シャカイナグローリー
- (2) 出エジプト 32～34 章では、モーセがシャカイナグローリーを反映させている。
 - ①一時的で、やがて消えていく。
 - ②月が太陽の光を反射させているのと同じ。
- (3) イエスの場合は、内側から輝き出ている。
 - ①肉体という幕屋でさえぎられていたシャカイナグローリーが輝き出た。
- (4) イエスがメシア的王国(神の国)で持つ栄光。
 - ①Ⅱ ペテロ1:16～18

2. モーセとエリヤ

- (1) モーセは律法の代表、エリヤは預言者の代表。
- (2) 話している内容は、「ご最期」(ルカ9:31)。
 - ①出エジプトのこと。つまり、解放。
 - * イエス自身が、肉体の制約から解放される。
 - * 罪人が、罪から解放される。
 - ②イエスが、旧約聖書を成就するメシアであることを示している。
- (3) 死後のいのちの保証
 - ①モーセは、死から復活する聖徒の代表。
 - ②エリヤは、死なずして天に上げられる聖徒の代表(携挙)。

3. ペテロの提案

- (1) 3つの幕屋(小さな掘っ立て小屋)
- (2) 異邦人による解釈
 - ①気が動転して、何をいっているのか分からなかった。
 - ②モーセとエリヤをイエスのレベルに引き上げている。
 - ③イエスをモーセとエリヤのレベルに引き下げている。
- (3) ペテロの提案は彼の聖書理解に基づくもの。
 - ①ゼカリヤ 14:16～18 仮庵の祭りはメシア的王国を予表するもの。
 - ②ペテロは、メシア的王国がすでに到来したと思った。
- (4) ペテロが理解していなかったこと。
 - ①メシアの来臨には、2つのものがある。
 - ②仮庵の祭りの前に、過越の祭りが来なければならない。
 - ③モーセとエリヤは、まさに過越の祭りについて話し合っていた。

4. 天からの声

- (1) イエスの洗礼の時に続いて2度目。
- (2) バットコルは合計3度ある。

- (3) 「彼の言うことを聞け」
 - ①ヘブル1:1～2
 - ②この終わりの時代には、神は御子を通して語る。
- (4) 恐れる弟子たち
- (5) イエスは元の姿に戻っている。
 - ①受肉の時の謙遜。
 - ②変貌の後の謙遜。
 - ③イエスのへりくだりの度合いを示している。

II. 山麓での戦い

1. 山を降りる途中

- (1) イエスの方針。イエスがメシアであることを言い広めない。
- (2) 「人の子が死人の中からよみがえるとき」の意味が分からない。
- (3) エリヤに関する質問
- (4) イエスの答え
 - ①マラキ3:1 無名の先駆者 バプテスマのヨハネ
 - ②マラキ4:5～6 エリヤ
 - ③バプテスマのヨハネはエリヤの「型」として来た。
 - ④人々は先駆者を殺したので、メシアも殺される。
 - ⑤再臨の前にはエリヤが登場する。
- (5) ユダヤ人は今でもエリヤを待っている。
- (6) 私たちは、すでにメシアが到来したことと、再度来られることを知っている。

2. 山麓で待つ9人の弟子たち(マルコ9:14～29)

- (1) 悪霊の追い出しで苦闘する弟子たち
- (2) 律法学者たちは、イエスのメシア性を否定する材料にする。
- (3) 父親の叫び。これは凶暴な悪霊である。
- (4) イエスはその子から悪霊を追い出した。
- (5) 弟子たちの疑問とイエスの回答
 - ①信仰が薄い。
 - * 「山」とは「サタンの王国」
 - * 信仰によって悪霊に打ち勝つ。
 - ②この種のもの
 - * マルコ9:25 口のきけない悪霊
 - * メシア的奇蹟のひとつ
 - * 祈りと断食

3. 2度目の受難の予告

- (1) 1度目の予告。マタイ 16:21～28
- (2) 2度目の予告も、弟子たちには理解されない。
- (3) 弟子たちは、何を質問していいのか分からずに、悲しんだ。
- (4) 十字架の意味を本当に理解するのは、ペンテコステの日以降になる。

結論

- 1. 山頂での祝福と、山麓での戦い。
- 2. クリスマン生活の二面性を表している。
 - (1) 天上での祝福と、地上での戦い。
 - (2) 将来の祝福と、現在の戦い。
 - (3) 山頂の体験をすると同時に、山麓に下りて戦う必要がある。
- 3. 2度もシャカイナグローリーを隠して奉仕されたイエスの姿から学ぶ。

「マタイ 18章」

イントロ:

1. 文脈を確認する。
 - (1) イエスの公生涯 律法の時代
 - (2) イエスの十字架以降 恵みの時代
 - (3) 弟子たちは、天の御国がすぐに来ると思い込んでいる。
2. イエスの教え
 - (1) 恵みの時代、つまり教会時代を想定した教え。
 - (2) 3つのテーマ
 - ①プライドの問題
 - ②罪を犯した兄弟をどう扱うかという問題
 - ③赦しの問題
3. 信仰の成長
 - (1) 教理を学ぶこと。知識の量を増やす。
 - (2) 心の問題。
 - (3) 人間関係の問題。
4. きょうの箇所は、まさしく教会時代に生きている私たちへの教え。
 - (1) クリスマン生活の醍醐味を満喫するために必要。
 - (2) クリスマンとして成長していない人に助言するために必要。

教会時代に生きるクリスマンへの3つの教訓

I. プライドの問題

1. 宮の納入金(マタイ 17:24～27)
 - (1) 出エジプト 30:11～16 幕屋(神殿)の維持のため毎年半シケルを納入する。
 - (2) この規定は、口伝律法ではなく、モーセの律法である。これが大切。
 - (3) 納入は、過越の祭りの時に神殿で。あるいは、地方ではそのひと月前に納める。
 - (4) この時、イエスはおおよそ半年納入遅れになっていた。時期は、仮庵の祭りの頃。
 - (5) イエスの論理
 - ①イエスは神殿の主であるので、納める必要はない。
 - ②弟子たちは神の子どもなので、納める必要はない。
 - ③しかし、(モーセの律法に対する)つまずきを与えないために納める。
 - (6) ペテロが釣った魚から銀貨
 - ①スタテル一枚。1シケル。2人分の支払いが可能となる。
 - ②ペテロの心に、自分だけがという特権意識が生まれる。

2. 弟子たちの質問

(1) 「それでは、天の御国では、だれが一番偉いのでしょうか」

(2) この質問をした動機

①特権意識の芽生え

＊ 変貌山に登ったのは3人

＊ 宮の納付金に関する教えを受けたのはペテロだけ

②天の御国の到来が近い。

＊ 仮庵の祭りの預言的意味と天の御国の成就

＊ その前に、過越の祭りが来なければならない。

3. イエスの答え

(1) 子どもを使った視聴覚教育

①子どもは自分の弱さを知っていて、父親に全幅の信頼を置いている。

②父親に信頼を置いている家庭では、家族の間に比較や優越感はない。

③天の御国では、自分を低くする者が一番偉い。

④神の恵みを受け入れた人は、無価値な子どもを受け入れるようになる。

(2) イエスの警告

①子どもたちにつまずきを与えるのは、大きな罪である。

②そのような者は、大きな石臼を首にかけられ、湖で溺死するほうがましだ。

③この世の基準と、神の子たちに求められる基準とは異なる。

＊ 問題の根源に迫り、それを取り除くべきである。

＊ 未信者は、「永遠の火に投げ入れられる」。

＊ 信者は、地上生涯では矯正のために神の訓練を受ける。

＊ 矯正されない場合は、来るべき世で受けるはずの祝福を失う。

④子どもたちに対する神の愛

＊ 1匹の羊を探す羊飼ひ。

＊ 守護天使が付いている(ヘブル1:14 参照)。

II. 罪を犯した兄弟をどう扱うかという問題

1. 教会という言葉

(1) マタイ16章で初めて出てきた言葉

(2) マタイ16:18は普遍的教会、マタイ18:17は地域教会

①普遍的教会とは、使徒2章から携挙までにイエスを信じる人の総体。

②地域教会とは、時間的、地理的に制約がある。未信者も含んでいる。

2. 4つのステップ

- (1) 傷つけられた人が、罪を犯した人と対面する段階。
 - ①その前に他人に言う、イエスの教えに反している。
 - ②聞き入れられたなら、兄弟を得たことになる。
- (2) 2人か3人の証人を連れて行って悔い改めを迫る。
- (3) それでもだめなら、地域教会に事実を告げる。
- (4) それさえも拒否したなら、「異邦人か取税人のように扱う」
 - ①「ふれてはならない」
 - ②教会の交わりから追放する。

3. イエスによる承認

- (1) マタイ18:18は、よく誤解される。
 - ①「つなぐ」と「解く」は、ラビ用語
 - * つなぐとは、禁止する、有罪を宣言するという意味。
 - * 解くとは、許可する、無罪を宣言するという意味。
 - ②これは使徒たちだけに与えられた権威。
- (2) マタイ18:19～20も、よく誤解される。
 - ①19節の「ふたり」とは、証人のこと。
 - * 複数の祈りは力があるが、ここではそれが強調点ではない。
 - ②20節の「ふたりでも三人でも」もまた証人のこと。
 - * 教会の定義ではない。教会は権威という秩序のある組織。
 - * 4つのステップをイエスが承認しているということ。
- (3) 以上のことを、愛を込めて行う。
 - ①イエスがその中におられる。

Ⅲ. 赦しの問題

1. ペテロの質問

- (1) 7度までというのは寛大な数字。
- (2) パリサイ人の教えでは、3度まで。

2. イエスの答え

- (1) 7の70倍:無限に赦せ。
 - ①完全数
 - ②数えられない。
- (2) 赦しとは、内面に起こること。

3. イエスのたとえ話

- (1) 1万タラントの借金が免除された人
 - ①1タラントは6千デナリ。
 - ②1万タラントは、16 万年分の収入。
- (2) 100 デナリの借金を赦せない。
- (3) 対比は、60 万対1である。
- (4) 多額と小額が対比されている。

4. たとえ話の教訓

- (1) 神から多く赦された者は、赦しの心を示すべきである。
- (2) 天の父は憐れみ深いいだから、私たちはその姿を真似るべきである。
- (3) 兄弟たちを赦さないなら、神からの赦しを受けることができない。
 - ①永遠のいのちに関わる赦しではない。
 - ②父なる神との断絶のこと。
 - ③クリスチャン生活に障害が生じる。

結論

- 1. プライドの問題を処理する。
 - (1) 山から下ったイエス
 - (2) 宮の納入金を納めたイエス
 - (3) 十字架に向かって進むイエス
- 2. 罪を犯した兄弟への対応を確立する。
 - (1) 4つのステップ
 - (2) 最初のステップが最難関
 - (3) 愛を込めて行う。
- 3. 赦しの心を養う。
 - (1) イエスを信じた人は、救われている。
 - (2) しかし、クリスチャン生活に障害が生じている。
 - (3) 自分がどれほど赦されているかを考える。

「マタイ 19 章」

イントロ:

1. 文脈を確認する。
 - (1) イエスの公生涯で最後の年に入っている。
 - (2) イエスは弟子訓練に焦点を合わせている。
 - (3) ヨルダンの向こうにあるユダヤ地方:ペレヤ
2. 人との出会いを通したイエスの教え:教室の教えではない。
 - (1) 離婚についての教え
 - ①パリサイ人たちとの出会い
 - (2) 永遠のいのちについての教え
 - ①子どもたちとの出会い
 - ②金持ちの青年との出会い
 - ③ペテロの質問との出会い
3. 基本的に重要なことが認識されていないことがある。
 - (1) 水:日本人は、水の重要性をようやく認識し始めた。
 - (2) 永遠のいのち:年を取ると「死後のいのち」について考え始める。
(例話)『イスラエル・トゥデイ』誌3月号の記事「放蕩息子の帰郷」
 - ①苦難は、人を神探求の旅に駆り立てる。
 - ②世俗的イスラエル人は、宗教ではなく、魂の満たしを求めている。
 - ③この傾向が自然発生的に起こっている。
4. きょうの箇所は、極めて現代的な内容を扱っている。
 - (1) 離婚について簡単に扱う。
 - (2) 永遠のいのちについて詳細に論じる。

現代人が知るべき基本的に重要な情報について

I. 離婚についての教え

1. 場所:ペレヤ
 - (1) ヘロデ・アンティパスの領地
 - (2) 彼は、兄弟ピリポの妻ヘロデヤと結婚した。
 - (3) それを糾弾したバプテスマのヨハネの首をはねた。
 - (4) 妻ヘロデヤがこれを要求した。

2. パリサイ人たちの質問

- (1) 「何か理由があれば、妻を離別することは律法にかなっているでしょうか」
- (2) この質問をした動機
 - ①ヘロデヤを怒らせて、イエスを殺させるため
 - ②イエスに言いがかりをつけるため
- (3) 質問の背景:申命記 24:1 「何か恥ずべき事」とは何か。
 - ①ヒレル派は、それを広義に解釈していた。料理下手も離婚原因となる。
 - ②シャマイ派は、それを狭義に解釈していた。不貞のみが離婚原因となる。

3. イエスの答え

- (1) 神は本来、創造の秩序の中で離婚というものを想定していなかった。
- (2) モーセが離婚状を渡せと命じたのは、命令ではなく許可。
- (3) 離婚理由として認められるのは「不貞(姦淫)」しかない(シャマイ派と同じ)。
- (4) 妻の姦淫だけを問題にするのではなく、夫の姦淫の罪も問題にすべきである。
 - ①ユダヤの律法では、夫だけが妻を離別することができた。その逆はない。
 - ②今でもイスラエルでは、女性から離婚を申し出ることは許されていない。
- (5) 理想は、赦しと和解によって結婚を継続すること。

4. 弟子たちの反応

- (1) そんなことなら結婚しないほうがましだ。

5. イエスの答え

- (1) 独身でいられるのは、生まれつき性的能力を欠いている者か、
- (2) 人為的に去勢された者か、
- (3) 独身の賜物が与えられた者だけ。
- (4) 独身でいることも結婚することも、ともに神からの召しである。

II. 永遠のいのちについての教え

イントロダクション:ヨハネ3:16

- (1) 永遠のいのちの二面性
 - ①時間的要素と、質的要素がある。
 - ②すでに成就したいのちであると同時に、やがて完成するいのち。

1. 子どもたちとの出会い

- (1) イエスに近づく子どもたち
- (2) 彼らを叱る弟子たち
- (3) イエスの教え
 - ①マタイ 18:1～5 天の御国で評価される資質とは何か。
 - ②天の御国に入る条件は、子どものような信頼である。
- (4) 子どものような信頼を持っていない人の例として、次の話が出てくる。

2. 金持ちの青年との出会い

(1) 富に関するパリサイ派の理解

- ①裕福であることは、神の祝福を受けていることのしるし。
- ②裕福な人は、天の御国に最も近い。
- ③この青年(恐らく会堂管理者)は、裕福であるが永遠のいのちの確信がない。

(2) 青年の質問

- ①「尊い先生」(ルカ 18:18)
- ②「永遠のいのちを得るためには、どのような良いことをしたらよいのでしょうか」

(3) イエスの答え

- ①「尊い(良い)」というギリシア語
 - * アガソス(内面の尊さ)
 - * カロス(外面の美)
 - * この青年は、アガソスを用いている。
- ②ユダヤ教の習慣では、アガソスを人間に用いることはない。
- ③「良い方は、ひとりだけ」:神だけ。

(4) 良くある誤解を正す必要がある。

(例話)キリスト教史における悲劇は、聖書に対する無知と誤解から生じた。

- * 十字軍の蛮行。
- * 誤解の原因は、キリスト教からユダヤ的要素を抜き去ったこと。
- ①イエスは、ご自身の神性を否定したのではない。
- ②「あなたこそメシアであり、神です」と告白すれば、永遠のいのちを得たはず。
- ③しかし彼は、沈黙していた。
- ④そこでイエスは、モーセの律法に話題を振った。
- ⑤青年は、どの戒めですかと問う。

(5) イエスの回答

- ①最初は、モーセの十戒の後半部を引用。
- ②隣人愛の教えは、十戒には含まれていない。
- ③イエスは意図的に、人間関係に関する律法だけを示した。

(6) 青年は、それらの命令は守っていると答える。

(7) イエスの招き

- ①持ち物を売る:神への信頼の実践
- ②貧しい人に与える:隣人愛の実践
- ③わたしについて来なさい:イエスコそメシアであることを受け入れること。

- (8) 青年は悲しみながら去っていった。
 - ①祝福のしるしである富が、彼を神から遠ざける障害となっていた。
 - ②この事例は、業による救いを教えているのではない。
 - ③救いは、信仰により、恵みによる。

3. 弟子たちの質問との出会い

- (1) 金持ちが救われるのは、非常に難しい。
 - ①金が悪いのではない。
 - ②神よりも金を信頼する人の心が悪い。
- (2) 「らくだが針の穴を通る」
 - ①当時の格言
 - ②実際にそのような門があったわけではない。
 - ③裁縫に使う針。ルカでは手術用の針。
- (3) 驚く弟子たち
 - ①パリサイ派の富についての神学が、広範囲に影響を与えている。
 - ②金持ちでも救われるのが難しいとしたら、誰が救われるのか。
- (4) 神に不可能はない。
- (5) ペテロの質問
 - ①献身の報酬はどれほどかと問うている。
 - ②動機が必ずしも正しいとは言えない。
- (6) イエスが語った3つの祝福の約束
 - ①メシア的王国で12使徒は、イエスとともにイスラエル12部族を統治する。
 - * 異邦人諸国を統治するのは、教会時代の聖徒と患難時代の聖徒
 - ②イエスのために犠牲を払った者には祝福が約束されている。
 - * すべての信者に約束されている。
 - * 地上生涯において実現する。
 - * 物質的なものも含まれるが、強調点は霊的な祝福。
 - ③永遠のいのちが約束されている。
 - * すでに実現しているが、その成就是未来のこと。
- (7) 天の御国の原則:先のものがあとに…
 - ①20 章のたとえ話で、説明される。

結論

1. ヨハネ3:16

- (1) 神はご自身の責任を果たしている。
- (2) 私たちには、信じるという責任がある。

「マタイ 20 章」

イントロ:

1. 文脈を確認する。
 - (1) 21 章以降、エルサレムでの最後の1週間に入る。
 - (2) 20 章では、イエスはヨルダンの東のペレヤからヨルダン川を越えてユダヤへ。
 - (3) 最終目的地はエルサレム。
 - (4) エルサレムに上る途上での弟子訓練。
2. 弟子訓練の最終段階
 - (1) 天の御国の労務者の心構え
 - ①このたとえ話は、19 章の延長線上にある。
 - (2) 天の御国のプログラム
 - ①十字架と復活
 - (3) 天の御国での地位
 - (4) エリコの町の盲人の癒し
 - ①20 章のエピローグであり、21 章のプロローグである。
3. マタイ 20 章は、現代人には受け入れ難い内容である。
 - (1) 私たちは大いなる誤解の中で生きていると思わざるを得ない。

(例話) 1月中旬に沖縄で、くちばしに釣り糸が絡まり保護されたクロツラヘラサギ。
2月 20 日、リハビリをしていた沖縄市の動物園を飛び立った。
約 800 グラムまで落ち込んでいた体重は、1.4 キロまで回復した。
 - (2) きょうのメッセージのゴールは、人生の誤解を解くこと。

弟子訓練の最終段階

I. 天の御国の労働者の心構え

1. ペテロの「ハイリスク・ハイリターン」を求める質問への答え。
 - (1) マタイ 19:30
 - (2) マタイ 20:16
2. たとえ話の内容
 - (1) 朝早くに1デナリの約束で雇われた労務者。
 - (2) 9時、12 時、午後3時、午後5時に雇われた労務者。
 - (3) 夕方の支払いは、後の者から支払われ、同じ1デナリ。
 - (4) 朝早くから働いていた労務者が文句を言う。

3. たとえ話の教訓

- (1) 天の御国の報酬は、年功序列によって決まるのではない。
- (2) キリストのしもべは、全力を尽くして働き、報酬は神に委ねるべき。
- (3) 神は常に正しく、恵みに溢れたお方である。
- (4) 神は、誰にどれだけの恵みを与えるかについて、完全に決定権を持っておられる。

4. 異邦人クリスチャンへの教訓

- (1) 早朝の労務者がアブラハムであるなら、12使徒は午後3時の労務者であろう。
- (2) 異邦人クリスチャンは、午後5時の労務者であろう。
- (3) そして私たちは、午後5時 59 分の労務者である。

II. 天の御国のプログラム

1. 旧約聖書が預言していたメシア的王国(千年王国)に関するプログラム

- (1) バプテスマのヨハネが宣べ伝えた王国
- (2) イエスが宣べ伝えた王国

2. マタイ 20:17 とマルコ 10:32 の比較

- (1) 弟子たちは驚き、後に付いて行く者たちは恐れを覚えた。
- (2) ペレヤを去り、ヨルダン川を渡り、ユダヤ、そしてエルサレムへ向かう。
 - ①イエスは先頭を歩いている。
 - ②ペレヤにはサンヘドリンの支配が及ばない。
 - ③ユダヤに入れば、逮捕される可能性が大である。
- (3) イエスは3度目の受難の予告をした。
 - ①過越の祭りが近い。自らを過越の小羊として見ている。
 - ②予告の内容
 - * エルサレムで苦しみを受ける。
 - * 祭司長、律法学者たちに引き渡される。
 - * 彼らによって死刑の宣告を受ける。
 - * あざけりやむち打ちを受け、異邦人によって十字架に付けられる。
 - * 3日目に甦る。
 - ③以上のことは、すべて聖書の預言通り。
- (4) 弟子たちの目は閉ざされたまま。

3. 私たちへの教訓

- (1) メシアの受難、福音の全世界への伝播、メシアの再臨、天の御国の出現。
- (2) メシアに起こったことは、私たちにも起こる。
 - ①永遠に価値あるものは、苦しみの中から生まれる。
 - ②神は人を用いる前に、まずその人を試練に合わせ、訓練する。
 - ③これは、人生における苦難についての理解を深める。
 - ④苦難に会う時、その人は神に用いられる器としての訓練を受けている。

Ⅲ. 天の御国での地位

1. ゼベダイの子たちの母

- (1) ゼベダイの子たちとは、ヤコブとヨハネ
- (2) その母とは、サロメ
- (3) サロメとイエスの母マリヤは姉妹同士。イエスは、ヤコブとヨハネの従兄弟。
- (4) 血縁関係によって、願い事を聞いてもらおうとした(コネによる天上市り)。

2. 願いの内容

- (1) 天の御国が極めて近いという認識。
(例話) Y2K 問題 コンピュータ西暦 2000 年問題
停電、断水、医療関連機器の機能停止、交通機能の停止、ミサイルの誤発射、
金融関連の機能停止、通信機能の停止
- (2) 天の御国で右大臣、左大臣の地位を息子たちに与えて欲しい。

3. イエスの答え

- (1) あなたがたは自分が何を求めているか分かっていない。
- (2) イエスは「怒りの杯」を飲もうとしている。
- (3) 彼らもまた、同じ杯を飲むようになる。
 - ①ヤコブは12使徒の中の最初の殉教者となった。
 - ②ヨハネは老年まで生きたが、パトモス島に流刑となった。
- (4) 天の御国の地位は、父なる神がお決めになる。

4. 他の使徒たちの反応

- (1) このふたりの兄弟のことで、腹を立てた。
- (2) 日没前に、他の労務者を出し抜いて数倍の賃金を願うようなもの。
- (3) 腹を立てた彼らもまた、あのたとえ話を理解していなかった。

5. イエスの教え

- (1) 天の御国の地位は、野心や願いによって獲得するものではない。
- (2) それは、父なる神が忠実なしもべに与える報酬であり、榮譽である。
 - ①神に仕える者にとっては、今が楽しい。過程を楽しむ。
 - ②神のぶどう園で働くことのできる特権。
 - ③報酬は、それを忘れて仕えている者に多く与えられる。
- (3) イエスこそ私たちの手本である。

IV. エリコの町の盲人の癒し

1. ふたりの盲人が大声で叫んだ。
 - (1) ダビデの子よ。イザヤ 35:5の預言。盲人の癒し。
 - (2) イエスは沈黙している。
 - ①ユダヤ人がイエスのメシア性を拒否して以降方針が変わる。
 - ②メシア性に基づく癒しは行わない。
2. 癒しのプロセス
 - (1) 群衆の中から彼らを呼び出す。
 - (2) 個人的な必要を告白させる。
 - (3) 信仰があることを確認する。
 - ①彼らは、マルコ 10:50 で、上着を脱ぎ捨てている。
 - ②彼らの信仰告白。すぐに目が開かれると信じたからこれを行った。
 - (4) その信仰に基づいて癒しを行う。
 - ①イエスの憐れみが、癒しの動機。
3. 私たちへの教訓
 - (1) 十字架という目的に向かって一直線に進むイエス。
 - (2) しかし、エリコの町で、盲人を無視せずに癒しを行ったイエス。
 - (3) 今も、道端にいる者たちに憐れみを注がれるイエス。
(例話)マタイ2章のメッセージを聞いた後、天に召された N 姉

結論 人生の誤解を解く

1. 天の御国には年功序列はない。すべて神の恵みによる。
2. 本物は苦しみを経て生まれる。
3. 仕える者こそ最高の報酬を受ける。
4. 道端にいる者にも神の恵みは注がれる。

「マタイ21章」

イントロ:

1. 文脈を確認する。
 - (1) 21章以降、エルサレムでの最後の1週間に入る。
 - (2) イエスの公生涯は3年半と計算する。
 - (3) 4回の過越の祭りが巡ってくるから。きょうの箇所は、その最後の過越の祭り。
2. きょうの箇所を理解するための予備知識
 - (1) 過越の祭りは出エジプトを記念する祭り。
 - (2) 変貌山の箇所(17章)で、イエスはモーセとエリヤを相手に話していた。
 - (3) イエスは、神の小羊としてエルサレムに入城された(ヨハネ1:29)。
 - (4) 出エジプト12:3～7
 - ①ニサンの月の10日に羊1頭を選び分ける。
 - ②ニサンの月の14日までそれをよく見守る。
 - ③その日の夕暮れ(午後3時)にほふって、その血を門柱と鴨居につける。
 - ④その夜、その肉を食べる。
 - (5) イエスは神の小羊としてエルサレムに入城し、5日間吟味され、ほふられる。
3. きょうの箇所は、私たちにとってどういう意味があるのか。
 - (1) きょうの箇所に書かれたことは、そのまま現代のイスラエルと関係がある。
 - (2) ユダヤ人たちはメシアを拒否したために、厳しい裁きに会った。
 - ①ユダヤ人たちは1900年にわたって離散の民として生活した。
 - ②1948年に建国したが、60年経った今も平和は来っていない。(例話)第43回聖地旅行から帰ってきたばかり。

3月3日(月)にオリーブ山で騒動があり、そこに行けなかった。

イスラエル軍のガザ地区攻撃に対するパレスチナ人の報復。

世俗的なイスラエル人は、霊的な葛藤を覚えて神を求め始めている。
 - (3) イエスの預言の通りにユダヤ人の歴史は展開してきた。
 - (4) これからも、イエスの預言通りにユダヤ人の歴史は動いていく。
 - (5) きょうのゴールは、ユダヤ人の歴史を学び、いかに生きるべきかを考えること。

神の小羊であるイエスのエルサレム入城

I. 神の小羊の登場

1. ロバ
 - (1) イエスは、ベタニヤ、ベテパゲ、オリーブ山、エルサレムと移動された。
 - (2) イエスは紀元30年、ニサンの月の10日(日)にエルサレムに入城された。

- (3) この瞬間に、神の小羊が選り分けられた。
- (4) イエスがロバの子に乗るのは、ご自身をメシアとして提示するため。
 - ①ロバは平和の人、商人、祭司などのための乗り物。
 - ②イエスは平和の君として来られた(ゼカリヤ9:9)。
 - ③「主がお入用」とは、ゼカリヤ9:9の成就のために必要という意味。
- (5) 今もイエスは、私たちを必要としておられる。

2. 木の枝(棕櫚の葉)

- (1) 群衆はロバの子に乗るイエスを見て、イエスをメシアとして歓迎した。
 - ①小規模な奇蹟が起こっている(ロバの子が暴れていない)。
 - ②上着と棕櫚の葉
 - ③詩篇 118:25～26 を唱える人たち(詩篇 113～118 篇は「ハレルヤ詩篇」)
- (2) ユダヤ人の指導者たちがイエスを拒否したので、王国の確立は将来に延期された。
- (3) 群衆の期待とイエスの思いには、大きな隔たりがあった。
 - ①棕櫚の葉を振るのは、仮庵の祭りの習慣。
 - ②「ホサナ」(今私たちを救ってください)というのは、仮庵の祭りの祈り。
 - ③ゼカリヤ 14:16～21 には、メシア的王国の預言がある。
 - ④そこでは、仮庵の祭りが祝われる。
 - ⑤群衆は、メシア的王国が今にも確立されるという思いでイエスを迎えた。
- (4) イエスは仮庵の祭りの前に、過越の祭りが来なければならないことを知っていた。
 - ①弟子たちも、神の国のプログラムは理解していなかった。
 - ②孤独な道を歩むイエスの姿が見えてくる。
- (5) 私たちも、誤った熱心さではなく、聖書の知識に基づく熱心さを追求しよう。

3. 宮(神殿)

- (1) 最初の宮清めは、公生涯の初めに行われた(ヨハネ2章)。
- (2) この箇所にあるのは、2度目の宮清め。
- (3) なぜ宮清めが必要だったのか。
 - ①半シケルの神殿税は、ツロ貨(銀貨)でなければならなかった。
 - ②いけにえの動物は、神殿域で売られていた。
 - ③これらの商売は、大祭司の一家が管理している。
- (4) イエスは宮に対する所有権を主張された。これはイエスのメシア宣言である。
- (5) 子どもたちが「ダビデの子にホサナ」と叫んでいた。
 - ①祭司长、律法学者は、不平を述べた。
 - ②しかし、幼子による信仰告白が詩篇8:2に預言されている。
- (6) 民族的には裁きは避けられないが、個人的には信仰によって救われる人も出る。

4. いちじく

- (1) 空腹を覚えた。イエスの人間性を示す。
 - ①空腹感。
 - ②イエスは、初なりを期待されたが、何もなかった。
- (2) イエスはその木を呪うと、いちじくの木が枯れた。イエスの神性を示す。
 - ①いちじくの木は、イスラエルの民、特にパリサイ主義の信仰を指す。
 - ②見かけは敬虔そうであるが、霊的実質が伴っていない。
 - ③イエスはパリサイ的な信仰を否定された。
- (3) 弟子たちへの教訓
 - ①枯れたいちじくの木は、イスラエルの民の運命を象徴している。
 - * 紀元 70 年にエルサレムが滅びた原因は、不信仰にある。
 - * 後世のラビたちは、エルサレム滅亡の原因をさまざまに論じた。
 - ・ 安息日を大切にできなかったから。
 - ・ 経札を付けなかったから。
 - * 真の原因は、イエスのメシア性を否定したことにある。
 - ②知恵があれば、信仰の難問も解くことができる。
 - * 「この山」とは、難問のこと。
 - * 「山が動いて海に入る」とは、難問が解決されること。
 - * 弟子たちが、イエスの十字架の意味を理解するのは復活以降。

II. 神の小羊の吟味

1. ニサンの月の 10 日に小羊を選び分け、14 日までそれを吟味する。
 - (1) 紀元 30 年のニサンの月の 10 日は、日曜日。
 - (2) 14 日は、木曜日。
 - (3) イエスは 10 日から 14 日まで吟味され、15 日(金)に十字架に付けられた。
2. イエスは4回にわたって様々なグループの指導者たちから挑戦を受け、吟味された。
 - (1) 公にイエスを辱め、民衆の支持を失わせるため。
 - (2) ローマ法に違反している証拠を見つけるため。死刑にすることができる。
3. 最初の挑戦は、祭司長、民の長老たちからのもの(サンヘドリンの代表)。
 - (1) イエスの権威を問う。
 - ①何の権威によって、神殿から商売人を追い出したのか。
 - ②何の権威によって、ラビとして活動しているのか。
 - ③当時は、高名なラビの認定がなければラビにはなれなかった。

(2) ラビ的教授法を用いて答える。問いに対して、問いをもって答える。

① バプテスマのヨハネの權威は、どこから来たのか。

② 彼らはジレンマに陥る。

＊ 天からと答えれば、ヨハネが示したメシアを信じないのは矛盾。

＊ ヨハネを否定すれば、民衆の怒りを買う。

③ 彼らは「分からない」と答える。

④ イエスもまた、答えることを拒否する。

4. イエスは3つのたとえ話を用いて、間接的に彼らに答える。これもラビ的教授法。

(1) ふたりの息子のたとえ

① 兄はぶどう園に行くと言い、弟は行かないと言う。

② しかし、兄は行かないで、弟が行くようになる。

③ 真の親子関係は、言葉ではなく、行為によって証明される。

④ 兄とは、祭司長や民の長老たちのこと。

＊ 彼らは、神が遣わす預言者を信じると告白していた。

＊ しかし、バプテスマのヨハネも、イエスも信じなかった。

⑤ 弟とは、取税人や遊女たちのこと。

＊ 彼らは信仰告白をしていなかった。

＊ しかし、バプテスマのヨハネが説く「義の道」を受け入れた。

＊ 彼らこそ、信仰によって神の国に入った人々である。

(2) 悪い農夫のたとえ

① ぶどう園をイスラエルの民にたとえるのは、旧約聖書の伝統。

＊ イザヤ5:1～7

＊ 詩篇 80:6～16

② 家の主人とは、父なる神のこと。

＊ 主人は、手をかけたぶどう園を農夫たちに貸す。

＊ それから、旅に出る。

＊ 主人は、多くの収穫を期待している。

＊ 父なる神も、イスラエルの民から霊的な収穫を期待している。

③ 農夫たちとは、民の指導者たちのこと。

＊ 彼らは、主人が遣わしたしもべたちを苦しめ、殺す。

＊ 神は、3度にわたってしもべたちを遣わされた。

・ 捕囚期前、捕囚期後、バプテスマのヨハネ

④ 主人は、最後に自分の息子を遣わすが、農夫たちはその息子を殺す。

＊ 息子とは、イエスのこと。

⑤ 「ぶどう園の主人が帰ってきたら、その農夫たちをどうするでしょうか」

⑥ 「…情け容赦なく殺して、…別の農夫たちに貸すに違いありません」

⑦イエスの預言

- * 詩篇 118:22 の預言の成就(指導者が見捨てた石が礎の石となる)
- * 神の国は、その時代のユダヤ人たちから取り去られる。
- * 神の国の実を結ぶ国民に与えられる。
 - ・ これは、教会のことではない(置換神学の立場を否定)
 - ・ 患難時代を生き延びるユダヤ人のこと。
- * イエスに敵対する者は滅びる。紀元 70 年に成就した。
- * 今もイスラエルは、その影響を受けている。

⑧ユダヤ人も異邦人も、イエスを信じないなら同じ運命が待っている。

(3) 結婚の披露宴のたとえ(22 章に入ってから扱う)

結論 ユダヤ人の歴史を学び、いかに生きるべきかを学ぶ。

1. ユダヤ人の歴史

- (1) イエスを拒否した結果、神の国は取り去られた。
- (2) 紀元 70 年にエルサレムが滅びた。
- (3) やがて彼らは患難時代を通過することになるが、最後にイエスを受け入れる。
- (4) その時、イエスの地上再臨が実現し、メシア的王国が地上に成就する。

2. いかに生きるべきか。

- (1) ユダヤ人に起こったことは、私たちの上にも起こる。
- (2) イエスこそ、ユダヤ人を二分し、全人類を二分する分水嶺である。
- (3) それゆえ、聞く耳のある者よ、今こそイエスに信頼して生きよ。

「マタイ 22 章」

イントロ:

1. 文脈を確認する。
 - (1) 21 章以降、エルサレムでの最後の1週間に入る。
 - (2) 過越の祭りは出エジプトを記念する祭り。
 - (3) イエスは、神の小羊としてエルサレムに入城された(ヨハネ1:29)。
 - (4) 出エジプト 12:3~7
 - ①イエスはニサンの月の 10 日に選り分けられた。
 - ②ニサンの月の 14 日まで吟味された。
 - ③ニサンの月の 15 日に十字架に付けられた。
2. 4つのグループがイエスに挑戦する。
 - (1) 祭司長と民の長老たち(サンヘドリン)(21 章で取り上げた)
 - (2) パリサイ人の弟子とヘロデ党の者たち
 - (3) サドカイ人たち
 - (4) パリサイ人たち
3. きょうの箇所は、私たちにとってどういう意味があるのか。
 - (1) ユダヤ的視点で聖書を読むことの重要性を教えらる。
 - (2) イエスが本物のメシアであるかどうか確認できる。
 - (3) 神学的理解が深められる。

4種類のグループによって吟味される神の小羊

I. 祭司長と民の長老たち(サンヘドリン)

1. 彼らは、イエスの権威を問うた。
2. イエスは3つのたとえ話を用いて、間接的に彼らに答えた。
 - (1) ふたりの息子のたとえ
 - (2) 悪い農夫のたとえ
3. 結婚の披露宴のたとえ
 - (1) 「結婚の披露宴」は、メシア的王国(天の御国)を表している。
 - (2) 招待しておいた客を呼ぶ「王」は、父なる神。
 - (3) 遣わされた「しもべたち」は、バプテスマのヨハネとその弟子たち。
 - (4) 次に遣わされた「別のしもべたち」は、12弟子。
 - (5) 彼らは、宴会の準備がすべて整ったからお出かけくださいと誘う。

- (6) 招かれた者たちはその招きを無視。さらに、王のしもべたちを殺す。
 - ①バプテスマのヨハネとイエスの殺害
- (7) 怒った王は、兵隊を出して彼らを滅ぼし、その町を焼き払う。
 - ①紀元 70 年にエルサレムは崩壊し、ユダヤ人たちは世界中に離散した。
- (8) 結末
 - ①通りで出会った者をみな集める。第一義的には患難時代のユダヤ人たち。
 - ②適応において、異邦人である私たちもまたここに含まれる。
 - ③婚礼の礼服を着ていない者がひとりいた。
 - ④王は怒って、その者を「外の暗やみ」(地獄のこと)に放り出せと命じる。
 - ⑤当時は、主人が入り口に礼服を用意した。礼服は「義の衣」を象徴。
(例話)ある人の疑問:イエスを信じない人は地獄に行くというのは承服できない。
イエスは本当に地獄の存在を教えたのか。
 - ⑥パリサイ的ユダヤ教では、神の国に入れない。義の衣(礼服)が大切。

Ⅱ. パリサイ人の弟子とヘロデ党の者たち

1. 奇妙な組み合わせ

- (1) パリサイ人たちは政治的には反ローマ。
- (2) ヘロデ党の者たちは親ローマの立場。
- (3) 両者は、イエスを共通の敵としていっしょに行動している。

2. 政治的テーマを使ってイエスを有罪に追い込もうとした。

- (1) 「カイザルに税金を納めることは、律法にかなっているかどうか」
- (2) どちらに答えても問題が起こる。
- (3) イエスと答えると、民衆は怒る。
 - ①カイザルを王と認めることは、イスラエルの神を退けたことになる。
 - ②ユダヤ人は間接的にはローマに税を納めていた。
 - ③ここでは、直接的かつ積極的に税を納めるべきかが論じられている。
- (4) ノーと答えると、反逆罪のためにローマの官憲によって逮捕される。
 - ①イエスが死刑に処せられることを、敵対する者たちは望んでいる。

3. イエスの知恵

- (1) ローマに納税するデナリ貨には、「カイザル」の肖像が刻まれていた。
- (2) この貨幣を持つことは偶像礼拝に当たると考えられていた。
- (3) ユダヤ人たちがこれを神殿税のために用いることはなかった。
- (4) イエスは「カイザルのものはカイザルに、神のものは神に」と宣言。

(5) これによって確立された原則

- ①権威には、神の権威とこの世の権威(政府)の2種類がある。
- ②創世記9章以降、どの時代でも地上にはこの世の権威(政府)が存在した。
- ③問題は、どちらに従うかではなく、両方に従うということ。
- ④この世の権威は一時的なもの。
- ⑤やがて恒久的な権威が確立される。ダビデの子が統治するメシア的王国。

Ⅲ. サドカイ人たち

1. サドカイ人とは

- (1) 貴族階級、祭司階級からなる体制派のグループ。
- (2) 神学的には死者の復活を否定。これがパリサイ人との大きな違い。
- (3) 彼らの質問は、神学的なもの。公の場でイエスを辱めるため。
「7 人の兄弟が子を残さずに次々と死んだ場合、彼らの妻となったひとりの女は、復活の世ではだれの妻になるか」(申命記 25:5 参照)。

2. イエスの答え

- (1) イエスは彼らの誤解を指摘する。
 - ①そういう質問をする理由は、聖書も神の力も知らないから。
 - ②次の世では結婚関係はない。結婚して子孫を残す必要がなくなるから。
 - ③それはちょうど、「天の御使い」が結婚しないのと同じ。
 - ④創6章では、堕天使たちが人の女たちと結婚している。良い天使と区別する。
- (2) 復活の真理が聖書にあることを証明する。
 - ①聖書とは、今で言う旧約聖書。
 - ②旧約聖書の中で復活を明確に預言している箇所がいくつかある。
 - * ダニエル書 12:2
 - * イザヤ書 26:19
 - * ヨブ記 19:25～26
 - ③イエスは、これらの箇所ではなく、出エジプト記 3:6 を引用。
 - ④サドカイ人は、教理に関してはモーセの五書(トーラ)だけに権威を認める。
 - ⑤「わたしは、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」
 - ⑥神はアブラハム契約を結んだ神である。厳粛な神の御名。
 - ⑦アブラハムも、イサクも、ヤコブも、約束が成就する前に死んだ。
 - ⑧神には約束を実行する責務がある。約束の受け取り手が復活する必要がある。
(例話)アブラハムがイサクを捧げた理由。
 - ⑨イエスは、アブラハム契約そのものが復活を保証していると解説した。

3. 聴衆の反応

- (1) 新しいみことばの解説に、群衆は驚いた。
- (2) パリサイ人たちはイエスの知恵に驚いた(ルカ 20:39～40)。
- (3) サドカイ人たちは沈黙した。

IV. パリサイ人たち

1. パリサイ人の中の律法の専門家が挑戦。

- (1) イエスを試そうとして神学的な質問を投げかけた。
「先生。律法の中で、たいせつな戒めはどれですか」
- (2) パリサイ人たちは聖書には 613 の戒めがあると教えていた。
- (3) この質問にどう答えるかによって、イエスの律法理解の程度が分かる。

2. イエスの答え

- (1) イエスは旧約聖書の教えを2つの戒めに要約した。
- (2) 「律法全体と預言者」とは、旧約聖書のこと。
- (3) 第1の戒め
「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ」
①「シエマ(聞け)」と呼んで、日々朗詠する有名な箇所(申命記 6:5)。
②神との関係は、この戒めを守ることによって正しく保たれる。
- (4) 第2の戒め
「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」
①隣人との関係は、この戒めを守ることによって保たれる。
- (5) 「神への愛」と「隣人への愛」を実践するなら、戒めがすべて守られたことになる。
①アダムが罪を犯したのは神への愛がなかったから。
②私たちが他人を傷つけるのは隣人への愛がないから。

結論

1. ユダヤ的視点で聖書を読むことの重要性
2. イエスは本物のメシアである。
3. 神学的理解が深められた。
 - (1) イエスの権威:義の衣をまとうていなければ神の国に入れない。
 - (2) 神の権威と地上の権威の関係
 - (3) 復活は真実である。
 - (4) 愛こそ律法のゴールである。

「マタイ 23 章」

イントロ:

1. 文脈を確認する。
 - (1) 21 章以降、エルサレムでの最後の1週間に入る。
 - (2) 21 章、22 章で、イエスは4つのグループの挑戦を受けた。
 - (3) 神の小羊イエスは、傷もしみもないことが証明された。
2. イエスからの反撃(小羊の逆襲)
 - (1) パリサイ人たちへの質問(22:41～46)
 - (2) 群衆と弟子たちへの教え(23:1～12)
 - (3) パリサイ人たちへの教え(23:13～36)
 - (4) イエスの嘆き
3. マタイ 23 章で、イエスの公生涯の教えは終わる。
4. きょうの箇所は、私たちにとってどういう意味があるのか。
 - (1) ユダヤ教の本質を理解する。
 - (2) 律法主義と本物の信仰の違いを理解する。
 - (3) メシア再臨の条件を理解する。

イエスからの反撃を通して、3つの重要なテーマを理解する。

I. パリサイ人たちへの質問(22:41～46)

1. メシアであるイエスがパリサイ人たちに質問。
 - (1) 「キリスト(メシア)は、だれの子ですか」
 - (2) 「ダビデの子です」
 - ①旧約聖書の預言では、メシアはダビデの子孫として生まれるとなっている。
 - ②メシアの称号として「ダビデの子」が用いられるようになっていた。
 - ③パリサイ人たちにとっては常識。
 - ④イエスは、「人の子」という称号を好んで用いた。
2. 次の問題は、変化球である。
 - (1) 詩篇 110:1
「ダビデがキリストを主と呼んでいるのなら、どうして彼はダビデの子なのでしょう」
 - (2) この質問の要約
 - ①メシアは「ダビデの子」と呼ばれている。
 - ②ところが、ダビデはそのメシアのことを「私の主」と呼んでいる。
 - ③なぜダビデは「私の子」と呼ばないで、「私の主」と言っているのか。

- (3) 沈黙するパリサイ人たち
 - ①ラビ的ユダヤ教の欠点が明らかになる。
 - ②「ダビデの子」とは、イエスの人性を指す言葉。
 - ③「私の主」とは、イエスの神性を指す言葉。
 - ④ラビ的ユダヤ教は、イエスの神性を認めていない。

3. ラビ的ユダヤ教について

- (1) 聖書的ユダヤ教と、ラビ的ユダヤ教とは異なる。
- (2) イエスが示したのは、聖書的ユダヤ教。旧約聖書の正しい理解に基づく。
- (3) 今のユダヤ教には、正統派、保守派、改革派とあるが、主流は正統派。
- (4) 紀元 70 年のエルサレム崩壊以降、ユダヤ教の主流はラビ的ユダヤ教である。
- (5) キリスト教は、「聖書的ユダヤ教」、あるいは「普遍的ユダヤ教」である。
 - ①キリスト教がユダヤ教と分離して発展したと考えるのは、誤りである。
 - ②聖書をユダヤ的に読む必要があるのは、そういう理由からである。
- (6) 聖書的ユダヤ教(キリスト教)では、イエスが人であり神であることを認める。

II. 群衆と弟子たちへの教え(23:1～12)

はじめに:イエスのメッセージは反ユダヤ的か。

- (1) イエスはイスラエルの指導者たちを糾弾した。
- (2) イエスの働きは、旧約聖書の預言者たちの系譜に属する。
- (3) イエスは群衆と弟子たちに、パリサイ派の4つの間違いについて教える。

1. 言行不一致の問題。

- (1) 「モーセの座」とは争い事をさばく裁判官の席。
- (2) コラジンの会堂跡に入ると、その右側に特別な座が設けられている。
- (3) 当時、裁判官たちは判例(過去の判決)に従って人を裁いていた。
- (4) 彼らには、新しく律法を作る権威は与えられていなかった。
- (5) 彼らの問題点は、人をさばく位置にいながら行いが伴っていなかったこと。

2. ミシュナの律法(口伝律法)の問題

- (1) 彼らは、それを民衆に負わせる一方、自分たちのためには抜け道を用意していた。

3. 偽善の問題

- (1) モーセの律法は経札や衣のふさをつけることを命じている。
- (2) 経札とは聖句を書いた小さな巻物を入れる小箱。
 - ①出エジプト 13:3～16
 - ②申命記 6:5～9
 - ③申命記 11:13～21 を書いた巻物。
- (3) モーセの律法を実行するのはすばらしいが、目立つために行うなら偽善となる。

(4) 神の律法を実行する動機は、神への愛である。

①旧約時代は、モーセの律法

②新約時代は、キリストの律法(ガラテヤ6:2)

ヨハネ 14:15「もしあなたがたがわたしを愛するなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずです」

4. 権威ある称号を求めるという問題

(1) 権威ある称号だけではなく、それに伴う特権を求めた。

(2) 「教師と生徒の関係」という文脈。

①ラビ(rabbi)

②先生(teacher)

③父(father): 肉の父ではない。

④師(master)

(3) ラビは生徒に対して不当とも思えるほどの権威を行使した。

①生徒の職業や結婚について決定権を行使した。

②ラビは父親よりも大切。父よりも先にラビを助ける。

③イエスが禁止されたのは、ある人が別の人の上に絶対的な権威を振るうこと。

(4) 真の弟子の特徴

①仕える人

②神の祝福を信じる人

(5) 日本の習慣をどう考えるか。

①「先生」という言葉は、「ラビ」とは異なる。

②聖書は、教師や牧師の存在を認め、その人たちを敬うようにと教えている。

③指導者を敬うと同時に、権威の行使に関しては見張人となる必要がある。

Ⅲ. パリサイ人たちへの教え(23:13~36)

はじめに: 7つのわざわい

(1) 第1と第7のわざわいは同じもの。

(2) 文学的手法としては、それらのわざわいが循環していくような形になっている。

1. メシアの拒否

(1) イエスのメシア性を認めず、自分も他の人も天の御国から締め出している。

(2) ユダヤ人の中では、今もこの状態が続いている。

(3) 指導者の責任は大きい。

(4) 第7のわざわいで、より詳しく語られる。

2. 誤った熱心さ

(1) 異邦人をパリサイ的ユダヤ教に改宗させるためにあちこち動き回っていた。

(2) 改宗者になった者はパリサイ人以上に律法主義に熱中するようになる。

- (3) 「ゲヘナの子(パリサイ人)」が「より悪いゲヘナの子(改宗者)」を作る。
- (4) 今日でも、律法主義的信仰は律法主義者しか生み出すことはできない。

3. 優先順位の逆転

- (1) 神殿よりも神殿の中にある黄金のほうが尊かった。
- (2) 祭壇よりも祭壇の上の供え物のほうが大切だった。
- (3) 第一のものを第一にしない罪。

4. 小さいものは守り、大きいものは無視

- (1) 「はっか、いのんど、クミン」。イエス時代に栽培されていた小さな種の代表。
- (2) 彼らは、そんなに小さなものでも十分の一を捧げていた(これは、口伝律法)。
- (3) それ自体は悪いことではない。
- (4) 細かいことに神経を使いながら、それよりもはるかに重要なものは無視。
- (5) はるかに重要なものとは、「正義、あわれみ、誠実」など。

5. 内側は無視して外側だけを清める

- (1) 杯や皿をきよめるために細心の注意を払っていた。
- (2) しかし、心の中のきよめは無視していた。
- (3) イエスは、内側をきよめれば、外側は自然にきよくなると教えている。

6. 偽善

- (1) パリサイ派の特徴は偽善。
- (2) その状態をイエスは、「白く塗った墓」と表現された。
- (3) 祭司やレビ人たちは死体や墓に触れないために、毎年墓を白く塗っていた。
- (4) 白く塗った墓とは、人間が作ったルールのこと。

7. メシアの拒否

- (1) 第1のわざわいと同じ。さらに詳細にその内容が説明されている。
- (2) 彼らは「自分たちなら預言者たちの血を流すことはなかっただろう」と豪語。
- (3) イエスはその誤りを指摘。
 - ①彼らはイエスが遣わした使者(バプテスマのヨハネ)を迫害した。
 - ②また、イエス自身をも信じなかった(数々のしるしと奇蹟があったのに)。
 - ③「義人アベル」と「バラキヤの子ザカリヤ」の名が並べられている。
 - ④ユダヤ教の聖書は、創世記から始まり歴代誌第二で終わる。
 - ⑤アベルは創世記に、バラキヤの子ザカリヤは歴代誌第二の最後に出てくる。
 - ⑥イエスは、聖書全体の中で殉教者となった者たちのことを語っている。
 - ⑦イエスを拒否することは、旧約聖書の預言者たちを拒否したことと同じ。
 - ⑧預言者たちの血の責任は、イエスを拒否した者たちの上に下る。
 - ⑨「この時代の上に来ます」という表現に注目。紀元 70 年に成就した。
- (4) 現代のユダヤ教正統派は旧約聖書を信じているわけではない。
- (5) イエスが何度も、「目の見えぬパリサイ人たち」と語っておられるのに注目。

IV. イエスの嘆き

1. 37 節はイエスの公生涯のまとめ

- (1) 3年半にわたるご自身の公生涯を次のようにまとめている。
 - ①めんどりがひなを翼の下に集めるように…。
 - ②それなのに、あなたがたはそれを好まなかった。
 - ③今も、ほとんどのユダヤ人たちがイエスを拒否し続けている。
 - ④メシアニック・ジューは、めんどりの翼の下に集まるひな。
 - ⑤今もイエスは、涙を流しておられる。

2. 38 節、39 節は預言

- (1) 「見なさい。あなたがたの家は荒れ果てたままに残される」。紀元 70 年に成就。
- (2) 『祝福あれ。主の御名によって来られる方に』とあなたがたが言うときまで…。
 - ①イエスの再臨の条件がなんであるかを預言している。
 - ②詩篇 118:26 は、メシアを迎える時の正式な祈りの言葉。
 - ③ユダヤ人たちがイエスを信じるようになってから、再臨が起こる。
- (3) すべての反ユダヤ主義は再臨の妨害。
 - ①サタンはこの預言をよく知っている。
 - ②それを阻止するためにユダヤ人たちを抹殺しようとしてきた。
 - ③それが、反ユダヤ主義が起こる理由。十字軍、ボグロム、ホロコースト。
- (4) ユダヤ人に福音を伝えることは、主イエスの再臨を来たらせるための営み。

結論

1. ユダヤ教の本質を理解する。

- (1) 現代のユダヤ教はパリサイ的ユダヤ教の延長であり、聖書的ユダヤ教ではない。
- (2) キリスト教は、聖書的ユダヤ教である。

2. 律法主義と本物の信仰の違いを理解する。

- (1) モーセの律法からキリストの律法へ。
- (2) 律法を行う原動力は、キリストに対する愛である。
- (3) その愛は、聖霊から与えられる。

3. メシア再臨の条件を理解する。

- (1) ユダヤ人の救いが鍵を握っている。
- (2) 今も反ユダヤ主義を通してサタンが働いている。
- (3) ユダヤ人の救いのために祈ることは、再臨信仰の要諦である。

「マタイ 24 章」

イントロ:

1. 文脈を確認する。
 - (1) 23 章 39 節でイエスの公生涯は終わった。
 - (2) 24 章1節で、弟子たちが神殿を指し示した。
 - (3) 前 20 年にヘロデ大王が着工し、当時(紀元30年)まだ工事が続けられていた。
 - (4) すべて完成するのは、紀元 64 年。
 - (5) そこに用いられていた石は、8トン～10トンもある巨大なもの。
 - (6) イエスは「石がくずされずに、積まれたまま残ることは決してない」と預言。
 - (7) この預言は、紀元 70 年に文字通りに成就した。
2. 弟子たちは不安に襲われ、イエスに質問した。
 - (1) いつ、それが起こるのか。そのしるしは。
 - (2) 再臨はいつ起こるのか。そのしるしは。
 - (3) 世の終わりはいつ来るのか。そのしるしは。
3. その質問に対する答えが「オリーブ山での説教」と呼ばれるもの。
 - (1) マタイ 24 章～25 章、マルコ 13 章、ルカ 21 章に記されている。
 - (2) メシアであるイエスの3つの役割(預言者、祭司、王)。
 - (3) ここでは、預言者としての役割を果たしている。
 - (4) イエスは、(3)、(1)、(2)の順番に答えている。
4. このメッセージのゴールは、弟子たちの3つの質問に答えること。
5. きょうの箇所は、私たちににとってどういう意味があるのか。
 - (1) 誤った終末論に惑わされないために。
 - (2) 目に見えるものではなく、永遠に価値あるものを追求するために。
 - (3) 確固たる歴史観と人生観を持つために。

弟子たちの3つの質問に対するイエスの答えを理解する。

I. 世の終わりはいつ来るのか。そのしるしは。(24:4～8)

1. 「この世」と「来るべき世」の対比
 - (1) 「この世」が終わると「来るべき世」(メシア的王国のこと)がやって来る。
 - (2) 「世の終わり」とは「この世の終わりが近い時代」、つまり「終末時代」。

2. 「世の終わり」のしるしではないもの(4～6節)。

(1) 教会時代を通して見られる現象。

(2) 偽キリストの出現

①ユダヤ人の歴史の中で、メシア宣言をした最初の人物はイエス。

②それ以降、数々の自称メシアが出現した。

③紀元2世紀に反乱を起こしたバル・コクバ。

④20 世紀にはシュネルソンというユダヤ人が登場した。

⑤異邦人の中からも自称メシアが現れた。

世界基督教統一神霊協会(統一協会)の文鮮明(ぶん・せんめい)

(3) 「戦争のことや、戦争のうわさ」

①地域紛争や小規模な戦争を指す言葉。

②いつの時代にあっても、紛争や戦争は絶えることがない。

(例話) 湾岸戦争、9/11 同時多発テロなどの出来事に対する教会の反応

(4) 以上の2つの現象があっても、世の終わりが来たと思ってはならない。

①人々が異端的な教えに引きずり込まれる理由は、聖書に関する無知。

②国際関係の個々の事例を、聖書預言に当てはめようとするのは無益。

3. 「世の終わり」のしるし(7～8節)

(1) 「民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がる」

①旧約聖書やラビ文書の用例から、この言葉は「世界戦争」を意味している。

②6節に出てきた地域紛争とは根本的に異なる。

(2) さらに「飢饉」と「地震」という「しるし」も伴う。

(3) 「そのようなことはみな、産みの苦しみの初めなのです」

①世の終わりには、一連の苦難が続く。

②世界戦争、飢饉、地震などは、その初めである。

③一連の苦難は、メシア的王国を産み出すための陣痛の苦しみ。

(4) 今はどういう時代か。

①第一次世界大戦(1914 年～1918 年)は、「世界戦争」そのもの。

②それは、人類の歴史上最初の世界大戦。

③第二次世界大戦は、その延長に過ぎない。

④第一次世界大戦は、「世の終わり」の時代に突入したことの「しるし」

⑤第一次世界大戦は、シオニズム運動に拍車をかけた。

⑥第二次世界大戦は、ユダヤ人国家再建につながった(1948 年)。

⑦さらに、1967 年にイスラエルがエルサレムを回復した。

⑧次のシナリオは、携挙である。

⑨イスラエルは「預言的時間を示す時計」である。

Ⅱ. エルサレム神殿の崩壊は、いつ起こるのか。そのしるしは。

1. マタイにはその答えがない。
 - (1) ルカ 21:20～24 にだけ記録されている。
 - (2) 「敵がエルサレムを包囲したら、それが神殿崩壊のしるしである」
 - (3) このしるしは、紀元 66 年に与えられた。エルサレムの包囲。
 - (4) 紀元 68 年ローマで政変(ネロの自殺)があり、総司令官ヴェスパシアヌスが帰国。
 - (5) 紀元 70 年、皇帝ヴェスパシアヌスはティトスを派遣し、エルサレムを陥落させた。
2. メシアニック・ジューたち。
 - (1) 全員エルサレムから脱出し、ひとりも死ななかった。
 - (2) これが、後世に問題を残す。裏切り者というレッテル。

Ⅲ. 再臨はいつ起こるのか。そのしるしは。(24:9～31)

1. 大患難時代の前半(3年半) 24:9～14
 - (1) 聖徒たちへの迫害が起こる。
 - ①黙示録 6:9～11 の預言と同じ。
 - ②教会が携挙された後でも、イエスをメシアと信じて救われる聖徒たちが誕生する。
 - ③聖徒たちを迫害するのは、宗教的バビロン(世界統一宗教。黙示録 17:1～6)
 - (2) 多くの偽預言者が起こる。
 - ①ゼカリヤ書 13:2～6 の預言と同じ。
 - (3) 人類の罪が増加する。不法がはびこり、多くの人たちの愛が冷える。
 - ①Ⅱテサロニケ 2:6～7 の預言と同じ。
 - (4) 大患難時代の最後まで耐え忍ぶ者は、救われる。
 - ①これは大患難時代を生き延びるユダヤ人たちのこと。
 - ②彼らは、イエスをメシアとして受け入れ、民族的救いを経験するようになる。
 - (5) 世界規模のリバイバルが起こる。
 - ①福音を宣べ伝えるのは、144,000 人のユダヤ人たち(黙示録 7 章)。
 - ②その結果、多くの異邦人が救いに入れられる。
 - ③「この御国の福音は全世界に宣べ伝えられて…終わりの日が来ます」
2. 大患難時代の後半(3年半) 24:15～28
 - (1) 「荒らす憎むべき者」の登場。
 - ①反キリストが神殿の至聖所に着座し、自らを神と宣言する。
 - ②偽預言者は、反キリストの像を至聖所に建てる。
(ダニエル 12:11、Ⅱテサロニケ 2:3～10、黙示録 13:11～15)
 - ③これは、7年の契約のちょうど中間(3年半が経過した時点)で起こる。

- (2) ユダヤ人たちは離れて国外に逃亡するようにと命じられている(黙示録 12 章)。
- ①「急いで」という点が強調されている。
 - ②「山へ逃げなさい」とは、ヨルダン川の東にある山地のこと。
 - ③身重の女と乳飲み子を持つ女は悲惨。迅速に移動できない。
 - ④冬にはワジ(水無し川)に水が流れているので、移動が困難になる。
 - ⑤安息日には、動けない。
- (3) 反キリストによって、かつてない世界規模のユダヤ人への迫害が始まる。
- ①その結果、多くのユダヤ人たちが殺される。
 - ②これは、メシアの再臨を妨害するサタンの試み。
- (4) 神は日数を少なくする(3 年半)ことによって、「選ばれた者たち」を救われる。
- ①「選ばれた者たち」とは、この文脈では選民イスラエルのこと。
- (5) メシアが再臨したという噂を信じてはならない。
- ①メシアの再臨は、初臨の時とは異なり、誰もが認識できるような状態で起こる。
- (6) 偽キリスト、偽預言者が大きなしるしや不思議を行う。
- (Ⅱ テサロニケ 2:8～10、黙示録 13:11～15 参照)
- ①彼らが「しるしや不思議」を行うのは、後半の3年半になってから。
 - ②彼らは、選民であるユダヤ人たちを惑わすために活動する。
- (7) メシアが再臨したという情報を信じてはならない。
- ①メシアの再臨は、はっきりとした「しるし」を伴って起こる。
 - ②「いなずまが東から出て、西にひらめくように」。認識できる「しるし」のこと。
- (8) 「死体のある所には、はげたかが集まります」(28 節)
- ①メシア再臨の場所がどこかを暗示した言葉。
 - ②「死体」とはユダヤ人たちを指し、「はげたか」とは異邦人の軍隊を指す。
 - ③異邦人の軍隊が、避難しているユダヤ人たちを滅ぼすために進軍して来る。
- (黙示録 12:6、13～15 参照)
- ④再臨の場所は、ヘブル語ではボツラ、ギリシヤ語ではペトラと呼ばれる地。
 - ⑤旧約聖書が預言する再臨の場所
- (ミカ書 2:12～13、イザヤ書 34:1～7、イザヤ書 63:1～6、ハバクク書 3:3)
- ⑥メシアはオリーブ山の上に再臨される(ゼカリヤ 14:4)。
- (ボツラでの戦いに勝利した後、再臨のメシアがオリーブ山の上に立つ)。

3. メシア再臨のしるし 24:29～31

- (1) 大患難時代に続いて、世界が暗黒に覆われ、天変地異が起こる。
- (2) その暗黒状態の中に、突然光が差し込む。シャカイナグローリーのこと。
- (3) この光こそ、「人の子のしるし(再臨のしるし)」
- (4) 人の子(王なるイエス)が天の雲に乗って来るのを、あらゆる種族が目撃する。
- (5) 不信仰者である彼らは、悲しみながら再臨のメシアを見るようになる。
- (6) 選びの民の回復(31 節)
 - ①イスラエルの民が約束の地に回復される。
 - ②この預言が最終的に成就するのは、再臨の後である。
 - ③再臨のイエスは、御使いたちを世界中に遣わす。
 - ④御使いたちは、イスラエルの民を世界各地から呼び集める(イザヤ 27:12～13)。

結論

1. 世の終わりはいつ来るのか。そのしるしは。
 - (1) 偽キリストの出現や、地域紛争は、世の終わりのしるしではない。
 - (2) 第一次世界大戦以降、世の終わりに突入している。
 - (3) 次のシナリオは、携挙と大患難時代。
 - (4) 携挙がいつあるかは、分からない。
 - (5) 大患難時代は、反キリストとイスラエルが7年の契約を結んだ時点から始まる。
2. エルサレムの神殿の崩壊は、いつ起こるのか。そのしるしは。
 - (1) 町の包囲がしるし。
 - (2) 紀元 70 年にエルサレムは神殿とともに崩壊した。
3. 再臨はいつ起こるのか。そのしるしは。
 - (1) 大患難時代の前半
 - (2) 大患難時代の後半
 - (3) 暗黒の中に差し込むシャカイナグローリーが、再臨のしるし。
 - (4) イスラエルの民は、約束の地に集められる。

「マタイ 25 章」

イントロ:

1. 文脈を確認する。

(1) 24 章、25 章で、オリーブ山での説教が終わる。

(2) イエスが預言した終末論

①エルサレムの崩壊 紀元 70 年に成就。

②世の終わりのしるし 第一次世界大戦。

③携挙 いつかは分からない。

④大患難時代

＊ 前半の3年半

＊ 後半の3年半

⑤地上再臨

⑥千年王国

2. 前回残した箇所

(1) いちじくの木のとえ(ユダヤ人への励まし) 24:32～35

①いちじくの木とは、イスラエルのことではない。

②いちじくの木の花は、夏が近いことを示す。

③「これらのこと」が見えたら、再臨は近い。

④「これらのこと」とは、「荒らす憎むべき者」(24:15)の出現。

⑤実際には、3年半後に再臨が起こる。

⑥「この時代」(大患難時代を通過するユダヤ人)が減びることはない。

(2) 教会の携挙 24:36～42

①「ただし」とはギリシア語で「ペリ・デ」。別のテーマに入る。

②携挙の時は、誰も知らない。

③ノアの時代と同じようなことが起こる。

④信者と未信者の区分。

3. きょうの箇所(再臨への備えを教える5つのたとえ話)

(1) マルコ 13:33～37

(2) 家の主人

(3) 家の管理を任されたしもべ

(4) 花婿を迎える 10 人の娘たち

(5) タラント

(6) 以上のたとえ話の適用が、最後に来る。

4. このメッセージは、5つのポイント(4つのたとえ話と、適用)で展開する。
5. きょうの箇所は、私たちにとってどういう意味があるのか。
 - (1) 知的に理解する。
 - (2) 心で理解する。

私たちがなすべき終末への備えとは何かを学ぶ。

I. 第1のたとえ話(家の主人) 24:43～44

1. 泥棒はいつ来るのか分からない。
2. 日頃の備えが大切。
3. 再臨を待つ信者の心構え。
 - (1) 目をさましている。
 - (2) 備えができている。
 - (3) 労している。

II. 第2のたとえ話(家の管理を任された僕) 24:45～51

1. 当時の習慣では、主人が管理人に任せて旅に出るのは珍しくない。
2. 管理人には、主人の命令を実行する義務がある。
3. 不忠実なしもべは、思いがけない時に帰ってくる主人から、処罰される。
4. 忠実なしもべ(備えのある者)と不忠実なしもべ(備えのない者)の差は、信仰のあるなし。

III. 第3のたとえ話(花婿を迎える 10 人の娘たち) 25:1～13

1. ユダヤ式結婚式の4つの段階
 - (1) 婚約
 - ①両親が、子どもが幼い頃に交わすことが多かった。
 - ②花婿の父が「花嫁料」を支払う。
 - ③結婚式の最低1年前には行った。
 - ④教会とキリストの婚約。十字架の死が花嫁料。エペソ5:22～32
 - (2) 花婿が花嫁を迎えに行く段階。
 - ①離れた町に住んでいることが多い。
 - ②式の準備が整うと、花婿は花嫁を迎えに行く。
 - ③これは、教会の携挙を象徴している。
 - (3) 結婚式
 - ①少人数で行う。
 - ②キリストと教会の結婚式は、再臨の直前に天で行われる(黙示録 19:6～8)。

(4) 婚宴

- ①大人数で行う。
- ②7日間続くのが普通。
- ③婚宴は、メシア的王国を象徴している。

2. たとえ話の内容

- (1) 第2の段階が背景になっている。
- (2) 花嫁を連れて帰るはずの花婿が、まだ帰ってこない。
- (3) 10 人の娘たちが、町はずれで待っているが、何時に到着するのか分からない。
- (4) 5人は愚か(油を用意していない)で、5人は賢かった(油を用意していた)。
- (5) 解釈
 - ①教会の聖徒たちは、すでに天に挙げられていることが前提となっている。
 - ②花婿が花嫁を連れて帰ってくる。これは再臨を象徴している。
 - ③再臨を待つ患難時代の異邦人たち。
 - ④地上には、用意のできている異邦人と、できていない異邦人がいる。
 - ⑤「愚かな娘」旧約聖書の概念では救われていない人。詩篇 14:1
 - ⑥油は、聖霊を象徴している。

IV. 第4のたとえ話(タラント) 25:14～30

- 1. 主人からの委託。
- 2. それぞれが異なった量の財産を委ねられた(5タラント、2タラント、1タラント)。
- 3. 活用
- 4. 清算
 - (1) 5タラントのしもべ 良い忠実なしもべ
 - (2) 2タラントのしもべ 良い忠実なしもべ
 - (3) 1タラントのしもべ 悪い怠け者のしもべ
- 5. 外の暗やみに追い出される。
 - (1) なんの働きもなかったからではない。
 - (2) 彼の不信仰が、怠惰な姿勢となって表れた。
 - (3) 「悪い」という言葉は、未信者にだけ適用される。
 - (4) 「暗やみ」＝「火の池」には光がない。
 - (5) 神の国のために労することが大切。

V. 4つのたとえ話の適用 25:31～46

1. 異邦人のさばき
 - (1) 再臨のメシアが栄光の座に着いた時。
 - (2) 場所:ヨエル3:1～3によれば、「ヨシャパテの谷」(ケデロン谷)。
 - (3) さばかれるのは、大患難時代を生き延びた異邦人たち。個人に対するさばき。
2. さばきの基準
 - (1) 「わたしの兄弟たち」にどのような態度を取ったか。
 - (2) 「わたしの兄弟たち」とは、ユダヤ人のこと。
 - (3) 大患難時代の迫害に会うユダヤ人たちに、どのような態度を取ったか。
 - (4) 親ユダヤの人たちは羊の人々、反ユダヤの人たちは山羊の人々。
 - (5) 羊の人々は、千年王国に入り、究極的には永遠のいのちを受ける。
 - (6) 山羊の人々は、千年王国から除外され、永遠の刑罰を受ける。
3. 羊の人々と山羊の人々の違いは、信仰があるかないかの差である。
 - (1) 信仰が行いとなって表現される。
 - (2) 信仰と業の関係。ヤコブ2:14～26
 - (3) 信仰があることを、業によって示す必要がある。

結論

1. 4つのたとえ話と、適用は、「再臨を待つ心構え」を教えている。
 - (1) 目をさましている。
 - (2) 備えができている。
 - (3) 労している。
2. 以上のことは、すべての時代の信者に適用される。
 - (1) 携挙を待つ人々
 - (2) 大患難時代を通過する人々
3. 本物の信仰は、業によって表現される。
 - (1) 神に栄光を帰す生活。
 - (2) ユダヤ人を愛し、彼らの祝福を祈る信仰。
 - (3) エルサレムの平和を祈るとは、ユダヤ人の救いを祈ることである(詩篇 122:6)

「マタイ 26 章前半」

イントロ:

1. 文脈を確認する。
 - (1) 24 章、25 章で、オリーブ山での説教が終わる。
 - (2) ディスペンセーション
 - ①福音書の時代 律法の時代
 - ②神の国の福音 イエスが神の国の王として来られたという内容
 - ③恵みの時代への移行 教会時代は使徒2章から始まる。
 - ④恵みの時代の土台となるのが新しい契約
 - ⑤イエスの十字架の死によって新しい契約が結ばれる。
2. 十字架に向かって進むイエス
 - (1) サタンの策略
 - ①過越の祭り以外の時に、イエスを殺す。
 - ②十字架以外の方法で、イエスを殺す。
 - (2) 登場人物
 - ①サタンの側に付く人々
 - ②イエスの側に付く人々
 - ③状況が読めていない人々
3. きょうの箇所は、私たちににとってどういう意味があるのか。
 - (1) どんな妨害があっても、神の計画は必ず実現することを学ぶ。
 - (2) 聖書が教える救いの道がなんであるかを確認する。

神の計画の進展を、6幕に分けて学ぶ。

I. 第1幕 状況が読めていない人々 弟子たち 1～2節

1. ニサンの月の 12 日(火)
2. イエスの4回目の十字架預言
3. 受難の時が確定した。14 日(木)の日没～15 日(金)の日没の間。
4. 弟子たちの無知

II. 第2幕 サタンの側に付く人々 ユダヤ人の指導者たち 3～5節

1. 祭司長たちはサドカイ人、民の長老たちはパリサイ人。
2. 普段は敵対していたが、イエスを共通の敵として集まった。

3. 相談の内容

- (1) だまして捕らえる。民衆の目に付かない所で。イスカリオテのユダが手引き。
- (2) 過越の祭りが終わってから殺す。

4. 背後にサタンの暗躍がある。

Ⅲ. 第3幕 イエスの側に付く人 ひとりの女 6～13 節

1. ベタニヤのシモンの家 元ツアラアト患者。イエスによって癒された。
2. ひとりの女の登場。この女はマルタの妹のマリヤ(ヨハネ 12:3)。
3. マルタと兄弟のラザロも、その家に招かれていた。
4. 高価な香油(ナルド)の入った石膏の壺。
 - (1) 王なら思いのままに使用した香油。
 - (2) 庶民の場合は、結婚式の夜のために用意するもの。
 - (3) ヨハネ 12 章によれば、香油の価格は 300 デナリ(労働者の 300 日分の労賃)。
5. マリヤは、イエスの埋葬の準備としてその香油を注いだ。
6. マリヤは、イエスが復活することも知っていた。彼女は墓に行っていない。
7. マリヤは、イエスの足元に座り、その教えを聞いていた(ルカ 10:39)。
8. 弟子たちの反応
 - (1) 11 人は、貧しい人たちを思って語ったか。過越の祭りは施しをする期間でもある。
 - (2) イスカリオテのユダは、利己的な理由。彼は盗人であった(ヨハネ 12:6)。
9. イエスのことば
 - (1) 今は十字架を前にした特別な時である。
 - (2) 彼女の行為は、埋葬の準備となっている。
 - (3) この行為は、福音が宣べ伝えられる所どこでも、語られ、記憶されるようになる。

Ⅳ. 第4幕 サタンの側に付く人 イスカリオテのユダ 14～16 節

1. イスカリオテのユダは、祭司長たちのところに行く。
2. 彼の心に、サタンが入った(ルカ 22:3)。悪霊付きではなく、サタン付きになった。
3. 彼は、サタンの計画を実行する器となった。
 - (1) 内通者として、人目に付かないところでイエスを逮捕する道を開く。
 - (2) ローマ法に基づいてイエスを告発する役割を果たす。
 - (3) 裁判が始まってからは、証人となる。
4. ユダは銀貨 30 枚を手に入れた。
 - (1) シェケル貨 30 枚は、死んだ奴隷の代金(出 21:32)。ここには、皮肉がある。
 - (2) イエスの命は、死んだ奴隷の命と同じとみなされた。
 - (3) 金は神殿の金庫から出された。無意識の内に、最後の犠牲であるイエスを買取った。

V. 第5幕 イエスに付く人々 部屋を用意した人物 17～19 節

1. 秘密裏に、食事の場所を確保する必要性があった。
2. 派遣されたのは、ペテロとヨハネ(ルカ 22 章)。
3. 無名の二人の弟子(「水がめを運んでいる男」と「二階に大広間のある家の主人」)。
4. 二階の大広間とは、外階段が付いた、その家で最上の部屋。
5. 神への奉仕には、2種類ある。
 - (1) 直接的奉仕
 - (2) 間接的奉仕

VI. 第6幕 状況が読めていない人々 弟子たち 20～30 節

1. 過越の食事の順序
 - (1) 第1の杯。「感謝の杯」。
 - (2) 母か娘が、水の入った鉢とタオルを持って回り、人々は指を洗いタオルで拭く。
 - (3) 第2の杯。「裁きの杯」。
 - (4) パセリ(カルパスと言う)を塩水に浸して食べる。若さの象徴。
 - ①塩水の鉢は数人にひとつ用意された。
 - ②イエスはユダの裏切りを予告した。
 - (5) アフィコーメンの儀式
 - (6) ハロセットと苦菜を食べる。この時点で、ユダは去る。
 - (7) メインコース
 - (8) アフィコーメンを食べる。「これはわたしのからだです」
 - (9) 第3の杯。贖いの杯。
 - (10) 第4の杯。賛美の杯。
2. アフィコーメンの儀式をはさんで、メインコースがある。
 - (1) 3つの部分に分かれた布袋。
 - (2) 3枚の種なしパンを入れる。父、子、聖霊の三位一体の神を表す。
 - (3) 真中のパンを取り出し、2つに裂き、半分を亜麻布にくるんで隠す。
 - (4) メインコースの後で、それを持ち出し食べる。
 - (5) 「アフィコーメン」とはデザートという意味。
3. アフィコーメンとイエスの類似性
 - (1) このパンは、種なしパン。イエスには罪がなかった。
 - (2) このパンには、筋が入っていた。イエスの体についた鞭の跡。
 - (3) このパンには、小さな穴があいていた。イエスの体に残った釘と槍の跡。
 - (4) アフィコーメンは、十字架上で裂かれたイエスの御体の象徴。
 - (5) このパンを食するとは、イエスの十字架を信じ受け入れること。
 - (6) これを信じる以外に罪の赦しと永遠のいのちを受ける方法はない。

4. 第4の杯 賛美の杯で、過越の食事は終わる。

結論

1. サタンと人間からの妨害がある。
2. しかし、神の計画は成就する。
3. 今は恵みの時代
 - (1) イエス・キリストの福音を信じることによって救われる。
 - (2) クリスマン生活とは、神の愛に応答して生きること。

「マタイ 26 章後半」

イントロ:

1. 文脈を確認する。
 - (1) 時代(ディスペンセーション)が移行しようとしている。
 - ①律法の時代から恵みの時代への移行。
 - ②各ディスペンセーションには、土台となる契約がある。
 - ③律法の時代の土台は、モーセ契約。
 - ④恵みの時代の土台は、新しい契約。
 - ⑤イエスの十字架の死によって新しい契約が結ばれる。
 - (2) イエスの死が有効になるための2つの条件。
 - ①過越の祭りの間に死ぬ。
 - ②十字架にかかって死ぬ。
 - (3) イエスの逮捕は、予定よりも早くやって来た。
 - ①ユダを促すイエス(ヨハネ 13:26～31)。
 - ②イエスの裁判は、大混乱の中で行われた。
2. 26 章後半の中心は、ゲツセマネの園の祈り。
 - (1) ルカ 22:44 の記述に注目。血の汗を流すイエス。
 - (2) イエスの苦しみの内容を確認する。
3. きょうの箇所は、私たちににとってどういう意味があるのか。
 - (1) イエスの苦しみが私たちに何をもたらしたのかを知る。
 - (2) イエスの祈りから模範を学ぶ。

イエスの苦しみの内容を、部分ごとに分けて確認する。

I. 弟子たちのつまずきの預言 31～35 節

1. ゼカリヤ 13:7の預言。この預言は、その夜に文字通り成就する。
2. 甦りの預言。
 - (1) 甦って、先にガリラヤに行く。
 - (2) この約束は、弟子たちに無視された。
3. ペテロの自信満々の告白。
 - (1) 無理解に基づく熱心さ。
 - (2) 彼をめぐって霊的戦いが繰り広げられることを知らなかった。

4. イエスの預言。
 - (1) マルコ 14:30 「鶏が2度鳴く前に、わたしを知らないといふ3度言います」
 - (2) 1度鳴きは夜中の 12 時、2度鳴きは午前3時。
5. ペテロだけでなく、弟子たち全員が忠誠を誓った。
 - (1) イエスの心を理解しない弟子集団。
 - (2) 唯一の例外は、ベタニヤのマリヤ。

II. ゲツセマネの園 36～45 節

1. ゲツセマネの園
 - (1) ケデロンの谷にあるオリーブ園
 - (2) 「油絞りの場」
 - (3) イエスがいつも弟子たちと退いていた私的空間。
2. 出来事の進展
 - (1) 8人は見張り役に残される。
 - (2) 3人(ペテロ、ヤコブ、ヨハネ)はイエスに付き添う。
 - (3) イエスはその3人に命令を与える(38 節)。
 - (4) イエスは、3人から離れた所で祈る。
 - (5) 祈りの模範。
 - ①わが父よ。
 - ②できますならば、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。
 - ③しかし、…あなたのみこころのように、なさってください。
 - (6) 1時間後、3人のところに戻ると、彼らは眠っていた。
 - ①靈的無防備。
 - ②それゆえに、サタンの試みに屈する。
 - (7) 2度目の祈り。内容は同じ。彼らはまたもや眠っていた。
 - (8) 3度目の祈り。内容は同じ。彼らは最後まで眠っていた。
 - (9) イエスの逮捕。「時が来た」。
3. イエスの苦しみの内容
 - (1) イザヤ書 49:1～13 メシア預言
 - (2) 3つの重要な預言
 - ①ユダヤ人たちはイエスをメシアとして信じなかった。
神からの慰めが与えられる(ルカ 22:43)。
 - ②異邦に救いが提供される。「諸国の民の光」。
 - ③ユダヤ人も最終的には救われる。
 - (3) この構造は、ローマ9～11 章の内容と合致する。

4. 「杯」の意味

(1) 肉体の死のことか。

- ①天地創造の前から、神の御子が十字架に付くことは定まっていた。
- ②イエスは自らの受難を知り、それを何度も預言していた。
- ③そのために誕生したのに、過ぎ去らせてくださいと祈るのはおかしい。

(2) 怒りの杯のことである。

- ①旧約聖書では、「杯」は祝福と怒りを表す比喩的言葉。
- ②この文脈では、「怒りの杯」のこと。
- ③罪の贖いのためには、血を流すだけでよい。
- ④ここに至って、「怒りの杯」を飲むことが分かる。霊的死を経験すること。
- ⑤私たちは霊的死を経験していたが、イエスはそうではない。
- ⑥永遠の昔から父なる神と子なる神とはひとつである。そこに、亀裂が入る。

(3) II コリント 5:20～21 「罪を知らない方を、罪とされた」

Ⅲ. イエスの逮捕 47～56 節

- 1. 群衆の目に付かない所での逮捕。
- 2. ユダが案内役。
- 3. 祭司長、民の長老たちから送られた役人と、ローマ兵(400～600 人)。
- 4. ユダはイエスに何度も口づけした。
- 5. ペテロは大祭司のしもべの耳を切り落とす。
 - (1) 大祭司は、過越の祭りの期間は動けない。
 - (2) ペテロは忠誠を示そうとした。
 - (3) 数百人の兵士を前に、剣1本で戦うのは不可能。しかも、ペテロは兵士ではない。
 - (4) 信仰を守る戦いでは、剣は役に立たない。
- 6. イエスは、自発的に逮捕された。
- 7. 弟子たちは、みな逃げてしまった。祈りの準備ができていなかった。

Ⅳ. イエスの裁判 57～68 節

- 1. ユダヤ人による宗教裁判とローマ人による政治的裁判
 - (1) ユダヤ人には死刑を執行する権利が認められていない。
 - (2) 宗教裁判では冒とく罪を立証し、政治的裁判では反逆罪を立証する必要がある。
- 2. 出来事の進展。
 - (1) カヤパの官邸にサンヘドリン(ユダヤ議会)が招集される。律法違反。
 - (2) 71 人の議員がいたが、議会は最低 23 人で成立する。
 - (3) 急な召集だったので、少数の出席。ニコデモとアリマタヤのヨセフは欠席。
 - (4) 偽証を求めたが、うまくいかない。

- (5) 最後の2人が、証言する。神殿の破壊は、ローマの法廷でも死刑に値する。
- (6) カヤパは神の御名によって、イエスが証言するように命じた。黙秘権を行使できない。
- (7) イエスの答え
 - * イエスは神であり、人である。
 - * 復活と昇天の預言。
 - * 再臨の預言。
- (8) カヤパによる有罪宣言
 - * 神への冒涇だ。
 - * まだ証人が必要でしょうか(証人はもういないのに、こう豪語している)。
- (9) 全会一致の決定
 - * 本来は無効。
 - * 事前工作があったと考えるから。
- (10) 議員たちは、イエスを侮辱した。

V. イエスを否むペテロ 69～75 節

- 1. ペテロはイエスの後を付いていった。
- 2. ヨハネは大祭司の知り合い。ペテロを中に入れてもらう。
- 3. ペテロは3度イエスを否む。
 - (1) 調子は徐々に強くなる。
 - (2) 「のろいをかけて誓う」。「のろい」は動詞。目的語はイエス。
- 4. 鶏が2度目に鳴く。
 - (1) 午前3時ごろ。
- 5. ルカ 22:61 にあるイエスの眼差し。
- 6. ペテロの悔い改め。

結論

- 1. イエスの苦しみを理解する。
- 2. イエスの赦しを受け取る。
 - (1) 私たちが罪びとであった時に、神は私たちを愛してくださった。
 - (2) 反省ではなく、悔い改めが必要。
- 3. 赦しを实践する生活を始める。
 - (1) 和解は、被害者が加害者を赦すところから始まる。
 - (2) 「我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく」

「マタイ 27 章前半」

イントロ:

1. 文脈を確認する。
 - (1) イエスの死が有効になるための2つの条件。
 - ①過越の祭りの間に死ぬ。
 - ②十字架にかかって死ぬ。
 - (2) イエスの裁判は、2段階で行われた。
 - ①ユダヤ人による宗教裁判
 - ②ローマ総督による政治的裁判
2. イエスを取り巻く人々
 - (1) イスカリオテのユダ
 - (2) ユダヤ人の指導者たち(祭司長、民の長老たち)
 - (3) ポンテオ・ピラト
 - (4) バラバ
 - (5) そして最後に、主イエスに目を注ぐ。
3. きょうの箇所は、私たちににとってどういう意味があるのか。
 - (1) 私たちの中に、上の4人の性質が多かれ少なかれある。
 - (2) 彼らの失敗を他山の石とする。

イエスを取り巻く人々の失敗から教訓を学ぶ。

I. イスカリオテのユダ

1. 彼は、宗教裁判では不要で、政治的裁判で必要とされた。
2. しかし、政治的裁判が始まる前に自殺をした。
3. ユダの死因
 - (1) マタイ 27:5 首吊り
 - (2) 使徒1:18 まっさかさまに落ちて、はらわたが飛び出した。
 - (3) これは矛盾ではない。
 - ①過越の食事:庶民は最初の夜に、祭司長たちは最初の朝に食べる。
 - ②木曜日の夜から金曜日の朝の時間帯に、町中に死体があってはならない。
 - ③午前9時に神殿で過越の子羊をほふることができなくなる。
 - ④汚れを取り除く方法は、南側の城壁からヒンノムの谷に死体を投げる。

4. エレミヤの預言の成就

- (1) ゼカリヤ 11:12～13 を引用。歴史的事実としてはこれ。
- (2) エレミヤはヒノムの谷の呪いを預言した(7:31、19:11)。
- (3) 「ゲイ・ヒノム」→「ゲヘナ」
- (4) この谷で、人身供養が行われていた。
- (5) 「地の畑」を買った時に、エレミヤが預言した呪いも買ったという意味。
- (6) マタイがこの福音書を書いた時点では、まだエルサレムの崩壊は起こっていない。
- (7) 紀元 70 年には、ヒノムの谷は血で溢れ、死体が積み上げられた。

5. ユダは「後悔し」(3節)とあるが、救われたのか。

- (1) メタノイア＝救いに至る悔い改め
- (2) メタメロマイ＝後悔
- (3) 悔い改めの中には、神への同意が含まれる。

II. ユダヤ人の指導者たち(祭司長、民の長老たち)

1. 夜明けになると、裁判の再開。

- (1) 朝の犠牲が捧げられる前に裁判を行うのは違法。
- (2) ここでは、合法的な体裁を整えようとしている。
- (3) ルカ 22:66～71
 - ①「あなたがキリストなら、そうだと言いなさい」
 - ②「わたしはそれ(神の子)です」
 - ③これで冒とく罪を犯しているとの確認がなされた。

2. ピラトに引き渡す。

- (1) ローマ法による裁判。訴因は反逆罪。
- (2) ユダは宗教裁判と政治的裁判の間に自殺した。

3. 祭司長たちは、過越の食事が食べられなくなるのを恐れて、官邸には入らない。

4. 証人がいないのに、無理やり裁判をさせようとする。

5. 群衆を説得して、バラバを赦し、イエスを十字架に付けるように言わせた。

6. ユダヤ人は呪われた民俗か。

- (1) 「その人の血は、私たちや子どもたちの上にかかってもいい」
- (2) 呪いの範囲は、「私たちや子どもたち」
- (3) 紀元 70 年にそれが起こった。「赦されない罪」に対する裁き。

Ⅲ. ポンテオ・ピラト

1. ピラトは紀元 26 年から 36 年まで、ユダヤ総督を務めた。
 - (1) 残忍な支配者として知られていたが、ローマ法の忠実な執行者でもあった。
 - (2) 祭りの期間、エルサレムに上って来ていた。
 - (3) 朝早くイエスの裁判が行われることを予測していた。
2. イエスが無罪であることを知っていた。
 - (1) 彼の妻が夢を見た。
 - (2) ユダヤ人たちがねたみからイエスを殺そうとしていることを知っていた。
3. イエスの死刑を回避したいと思った。
 - (1) ルカ 23:6～12 で、イエスをヘロデ・アンティパスのもとに送っている。
 - (2) バラバか、キリストと呼ばれているイエスか、と問いかける。
 - (3) 最後は脅かしに屈して、死刑判決を出す。
4. 責任逃れのために、水で手を洗った。
 - (1) 彼の責任は免れない。
 - (2) 使徒信条の中に、その名が留められている。
 - (3) 紀元 36 年、カリギュラによってゴール(ウィーンの近く)に流刑となり自殺。

Ⅳ. バラバ

1. 単なる泥棒ではなく、強盗で殺人犯。
2. バラバは、「アバの息子」というニックネーム。アバとは父のこと。
 - (1) 福音記者たちは、混乱を避けるためにニックネームを使った。
 - (2) 彼の本名は、イエシュアであり、主イエスと同じ名。
 - (3) 彼は「父の息子」であり、主イエスは「父なる神の御子」
3. ユダヤ人への懐柔策として、過越の祭りの期間に囚人を一人釈放する習慣があった。
4. イエスはバラバの身代わりとして死んだ。
5. 私たちは、現代のバラバである。

Ⅴ. 主イエス

1. 神の摂理が働いていた。
 - (1) 神殿が崩壊する 40 年前に、ユダヤ人たちは死刑執行の権利を剥奪されていた。
 - (2) イエスが裁かれたのは、紀元 30 年のこと。
 - (3) もしイエスが、宗教裁判で死刑になっていたなら、十字架刑はなかった。
 - (4) そうなれば、イエスの死は無効になり、イエスは偽預言者になってしまう。
2. イエスは最小限の回答しかせず、相手に聞く耳がないと判断すれば沈黙している。

3. イエスは2度、むち打たれた。
 - (1) ルカ 22:63 ユダヤ人のむち 39 回のむち。
 - (2) マタイ 27:26 ローマ人のむち
 - (3) イザヤ 52:14 その顔だちはそこなわれて人の子らとは違っていた。

結論

1. イスカリオテのユダのようにはなるな。食欲。
2. ユダヤ人の指導者のようにはなるな。自己義認。
3. ポンテオ・ピラトのようにはなるな。保身のために正義を曲げる。
4. 自分が現代のバラバであることを認識せよ。
 - (1) イエスは私たちのために、むちを受けてくださった。
 - (2) 次回のメッセージを待つ必要はない。今信じなさい。

「マタイ 27 章後半」

イントロ:

1. 文脈を確認する。
 - (1) イエスの裁判は、2段階で行われた。
 - ①ユダヤ人による宗教裁判
 - ②ローマ総督による政治的裁判
 - (2)ピラトはバラバを釈放し、イエスを十字架に付けるために引き渡した。
2. ニサンの月の 15 日(金) 午後3時にイエスは息を引き取る。
3. きょうの箇所は、3つの時間区分が可能。
 - (1) 死刑の判決を受けてから午前9時までの時間
 - ①十字架の道行き
 - ②ヴィア・ドロローサ(苦しみの道)
 - (2) 午前9時から午前 12 時までの3時間
 - ①人の怒りを体験する時間
 - ②十字架を阻止しようとするサタン最後の試み
 - (3) 午前 12 時から午後3時までの3時間
 - ①神の怒りを体験する時間
 - ②霊的死を体験する時間
4. きょうの箇所は、私たちににとってどういう意味があるか。
 - (1) ローマ6:4～5
 - (2) キリストを信じる者は、キリストとともに死んだ。
 - (3) キリストを信じる者は、キリストとともに復活する。

死に至るまでの3つの時間区分

I. 死刑の判決を受けてから午前9時までの時間

1. 兵士たちによる辱め
 - (1) 官邸の外から、官邸の中に連れて行かれるイエス。
 - (2) 全部隊とは、イエスを逮捕するためにゲツセマネの園に行った兵士たち。
 - (3) 王様ごっこを始めた。
 - ①着物を脱がせ、緋色の上着を着せた。背中への痛み。
 - ②いばらの冠を頭にかぶらせた。アダムの罪の呪い(創世記3:18)。
 - ③右手に葦の棒を持たせた。その棒でイエスの頭をたたいた。
 - ④イエスの前にひざまずいて、「ユダヤ人の王様。ばんざい」と叫んだ。
 - (4) もとの着物を着せ、十字架に付けるために連れ出した。

2. ヴィア・ドロローサ

- (1) 十字架刑の習慣：横木を負って刑場まで歩かされる。
- (2) ゴルゴタ(カルバリ)まで、およそ 700 メートル弱。
- (3) イエスにとっての悲劇
 - ①先に鞭打ちの刑を受けたので、出血多量になっている。
 - ②心拍数が極端に増加し、腎不全、意識朦朧の状態。
 - ③エルサレムの地形は、東から西に向かって上り勾配になっている。
- (4) 当時の読者にとっては、自明のことなので、詳細な説明はない。

3. クレネ人シモン

- (1) 今日の第5ステーションが、クレネ人シモン登場の場所。急勾配になっている。
- (2) 北アフリカのクレネ出身のユダヤ人。
- (3) 祭りの間、城壁の外のテント村に宿泊していた。
 - ①木曜の夜に、過越の食事を終えていた。
 - ②金曜の朝に、神殿で過越の子羊がほふられるのを見るため町に入ってきた。
 - ③そして、たまたまその場に居合わせた。
- (4) クレネ人シモンのその後
 - ①マルコ 15:21 アレキサンデルとルポスの父
 - ②使徒 13:1 アンテオケ教会の指導者。ニゲルと呼ばれるシメオン。
- (5) 彼は、むりやりイエスの十字架を背負わされる。ローマによる強制労働。
- (6) 十字架上のイエスを目撃し、信者となる。
 - ①彼とその家族は、ローマ教会の設立メンバーとなる。
 - ②ローマ教会は、使徒によって設立された教会ではない。
 - ③ローマ 16:13 にルポスの名が出ている。
- (7) 予期せぬ苦難が、祝福につながった例がここにある。

II. 午前9時から午前 12 時までの3時間 人の怒りを体験する。

1. ゴルゴタに到着

- (1) ゴルゴタとは、「どくろ」、「されこうべの場所」。
- (2) 形が「どくろ」に似ていたのではなく、刑場であるがゆえにそう呼ばれた。
 - ①日本の首塚、耳塚。
 - ②考古学的には、聖墳墓教会が建っている場所がゴルゴタ。
- (3) 町から近く、人通りが多い場所。

2. 苦味を混ぜたぶどう酒

- (1) 鎮痛剤としての効果
- (2) イエスはそれを飲まなかった。
- (3) 霊の戦いを最後まで戦い抜くために、意識をしっかりと持つ必要があった。

3. 十字架につけられる。

(1) 午前9時に十字架につけられた。

- ①十字架刑は当時よく知られていたもので、詳細な記述はない。
- ②神殿の丘では、過越の子羊がほふられていた。
- ③ゴルゴタでは、神の小羊がほふられた。

(2) 4種類の十字架

- ①I型 主にイタリア半島で使用。
- ②X型 主にイタリア半島で使用。ペテロの十字架。
- ③T型
- ④十字型

(3) 罪状書きがあつた。「これはユダヤ人の王である」

- ①ピラトがユダヤ人に小さな抵抗を試みた結果。
- ②ヘブル語、ギリシア語、ラテン語で書かれていた。
- ③罪状書きを打ち付けるためには、I字型か十字型。
- ④可能性としては、十字型が 95 パーセント。
- ⑤どの型であるかは、釘の数が異なるだけで問題ではない。

(4) 釘の数は3本

- ①両手の手首にそれぞれ釘が打ち込まれた。
- ②足は、両足そろえて、1本の釘を打つ。

(5) 関節がはずれ、骨々がばらばらになり、激痛が走る。

- ①長時間苦しめるための刑
- ②足台が付いている場合もあった。
(例話)ロシア十字、八端十字架(はったんじゅうじか)
- ③死因は、窒息死。

(6) イエスは6時間で息を引き取るが、これは自発的な死であつた。

4. 着物をくじで分ける。

(1) 十字架刑は、まる裸にされる刑。

(2) 当時の男性の衣服。

- ①上着
- ②下着
- ③頭を覆う布
- ④サンダル
- ⑤外套

(3) 4人のローマ兵が①～④を分け合う。

- (4) ⑤の外套は、くじを引いてひとりが独占する。
 - ①「下着」(ヨハネ 19:23)という訳は、適切ではない。
 - ②詩篇 22:18 の成就。
- 5. ふたりの強盗
 - (1) イザヤ 53:12 の成就。
 - (2) 最初はふたりともイエスをののしったが、最後にひとりは救われる。
 - (3) クレネ人シモンと同じように、イエスの言葉と態度に感銘を受けた。
- 6. イエスをあざける人々
 - (1) 道行く人々
 - (2) 祭司長、律法学者、長老たち。
 - (3) ローマ兵たち(ルカ 23:36)
 - (4) あざけりの内容
 - ①イエスのメシア宣言に対する攻撃。
 - ②メシアなら十字架から降りて来い。
 - (5) イエスが十字架から降りていたなら、罪の贖いは達成されなかった。

Ⅲ. 午前 12 時から午後 3 時 神の怒りを体験する。

- 1. 午前 12 時から午後 3 時まで、全地が暗くなる。
 - (1) 日中の最も明るい時間に、暗黒が襲った。
- 2. 十字架上の第 4 の祈り
 - (1) 「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」
 - (2) 詩篇 22:1 の引用。当時の理解では、22 篇すべてを引用したことになる。
 - (3) 「父」(170 回)、「わたしの父」(21 回)
 - (4) ここでは、「わが神」と呼びかけている。
 - (5) イエスは霊的に死んだ状態になっている。
 - (6) 失敗者の祈りではなく、神に助けを求める祈り。
- 3. エリヤを呼んでいるとの誤解
 - (1) ヘブル語で、エリヤの短縮形はエリ。
 - (2) ひとりがイエスに酸いぶどう酒を差し出す。慈悲の行為であろう。
 - (3) イエスはそれを飲んだ(ヨハネ 19:30)。発声しやすいように。
- 4. 大声で叫んで、息を引き取る。
 - (1) ルカ 23:46 「父よ。わが霊を御手にゆだねます」
 - (2) 「父よ」 父なる神との関係が回復した。
 - (3) イエスは肉体に死を遂げる前に、霊的に死んで復活された。

5. 裂けた神殿の幕

- (1) 聖所と至聖所を仕切る幕。18 メートル×9メートル、手のひらほどの厚み
- (2) 旧約時代には、大祭司が年に一度だけ至聖所に入れた。
- (3) この幕が上から下に裂けた。
- (4) ヘブル 10:19～20
 - ①クリスチャンの自己認識が大切。
 - ②万人祭司の事実を理解する。

6. 開いた墓

- (1)大地震。墓が開いて、死んでいた聖徒たちの体が生き返った。
- (2)イエスが復活してから、彼らはエルサレムに入ってきた。
- (3)この現象をどう理解するか。
 - ①旧約時代に死んだ聖徒たちが永遠のいのちに甦ったというのではない。
 - ②ラザロの蘇生と同じ現象。その後、彼らがどうなったかの記述はない。
 - ③私たちが経験する甦りは、永遠のいのちへの甦り(Ⅰテサロニケ4章)。

7. 百人隊長とその部下たちの信仰告白

- (1) イエスの十字架と、その後の諸現象を目撃し、恐れを感じた。
- (2)「この方はまことに神の子であった」と言った。

結論

- 1. 私たちも信仰を告白しよう。
- 2. イエスの死は、私たちの死である。
- 3. イエスの復活は、私たちの復活である。

「マタイ 28 章」

イントロ:

1. 福音の内容 (I コリント 15:3～4)
 - (1) キリストは、私たちの罪のために死なれた。
 - (2) 葬られた。
 - (3) 三日目に甦られた。
2. 最終回のメッセージは、以上の3点を確認する。
 - (1) 十字架上の死は、すでに確認した。紀元 30 年ニサンの月の 15 日 (金)
 - (2) 埋葬。紀元 30 年ニサンの月の 15 日 (金) 日没前
 - (3) 復活。紀元 30 年ニサンの月の 17 日 (日)
3. きょうの箇所は、私たちにとってどういう意味があるか。
 - (1) 福音の内容を確認し、それが歴史的事実であることを信じる。
 - (2) 信じて永遠のいのちを受ける。

福音の3つの要素

I. 十字架上の死 ニサンの月の 15 日 (金) 午後3時

1. イエスの死の神学的意味
 - (1) 「完了した」とのイエスのことば。
 - ①請求書の額が完済された。
 - ②コロサイ2:13～14。
 - (2) 神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂けた。
 - ①旧約時代、大祭司だけが年に一度、至聖所に入ることができた。
 - ②新約時代、すべての人がキリストを通して神に近づく。
2. 十字架刑を遠くからながめている女たち (マルコ 15:40、ヨハネ 19:25 参照)
 - (1) マグダラのマリヤ
 - (2) ヤコブとヨセフ (小ヤコブとヨセ) の母マリヤ (クロパの妻)
 - (3) ゼベダイの子 (ヤコブとヨハネ) らの母 (マリヤの姉妹、サロメ)

II. 埋葬 ニサンの月の15日(金)午後3時から午後6時の間。

1. アリマタヤのヨセフ

- (1) 安息日に死体を放置することは考えられない。
- (2) この年の安息日は、「大いなる安息日」。
- (3) アリマタヤのヨセフは、イエスの体の下げ渡しをピラトに願った。
 - ①彼は隠れた弟子(当時の、イスラエルの残れる者)
 - ②アリマタヤ出身の金持ち。
 - ③他の議員たちの決定や行動に賛成していなかった。
- (4) イエスの体を亜麻布に包み、自分の墓に納めた。
- (5) ニコデモも、アリマタヤのヨセフと行動をともにした。「決断の時」であった。
- (6) マグダラのマリヤとほかのマリヤは、イエスの埋葬を行うつもりで見えていた。
 - ①安息日があけたら、埋葬を完了させるつもりで、香料と香油を用意した。
 - ②さらに、安息日があけると、香料と香油を買い足した。
 - ③イエスが復活するという予感はない。

2. 埋葬の神学的意味

- (1) イエスの「辱めの時」が終了した。
 - ①誕生
 - ②十字架の死
 - ③埋葬(愛する者がいない状態での埋葬)
- (2) 栄化の始まりとなった。
 - ①ピラトがイエスの体の下げ渡しを許したのは、恩赦である。
 - ②金持ちの墓に葬られた(イザヤ 53:9)。大きな石があるのは豪華な墓。

3. ニサンの月の16日(土)の出来事

- (1) 「三日三晩」とか「三日目に」の意味
 - ①72時間ではない。
 - ②金曜の午後から日曜の始まりまでの時間。
 - ③最短時間で、24時間プラスアルファ。
- (2) ユダヤ人の指導者たちの心配
 - ①「備えの日の翌日」とは、安息日のこと。
 - ②弟子たちがイエスの体を盗むのではないか。
 - ③「あの、人をだます男」(ユダヤ教の文献には、魔術で人を惑わせたとある)
- (3) ピラトの許可
 - ①番兵を出して3日間墓の番をする。
 - ②番兵たちは、墓石にX型にロープを張り、それを封印した。
 - ③ローマの封印を破る者は死刑になる。
 - ④番兵もまた、職務が失敗すると死刑となる。

Ⅲ. 復活 ニサンの月の17日(日)

1. 安息日が終わって、週の初めの日
 - (1) 日曜日という言葉はない。日没とともに週の初めの日が始まる。
 - (2) 女たちは、日没後、香料を買った(マルコ 16:1)。
 - (3) 墓に行ったのは、夜明け時。
2. 復活の記録について
 - (1) 細部に矛盾があるように見える。
 - (2) 細部に差異がありつつ、大筋において一致しているのは真実な証言の証拠である。
 - (3) 『日本人に贈る聖書ものがたり』第3巻で、復活の記録を時間順に並べている。
3. 開いた墓石
 - (1) 明け方、マグダラのマリヤと、ほかのマリヤが墓を見にきた。
 - (2) 大きな地震が起きた。2度目の地震。
 - (3) 主の御使いが天から降りてきて、石をわきに転がした。封印は破られた。
 - (4) 番兵たちは死人のようになった。
 - (5) 天使の顔はいなずまのように輝き、その衣は雪のように白かった。
4. 天使の御告げ
 - (1) イエスは甦られた。
 - (2) 弟子たちにこれを告げよ。
 - (3) イエスはガリラヤで弟子たちと会う。
5. イエス自身の命令
 - (1) 恐れてはいけない。
 - (2) わたしの兄弟たちに、ガリラヤに行くように言いなさい。
6. 復活物語は「でっち上げ」ではない。
 - (1) 女たちが最初の目撃者になっている。
 - (2) もし捏造であるなら、男たちが目撃者になっていたはず。
 - (3) 女たちが目撃者になっている理由は、その通りのことが起こったから。
7. 復活の神学的意味
 - (1) イエスが神の子であることが証明された(ローマ1:4)。
 - (2) 義認が保証された(ローマ4:24～25)。
 - (3) 信者の復活が保証された(Ⅱコリント4:14)。
 - (4) 奉仕の力が保証された(エペソ1:17～20)。

結論 マタイ 28:16～20 大宣教命令

1. ガリラヤで復活のイエスが現れる。
 - (1) 「ある者は疑った」
 - ①エルサレムで復活のイエスに出会っていたが、それでも信じられなかった。
 - ②かつて、弟子たちは疑っていた。
 - ③500人の弟子たちの中には、疑う者もいた。
 - (2) この言葉に、聖書の真実性が表現されている。
2. 大宣教命令が出された。
 - (1) 大宣教命令の根拠: 主イエスの権威
 - (2) 大宣教命令のゴール: 弟子とする。
 - (3) 大宣教命令を達成する方法: 3つある。
 - ①伝道
 - ②洗礼(父、子、聖霊の御名によって。他の洗礼との区別)
 - ③教える。
 - (4) 大宣教命令の保証: イエスがともにおられる。
(例話)リビングストン(1813～1873)の聖書